

〔論文〕

# 現代養生論

堀 毅

- 〈目次〉 まえがき
- I 益軒の《養生訓》
    - i 処世における心得
    - ii 養生の技術
    - iii 医道と哲学
  - II 現代医学における長寿論と養生論
    - i 長寿遺伝子に関する研究
    - ii 霊長類を用いた実験の成果と反論
    - iii 夢の秘薬？ レスベラトロール！
    - iv テロメアと不老不死
  - III 益軒翁の教訓
- あとがき

## まえがき

近年、様々な健康法が出版物やテレビなどで紹介され、漢方などのいわゆる代替・補完医療に対する見直しもなされ、ブームになっている。

人間の体質は個人により様々であるため、健康法には万人に共通な絶対的なものはないが、今日、紹介されている各種の健康法の最大公約数をとって見ると、①カロリーの摂取をおさえる②適度な運動、に集約されるであろう。ところが、これらは決して目新しいものではなく、既に江戸初期の学者によって唱えられていた。

貝原益軒は、広範な知識を基礎に処世や養生に関する著述を記した。

彼の遺した著作は人生万端にわたるものであるが、とりわけ、“腹八分に医者いらず”の名言は今日至るまで広く人口に膾炙している。

彼の名言は、簡約にして要領を得たものであるが、20世紀中葉以降の日本社会は経済の発展に伴い、飽食の時代に進み節度ある食生活は退歩していった。

現代では、カロリー過多と運動不足に起因するいわゆる“生活習慣病”が我が国社会に蔓延している。

高血圧と糖尿病は命の危険に直結する症状であり、いずれも、過食と運動不足という“悪しき習慣”のもたらしたものであるが、現実では病院で処方された薬を服用することが通例となっている。

また、近年、長寿遺伝子なるものが発見され、アメリカで発売されている特効薬を飲めば誰でも不老長寿が約束されるとの報道がなされた。

しかし、その“長命の術”なるものを種明かしすれば、本質的には益軒が述べた“腹八分”と変わるところはない。

要するに、膨大な費用と時間をかけてたどり着いた健康管理の結論の大筋は400年前に我が国の養生家が唱えた主旨と軌を一にすると言えるものであった。

本論では、まず、《養生訓》を通して貝原易軒の処世・養生に関する所論を紹介し、次いで、その理論の現代的意味を問いてみたい。

## I 益軒の《養生訓》

《養生訓》は江戸時代を代表する養生書であり、その評価は現代に至るまで変わることはない。

本書の特色を列挙すれば、以下のとおり。

まず中国における諸子百家の文献を広範に渉獵し、漢学者として高い素養を身につけながらも、一派に偏しない柔軟な学識を会得した。

益軒の所説は、読書による理論と医者としての実践により築き上げられているので、十分な説得力があり軽佻さは見られない。

第二に、中国や朝鮮の医療については、渡来人から常に新しい情報を収集し、本邦との違いについて分析を怠らなかった。

第三に、単なる健康指南書の範疇にとどまらず、生き方の根幹にかかわる哲学についても考究がなされている。

第四に、自著で述べているさまざまな養生法を自ら実践し、その結果、平均寿命40歳前後の当時において、84歳という長命を得ることができた。とかく世間で見られるような〈論語読みの論語知らず〉と異なり、ひとつひとつの養生法が彼自身の体験から出たものであるため、読者に対し十分な説得力を与えるものであった。

本書は9万余字の大作であり、述べるところは養生に限らず日常の行住坐臥の広範囲に及ぶ。

### i 処世における心得

益軒は広範な教養の上に、処世の精神論を明示している。

まず、人として最も大切なものは何か、と問いかけをなし、そこで、養生の肝要なることを説く。

巻頭の言葉で

人の身は父母を本（もと）とし、天地を初とす。天地父母のめぐみをうけて生まれ、また養はれたるわが身なれば、わが私の物にあらず。天地のみたまもの（御賜物）、父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひて、そこなひやぶらず、天年を長くたもつべし。これ天地父母につかへ奉る孝の本也。身を失ひては、仕ふべきやうなし。わが身の内、少なる皮はだへ、髪髪の毛だにも、父母にうけたれば、みだりにそこなひやぶるは不孝なり。

と、述べるが、この倫理は《孝經・庶人章》の〈身体髮膚、之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝のはじめなり〉に相通じるもので、ここに儒者としての益軒の一面が見られる。

人の天寿については、

人の身は百年を以て期（ご）とす。上寿は百歳、中寿は八十、下寿は六十なり。六十以上は長生なり。世上の人を見るに、下寿をたもつ人少なく、五十以下短命なる人多し。人生七十古来まれなり、といへるは、虚語にあらず。長命なる人すくなし。五十なれば不夭と云て、わか死にあらず。人の命なんぞこの如くみじかきや。これ、皆、養生の術なければなり。…

と、しっかりとした養生法を身につければ、百寿の長命も不可能でないと説く。<sup>(1)</sup>

さらに、

ここを以て養生の術を行なひ、いかにもして天年をたもち、五十歳をこえ、成べきほどは弥（いよいよ）長生して、六十以上の寿域に登るべし。

古人長生の術あることをいへり。また、「人の命は我にあり。天にあらず」ともいへれば、この術に志だにふかくば、長生をたもつこと、人力を以ていかにもなし得べき理あり。うたがふべからず。只気あらくして、慾をほしめまゝにして、こらえず、慎なき人は、長生を得べからず

と、勝手気ままで慎みのない生き方では、長命を全うすることなど覚束ない、と説く。

益軒の活躍した時代には、後藤良山による“一氣留滞説”香川修庵の“儒医一本説”，吉益東洞の“万病一毒論”吉益南涯の“氣血水”など、病気の原因についての議論が展開されていた。これらの説はいずれも病因（病気の原因）を厳しく追究するという性質を有していた。

益軒は、

養生の術は、先ずわが身をそこなふ物を去べし。身をそこなふ物は、内慾と外邪となり。内慾とは飲食の慾、好色の慾、睡の慾、言語をほしめまゝにするの慾と、喜・怒・憂・思・悲・恐・驚の七情の慾を云。外邪とは天の四氣なり。風・寒・暑・湿を云。内慾をこらゑて、少なくし、外邪をおそれてふせぐ、これを以て、元氣をそこなはず、病なくして天年を永くたもつべし。

と、内慾と外邪の二つの要素こそ健康を損ねる要因と説いた。

益軒の説は、いわば現代における予防医学に相当するもので、他の学者の説とは視点を異にするものであった。

人生の三樂については、

およそ人の楽しむべきこと三あり。一には身に道を行ひ、ひが事なくして善を楽しむにあり。二には身に病なくして、快く楽しむにあり。三には命ながくして、久しくたのしむにあり。富貴にしても、この三の樂なければ、

まことの楽なし。故に富貴はこの三樂の内にあらず。もし心に善を樂まず、また養生の道をしらずして、身に病多く、そのはては短命なる人は、この三樂を得ず。人となりてこの三樂を得る計なくんばあるべからず。この三樂なくんば、いかなる大富貴をきはむとも、益なかるべし。

と、健康がすべてに優先することを説く<sup>(2)</sup>。

処世において、未病を治する心得については、

養生の要訣一あり。要訣とはかんようなる口伝也。養生に志あらん人は、これをしりて守るべし。その要訣は少の一字なり。少とは万のこと皆少なくして多くせざるを云。すべてつつまやかに、いはゞ、慾を少なくするを云。慾とは耳・目・口・体のむさぼりこのむを云。酒食をこのみ、好色をこのむの類也。およそ慾多きのつもりは、身をそこなひ命を失なふ。慾を少なくすれば、身をやしなひ命をのぶ。

と、日々の生活での様々な事象に対し控えめに、そして、慾を慎むことを説いている。

東洋の思想においては、学派の領域を越えて、“少慾”“知足”などが説かれているが、益軒はこれを養生の中核においている。

さらに、少慾の具体的内容については、

慾を少なくするに、その目録十二あり。「十二少」と名づく。必ずこれを守るべし。食を少なくし、飲ものを少なくし、五味の偏を少なくし、色欲を少なくし、言語を少なくし、事を少なくし、怒を少なくし、憂を少なくし、悲を少なくし、思を少なくし、臥事を少なくすべし。かやうにことごとくに少すれば、元氣へらず、脾腎損せず。これ寿をたもつの道なり。十二にかぎらず、何事も身のわざと欲とを少なくすべし。一時に気を多く用ひ過し、心を多く用ひ過さば、元氣へり、病となりて命みじかし。

と、具体的項目を掲げるが、これは、益軒が心の師と仰ぐ、孫思邈の《千金方》を拠りどころとしている。

物ごとに数多く、はゞ広く用ゆべからず。数少なく、はばせばきがよし。孫思邈が『千金方』にも、養生の「十二少」をいへり。その意同じ。目録はこれと同じからず。右にいへる十二少は、今の時宜にかなへるなり<sup>(3)</sup>

“慾”については、養生の根幹においている。

おもひを少なくして神を養ひ、慾を少なくして精を養ひ、飲食を少なくして胃を養ひ、言を少なくして気を養ふべし。これ養生の四寡なり。

## ii 養生の技術

養生などは、隠居老人や職を持たない暇人がなしうるもので、現役の役人や日常の仕事に忙しい者にとってはなかなかできるものではないという異論に対しては、

或人の曰く、養生の術、隠居せし老人、また年わかくしても世をのがれて、安閑無事なる人は宜しかるべし。士として君父につかへて忠孝をつとめ、武芸をならひて身をはたらかし、農工商の夜昼家業をつとめていとまなく、身閑ならざる者は養生成りがたかるべし。かかる人、もし養生の術をもつばら行はば、その身やはらかに、そのわざゆるやかにして、事の用にたつべからずと云。これ養生の術をしらざる人のうたがひ、むべなるかな。

養生の術は、安閑無事なるを専（もつばら）とせず。心を静にし、身をうごかすをよしとす。身を安閑にするは、かへつて元氣とどこほり、ふさ

がりて病を生ず。

と述べ、養生法といっても、特別な方法に頼ることなく、単に気持ちをリラックスし、体は出来るだけ動かせばよいとしている。

また、日々の養生を保つ条件として、

凡そ、よきこと悪しきこと、皆ならひよりおこる。養生のつゝしみ、つとめもまたしかり。つとめ行ひておこたらざるも、慾をつゝしみこらゆることも、つとめて習へば、後にはよきことになれて、つねとなり、くるしからず。またつゝつしまずして悪しきことになれ、習ひ癖となりては、つゝつしみつとめんとすれども、くるしみてこらへがたし。

と、養生の道は、悪しき癖を改め、慾を慎むという習慣を身に着けることに尽きると説いている。

現代の養生家の日野原重明氏は、従来の成人病という呼称を改め、生活習慣病と称したが、人の健康において、日々の生活習慣の積み重ねが如何に重要かという点は、すでに益軒により指摘されている。

養生の極意については、

孫子が曰く〈よく兵を用る者は赫々の功なし。云意は、兵を用る上手は、あらはれたるてがら（手柄）なし、いかんとなれば、兵のおこらぬさきに戦かはずして勝ばなり。〉また曰く〈古の善く勝つ者は、勝ち易きに勝つ也。〉養生の道も、またかくの如くすべし。心の内、わづかに一念の上に力を用て、病のいまだおこらざる時、かちやすき慾にかてば病おこらず。良将の戦はずして勝やすきにかつが如し。これ上策なり。これ未病を治するの道なり。

とあり、戦わずして勝つことが上策であることを例示し、養生においても、



病気を予防することがすべての治療に勝ると説いている。

近年、我が国においても、ようやく“予防医学”の概念が定着してきたが、国民の意識の中で、この意識はまだ低水準の域を脱していない。すなわち、暴飲暴食・糖や塩分の食事・喫煙・運動不足・ストレスにまみれた生活環境など、非健康的な生活習慣を改めない人が如何に多いことか。また、多くの人は、健康診断で要注意のサインを告知されても、病院で処方された薬を服用すれば、万事事足りると思違いし、日々の節制には努力を惜しむ。

《養生訓》のなかで、慾を慎むことに関し多くの紙幅が割かれているが、その要点につき、

養生の道、多くいふことを用ひず。只飲食を少なくし、病をたすくる物をくらはず、色慾をつゝしみ、精気をおしみ、怒・哀・憂・思を過ぎず。心を平にして気を和らげ、言を少なくして無用のことをはぶき、風・寒・暑・湿の外邪をふせぎ、また時々身をうごかし、歩行し、時ならずして眠り臥すことなく、食気をめぐらすべし。これ養生の要なり。

と簡明に述べている。とりわけ、食に関しては次なる一節が示されている。

珍美の食に対すとも、八九分にてやむべし。十分に飽き満るは後の禍あり。少しの間、慾をこらゆれば後の禍なし。

この一節は、後世に至るまで〈腹八分に医者いらす〉という格言としてよく知られている。

ところで、益軒が生きた江戸時代初期の庶民の生活は、衣食住において今日では想像もつかないほど乏しいもので、飽食による肥満は極めて例外的にしか、存在しなかった。

戦後においても、昭和30年代までは、栄養不良こそ問題視されていたが、

肥満はむしろ豊かさの象徴ですらあった。

昭和30年代の新聞広告などでは、体重を増すための温灸器具や食欲増進サプリなどが幅をきかせていた。今日では、それと正反対に、ダイエットに関する広告が全盛である。

このように時代的要素を考慮すると、“腹八分”に始まる格言は、江戸時代においてはごく限られた人が対象とされていたのに対し、飽食の現代においてこそ、何倍、否、何十倍の意義を有するといえよう。

### ○薬と養生

薬の服用については、しっかりとした見解を持っている。まず、

孫思邈曰く、〈人、故なくんば薬を餌べからず。偏に助くれば、藏気不平にして病生ず〉。

と、服薬は極力慎むべしとのべ、次いで、

劉仲達が《鴻書》に、〈疾あつて、もし名医なくば薬をのまず、只病のいゆるを、しづかにまつべし。身を愛し過し、医の良否をゑらばずして、みだりに早く、薬を用ることなかれ。古人、病あれども治せざるは中医を得る〉と云、この言、至論也といへり。庸医の薬は、病に應ずることは少なく、応ぜざること多し。薬は皆、偏性ある物なれば、その病に應ぜざれば、必ず毒となる。

と、薬の毒性にまで言及している。さらに、長寿薬に関しても、

丘處機が、〈衛生の道ありて長生の薬なし〉といへるは、養生の道はあれど、むまれ付かざるいのちを、長くする薬はなし。養生は、只むまれ付たる天年をたもつ道なり。古の人も術者にたぶらかされて、長生の薬とて

用ひし人、多かりしかど、そのしるしなく、かへつて薬毒にそこなはれし人あり。これ長生の薬なき也。久しく苦勞して、長生の薬とて用ゆれども益なし。信ずべからず。

### iii 医道と哲学

益軒は《養生訓》の巻頭で、父母に対する“孝道”を掲げ、儒教倫理は全篇を通じ随所に見られるが、本書を熟読すると、彼の思想は、儒教一辺倒ではなく、和漢の叡智を幅広く包摂していることが理解される。

諸子百家に代表される中国の思想は、相反する論理も混合しつつ熟成されており、そのような社会で育った教養人は、自ずと複眼的な見方が会得される。

益軒の学は、朱子学を基としているが、陽明学にも理解を示し、儒学以外の易学・兵学・老荘思想・陰陽五行思想などにも心を砕き、柔軟な思考を本分としていた。

益軒の人生観は、生存競争に打ち克ち、立身出世を成し遂げるというものでなく、むしろ、個人としての幸福・快樂を追求するものであった<sup>(4)</sup>。

ただし、医術を専業とする医家に対しては、高度な専門知識と、崇高な職業倫理を要求する。

#### ○ “医は仁術”

現代において、医者の仕事は“仁術”か“算術”と論議されるが、この命題は、すでに、江戸期に提示されていた。

医は仁術なり。仁愛の心を本とし、人を救ふを以て、志とすべし。わが身の利養を専に志すべからず。天地のうみそだて給へる人を、すくひたすけ、万民の生死をつかさどる術なれば、医を民の司命と云、きはめて大事の職分なり。他術はつたなしといへども、人の生命には害なし。

医術の良拙は人の命の生死にかゝれり。人を助くる術を以て、人をそこなふべからず。学問にさと(5)とき才性ある人をゑらんで医とすべし。

医は、仁心を以て行ふべし。名利を求むべからず。病おもくして、薬にて救ひがたしといへども、病家より薬を求むる事切ならば、多く薬をあたへて、その心ををなぐさむべし。わがよく病を見付て、生死をしる名を得んとて、病人に薬をあたへずして、すてころすは情けなし。医の薬をあたへざれば、病人いよいよちからをおとす。理なり。あはれむべし。

### ○医師の資質

江戸期においては、医師の国家試験などはなく、医師のレベルは様々であった。

幼少のころから漢籍に親しみ医学書を修得し、名医のもとで臨床を経験した者から、失業浪人が糊口をしのぐため町医者を開業するものまで、その資質たるやまさにピンキリであった。

益軒は、仁術を旨とする医道が本筋から外れている状況につき、警告を発する。

凡そ医となる者は、先ず儒書をよみ、文義に通ずべし。文義通ぜざれば、医書をよむちからなくして、医学なりがたし。また、経伝の義理に通ずれば、医術の義理を知りやすし。

さらに、彼が崇拜する孫思邈の言を引用し、

凡そ大医と為るには、先ず儒書に通ずべし。・・・易を知らざれば以て医と為る可からず。

と、儒学・易学の素養無き者は医師の資格はない、とまで言い切る。<sup>(6)</sup>

医を学ぶに、殊に文学を基とすべし。文学なければ、医書をよみがたし。医道は、陰陽五行の理なる故、儒学のちから、易の理を以て、医道を明らむべし。しからざれば、医書をよむちからなくして、医道をしりがたし。)

と、孫思邈の所論に賛同している。

益軒は、医学を修得するに際し、日本と中国の格差について言及する。

日本の医の中華に及ばざるは、まづ学問のつとめ、中華の人に及ばざれば也。ことに近世は国字(かな)の方書多く世に刊行せり。古学を好まざる医生は、からの書はむづかしければ、きらひてよまず。かな書の書をよんで、医の道これにてこと足りぬと思ひ、古の道をまなばず。これ日本の医の医道にくらくして、つたなきゆへなり。むかしの伊路波(いろは)の国字(かな)いできて、世俗すべて文盲になれるが如し。

格差の生じる要因として、日本において仮名文字が考案されたため、医学のテキストたる漢籍を読解する能力が減退したことを指摘している。

我が国の歴史における仮名の普及は、一長一短あって、一概にその得失を即断できないが、江戸期の医学にとっては、確かにマイナスの要因であった。換言すれば、生をたまわり教育を受ける地が、本邦であるか或いは中国であるかにより、医学を修得する上で、決定的なハンデが生じるのである。

本邦では、医師としての修養をする上でハンデがあるので、それを克服するため、心を専一にし、医道に励む必要を説く。また、

医となる者、家にある時は、つねに医書を見てその理をあきらめ、病人を見ては、また、その病をしるせる方書をかながへ合せ、精(くわ)しく

心を用ひて薬方を定むべし。病人を引うけては、他事に心を用ひずして、只、医書を考へ、思慮を精（くわ）しくすべし。凡そ医は、医道に専一なるべし。他の玩好あるべからず。専一ならざれば業精（くわ）しからず。

と、医道を志す者にとって、趣味・道楽などは嗜むべきでないと述べる。

益軒の処世観は、“人生はあくまで楽しむべし”に尽きるが、こと医家に対しては、その例外で、趣味道楽にうつつを抜かしている暇があったら、日々、医書を読み資質の向上に努めるべしと説いている。

すなわち、医家とは、自己犠牲の上に立つ“聖職者”たる宿命を負っていることを肝に銘じておくべし、との強いメッセージが読み取れる。

むかし、日本に方書の来りし初は、『千金方』なり。近世、医書板行せし初は、医書大全なり。この書は明の正統十一年に熊宗立編む。日本に大永の初来りて、同八年和泉の国の医、阿佐井野宗瑞、刊行す。活板也。正徳元年まで百八十四年也。その後、活字の医書、やうやく板行す。寛永六年已後、扁板鏤刻（るこく）の医書漸く多し。

## ○中国の名医

益軒は中国の名医について、

張仲景は、百世の医祖也。その後、歴代の明医すくなからず。各発明する処多しといへ共、各その説に偏僻の失あり。取捨すべし。孫思邈は、また、養生の祖なり。『千金方』をあらはす。養生の術も医方も、皆、宗とすべし。

と、張仲景と孫思邈の名を挙げる。

《養生訓》の文中における中国の学者は張仲景と孫思邈兩名に限られたものではないが、益軒が最も高く評価した人物こそ、唐の孫思邈にほかならない。

孫思邈の学識につき、

老、莊、を好んで異術の人なれど、長ずる所多し。

医生にすゝむるに、儒書に通じ、易を知るを以てす。盧照鄰に答へし数語、皆、至理あり。この人、後世に益あり。医術に功あること、皇甫謐、葛洪、陶弘景等の諸子に越たり。寿（いのち）百余歳なりしは、よく保養の術に長ぜし効（しるし）なるべし。

と、儒学・易学などを基礎に築かれながらも、究極的には“老莊”の学を旨としていることを示す。

“老莊”の学は、江戸時代の日本では正統と言えるものではなかったが、学理の深さでは儒教を凌駕するものであった。

さて、既述の小慾・知足の概念は“老莊”の学の基本思想であり、《養生論》でも繰り返し説かれている。

本書の分析を進めていくうちに、益軒は表面的には儒教を標榜しながらも内実では老莊を信奉していることが明らかにされる。

本文で説かれている“腹八分”も、老莊に由来するもので、孫思邈の影響がこの書に深く浸透している。

## II 現代医学における長寿論と養生論

今から約2,200年前、中国の秦王は国家を統一し、始皇帝となり天下に号令した。その次の目標は“不死の妙薬”を手に入れることであった。

そのため、様々な手段を弄し不老長寿へ挑んだが、却って命を縮めることになった。

“不老長寿”実現することは、人類にとって果てしなき夢であり、現代医学における最大級の課題である。

20世紀に入り、ヒトの寿命は大幅な伸びを示し、一部の国や地域では平

## ☆百寿者の年次推移

年度	百歳以上の数	指数※
1870年	310人	100
1980年	968人	312
1990年	3,298人	1,064
2000年	25,545人	8,240
2010年	44,499人	14,354
2011年	47,756人	15,405
2012年	51,376人	16,573
2013年	54,397人	17,547
2014年	58,820人	18,974

※2007年を100とする指数

出典：《厚生労働省労働局高齢者支援課報道資料》

均寿命が80歳を超え、いわゆる“百寿者”も、決して珍しい存在ではなくなってきた。

しかしながら、悪性新生物（ガン）・心疾患・脳血管疾患などの疾病は、依然として“不老長寿”の壁に立ちはだかる。

ところが、近年、権威ある研究機関から、“不老長寿の妙薬の発見”が公表され、信頼あるマスコミでも数次にわたり紹介され、一般人の関心も高まりを見せ論争も盛んに展開されているので、その一斑に触れてみよう。

### i 長寿遺伝子に関する研究

1930年代、コーネル大学のマッケイ博士らは長寿遺伝子に関する研究に先鞭をつけた。

当初はラットを用い、カロリー制限と寿命の関連を研究していたが、やがて対象を人に近いサルにまで広げていった。

マサチューセッツ工科大学で分子生物学を専攻するレオナルド・ガレンテ博士は、1991年、酵母菌の細胞を用いて長寿遺伝子の研究を始め、8年後に生物の寿命と密接な関連ある遺伝子を特定した。<sup>(7)</sup>

長寿遺伝子という用語は、近年、注目を浴びているが、必ずしもサーチュ



イン遺伝子に限定されるものではない。すなわち、ヒトを含めた生物の寿命を延ばす方法には“不死の妙薬”から“神に祈る”まで、多様であるが、遺伝子およびタンパク質に限定すると、①長寿遺伝子②抑制遺伝子に大別される。

- ①長寿遺伝子はさらに、サーチュイン遺伝子・Klotho遺伝子などがあり、  
②抑制遺伝子は、TOR・成長ホルモンなどがある。

サーチュイン遺伝子は、Sirt 1・Sirt 2・・・Sirt 7などが認められている。1990年、ガレンテ博士が酵母菌の細胞を用いた研究はSirt 2を対象とした。その後、ヒトに対してはSirtメインとなっている。その後、線虫やマウスにもこの物質の存在を認め、それを活性化することにより、寿命が大幅に伸びるという結果を得た。

さらに、ヒトにも、サーチュイン遺伝子と同じ働きをもつ遺伝子が存在することを明らかにした。

しかし、サーチュイン遺伝子の存在そのものが明らかにされただけでは、研究はまだ道半ばの状況であった。なぜならば、この遺伝子は、普段は休眠状態で、なにかの働きかけをししないとスイッチがONとならない。そこで、次の課題は、如何にしてそれをONにし、活性化するかという点であった。

博士は、ここでも酵母菌を用い、摂取カロリーを制限することによりサーチュイン遺伝子の活性化を実現した<sup>(8)</sup>。

さらにマウスについても実験を行い、同様の結果を得た。

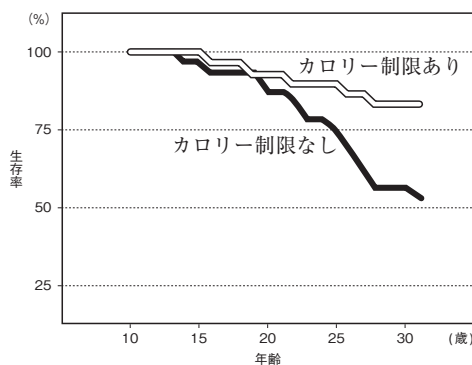
ただし、ヒトに関しては、極端なカロリー制限は、身体の他の機能に悪影響を及ぼす危険性も併せ持つものであり、慎重であるべきと述べた<sup>(9)</sup>。

心がけるべきは、むしろバランスのとれた食事を摂ることで、それが、寿命を延ばすに有効であることを示唆した。

## ii 霊長類を用いた実験の成果と反論

ガレンテ博士がマサチューセッツ工科大学でサーチュイン遺伝子の研究を進めている間、それとは別個に、アメリカの研究機関と大学とで、食事が長

図1 20年間飼育したアカゲザルの生存率



出典：R.J. Colman, Science [2009]

寿遺伝子に及ぼす影響についての研究が進められていた。

1989年、米ウィスコンシン国立霊長類研究センター（Wisconsin National Primate Research Center：以下、WNPRCと略記）が、ヒトに近いアカゲザルを使う研究に取り組み、その結果を、2009年に《SCIENCE》誌に発表した。

研究チームは、76頭のアカゲザルを二つのグループに分け、一方には、カロリー制限せずに餌を食べさせ、他のグループには摂取カロリーを30%減量し、両者の違いを測定した。

2009年、20年間の研究成果が発表されたが、その結果は、顕著な数値を示したWNPRCにおける実験結果は、マスコミなどにより日本にも伝えられ、健康志向の一部に知られるようになった。<sup>(10)</sup>

さて、WNPRCにおいてサルを使って20年余の期間を費やしてのプロジェクトは全人類共通の願望であった“不老長寿”に一筋の光明をもたらした感があったが、実は、アメリカの国立老化研究所（National Institute on Aging, 以下、NIAと略記）が1987年に始めた研究）で、ほぼ同時期に、また、同じような手法で、食事の摂取と長寿遺伝子との関係についての別個のプロジェクトが進行していた。NIAでは、1987年からアカゲザルを使った20年以上の期間を費やし実験を行った。

二つの機関による研究の結果が、大筋で軌を一にするものであったならば、問題はなかったが、両者の結果は相反するものであった。

WNPRCの結論が、“不老長寿”に道を拓くという点で夢が有るのに対し、NIAは、それを真っ向から否定するものであった。

一部の研究者は、NIAの論文に注意したが、大方はマスコミで報道された内容を覆すような意見には大きな関心を示さなかった。

我が国のマスコミでは、カロリー制限と長寿遺伝子の相関性を大々的に伝えているが、それを疑問視する論文・レポートなどはほとんど目にするのではない。ところが、近年、注目すべき論文・レポートが発表されている。

既述のとおり、1987年からNIAのジョージ・ロス博士の研究室で、サルを使った実験が進められていたが、当時、一人の日本人研究者・石神昭人氏が、ロス博士のもとでポストクとして研究に従事していた。<sup>(11)</sup>

石神氏は、この分野の研究の現況を、国内の雑誌に投稿し、問題の所在を明示している。<sup>(12)</sup>

#### ☆石神氏の報告の要旨

NIAの研究グループは、アカゲザルを、カロリー制限を老齢（16～23歳）から開始した群（カロリー制限群と自由摂取群）と若齢（1～14歳）から開始した群（カロリー制限群と自由摂取群）の2つのグループに分ち、それぞれの生存率を調べたり、オスとメスの平均寿命の差異、更に、代謝機能などについて、多方面から詳しい実験データを取り、分析を進めた。

その結果、カロリー制限の寿命に対する結果において、WNPRCとNIAの実験で相反する結果が生じた。<sup>(13)</sup>

石神氏は、この論争につき、サルを使ったプロジェクトが終了するには、あと10年近くの年月が必要とされるので、その結果を最後まで見届けていきたいと、将来に対する期待を込めてレポートを結んでいる。

### iii 夢の秘薬？ レスベラトロール！

2006年、マサチューセッツ工科大学のガレンテ博士の研究室のポスドクであったデービッド・シンクレアは、マウスを使った実験で、サーチュイン遺伝子の働きを人工的にONにする物質を特定した。その物質こそ、レスベラトロールである。

この成果は、英国の科学雑誌《Nature》でとりあげられた。

1か月あたり、わずか20～30ドル（邦貨で2000～3000円ほど）のサプリメントを購入すれば、寿命が10年～20年延びるというキャッチフレーズは、多くのアメリカ人の心を捉え、レスベラトロールは商品として大きなマーケットを形成した。

デービッド・シンクレアは、サーチュリスという企業を立ち上げ、2007年には、NASDAQ（全米証券業者協会）に上場した。その会社は、翌年、7、2億ドルで大手の製薬会社に売却された。<sup>(14)</sup>

長寿遺伝子に対するレスベラトロールの効果が、額面通りであればまさに、世紀の一大発見である。

しかし、専門家の見方は一様ではない。

シンクレアのポスドク時代の指導教授であったガレンテ博士は、〈Sir 2 遺伝子を活性化する医薬品（長寿薬）の開発は可能だが、食事の摂取カロリーを控え、定期的にエクササイズし、自らのSir 2 遺伝子を活性化している人より、その長寿薬を飲んだ人の方が長生きになることはないだろう〉と、レスベラトロールというサプリメントを過信することに対し異議を呈している。<sup>(15)</sup>

長寿遺伝子を活性化し、寿命を延ばす手段は、カロリー制限と適宜な運動が主で、レスベラトロールというサプリの服用はあくまでも副次的であるに過ぎない、ということがガレンテ博士の真意であった。

シンクレアの論文が発表されて以来、レスベラトロールはサーチュイン遺伝子を活性化するためのサプリというイメージが強いが、その効用はそれのみに留まらず、多方面の効果が紹介されている。

坪田一男教授・澤登雅一教授により紹介されている効果は、メタボ対策・糖尿病対策・動脈硬化対策・認知症対策・ED対策・ガン・放射線障害・目の老化・運動不足対策・美肌効果など多様である。<sup>(16)</sup>

NHKは、2011年6月12日、総合チャンネルのNHKスペシャル〈あなたの寿命は延ばせる～発見！長寿遺伝子～〉という番組で、長寿遺伝子とカロリー制限の問題をとりあげ、一般人の関心を喚起した。

NHKでは、その後、同番組の2回にわたる再放送に加え、科学番組でも相次いで特集を組み、ブームは更に加熱していった。<sup>(17)</sup>

ところが、NHKで放送された番組は、専門家による十分な監修がなされていなかったため、視聴者に〈レスベラトロールさえ摂っていれば誰でも健康長寿になれる〉という誤った認識を抱かせることとなった。その結果、多くの視聴者は、先を争ってレスベラトロールの購入に走った。

#### ◇番組の概要

番組は、2000年、ボストンのマサチューセッツ工科大学のガレンテ博士によるサーチュインの発見の経緯に始まり、次いで、メアリーウッド大学のスモリガ博士が、この遺伝子により、近いうち、誰でも100歳まで生きることが可能となるであろう、と予測を立てたことから展開される。

そして、その寿命を延ばす遺伝子を活性化するにはどうしたらよいか？という問いかけを行う。

#### ●アメリカにおける動向

##### ☆サルによる実験

ウィスコンシン大学のリッキー・コールマン博士たちは、サルを用いた実験で、老化を遅らせるスイッチをONにする方法を見つけた。カロリー制限を行い、サーチュイン遺伝子の働きをONにすれば、そのグループの20年後の生存率80%、OFFのままならば、生存はわずかに20%という結果を得た。

ウィスコンシン大学のリチャード・ワインドラック博士は20年間にわたるサルを使った実験で、えさの成分は同じで、量については30%減らしたと

ころ、老化予防に顕著な結果を得た。すなわち、カロリー制限は単なる健康的な食事ではなく、体に備わっている老化を遅らせるメカニズムをはたかせ、健康で長寿を実現する手段である。

サルの実験を通じて、次のような結果を得ることができた。

老化に伴いミトコンドリアが弱り、活性酸素という有害物質を出す。活性酸素は人体の様々な部位に影響を与えるが、脳の神経細胞を壊すと、健忘症・認知症などを引き起こす。

ところが、カロリー制限を行い、長寿遺伝子が働くと、ミトコンドリアの中で活性酸素を消す物質が盛んに作られるため、若々しくなる。<sup>(18)</sup>

#### ☆アメリカ・カロリー制限協会

20代から80年にわたりカロリー制限を行っている。

カロリー制限によって若返り。注；この協会は1992年に設立2004年の時点で1200人の会員を擁していた。

研究成果として、①カロリー制限が糖尿病と心臓病のリスクを減らすこと。②ガンに関する危険性を減らすことを公表。

#### ●日本（および在外日本人）における研究動向

金沢医科大学では、4人の一般人を対象に、カロリー制限で遺伝子が働くかという実験を行った。

プログラムの内容は、次の通り。

1日のエネルギー量が2650kcalのとき25%のカロリー制限を実施すると、1990kcalとなり、これをもとに3週間・7週間かけてサーチュインの増減と筋肉のミトコンドリアの状態を調べる。

3週間後の結果；サーチュイン酵素については、各々、1.4倍・2.1倍・4.1倍・4.6倍増加、筋肉のミトコンドリアは31%UP。

7週間後の結果；4人とも、サーチュイン遺伝子の働きがONとなり、10倍・6倍UP。<sup>(19)</sup>

#### ・今井眞一郎博士の仮説

2000年のサーチュイン遺伝子発見に際し大きな役割を果たした博士は、

ワシントン大学移り、研究に携わっているが、進化の過程で生き延びてきた要因は飢餓である、と看破した<sup>(20)</sup>。

20億年ほど前、ヒトの祖先がまだ単細胞生物であった頃、飢餓は生物にとって最大の脅威であった。

ある時、老廃物を掃除する働きを持った遺伝子が突然変異で生まれた。老廃物がなくなり老化が遅れ飢餓を生き延びることができた。

これがサーチュイン遺伝子誕生のプロセスである。

その後、この遺伝子は細胞の中を掃除するに留まらず、100種類近くの老化の因子を抑え込む指揮者となった<sup>(21)</sup>。

### ●レスベラトロールについて

カロリー制限が健康増進に効果のあることは、誰でも認めていることであるが、それは一生継続する必要がある。中断しては意味がないということとは理解しながらも、初志を貫くことは容易ではない。

それでは、カロリー制限と適度の運動などの生活習慣上の努力をせずに、サーチュイン遺伝子をONにするという方法はあるのであろうか。

これこそレスベラトロールである。

ペンシルバニア州スクラントンのメアリーウッド大学のジェームス・スモリガ博士は、〈このサプリをわずか1か月間摂取しただけで、血管の柔軟性は6ポイントUPし、記憶力も5ポイント向上した〉と報告。

スイス連邦工科大学ローザンヌ校のヨハン・オーワックス博士は、カロリー制限を行ったマウスと行わなかったものを分け、その効果を測った。その結果、筋肉のミトコンドリアについては2倍、持久力に関しても2倍の向上が認められた、と発表。

2匹のマウスが走行機を並んで走る動画は、直ちにNET配信され、全世界に大きなインパクトを与えた。

アメリカの薬局では、100種類ものレスベラトロールのサプリが店頭に並び、その価格は1か月あたりで2000～3000円だ。

アメリカでも、ヒトに対する効果は保証されていないが、メアリーウッド

大学のジェームス・スモリガ博士〈長寿薬を作るのは可能で、ヒトの平均寿命は100歳になる〉と予測する。

アメリカにおけるレスベラトロールの市場は年間で300億円見込まれている。

そして、この“長寿薬”に、自身の寿命を託する人まで現れている。  
が実現したら何が起きるであろうか？

カリフォルニア州のナディア・カイロウ（58歳・女性）の例：  
〈2年前から毎朝1錠のレスベラトロールを飲んでいる。  
以前は、健康維持のため控えめな食事を心がけていたが、レスベラトロールを飲み始めてから、カロリーは全く気にしなくなった。サプリが効くかどうかはハッキリしないが、その効果を信じることにした。  
カロリー制限などしたら、今後、食べる楽しみはなくなってしまう。私は、レスベラトロールを飲んで生き続ける道を選んだ。〉

この番組は48分で構成されるが、そのうち38分間はサーチュインに関する科学的裏付けのある内容で、十分評価できる。ただし、終盤の10分間は

〈食生活は今までどおりに十分堪能しよう。  
そして、レスベラトロールを摂ろう。  
それだけであなたは長生きができる〉

という論調に終始する。

#### ◇番組の問題点

レスベラトロールの効用を過大に宣伝することは、サーチュイン遺伝子研究の先駆者の真意に反するものであった。



番組の内容が科学性に欠如している旨は、加齢医学界の第一線の研究者である坪田一男博士により公式に抗議された。<sup>(22)</sup>

NHKでは、番組の内容に誤りがあったことは認めながら、その後、公式には謝罪や内容の訂正はなされていないようである。

今日でも“不老不死”の夢をこのサプリに託す人は少なくない。

2012年には、山中伸弥博士iPS細胞の研究がノーベル医学生理学賞を受け、また、2013年には、さらに劇的な万能細胞が話題を呼び、一般人の興味はそちらの方に移り、レスベラトロールを巡る関心は落ち着きをみせた。

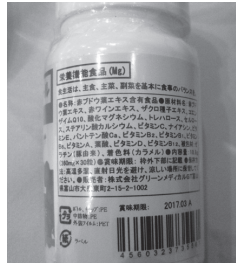
#### ☆レスベラトロールの成分

レスベラトロールは主に、ネットを通じて販売されている。その容器には、赤ぶどうのエキスなどの成分が明示されている。

これには、フレンチ・パラドックスと知られるポリフェノールの成分が含まれる。

エスエス製薬は、赤ブドウ葉から抽出された天然成分を有効成分とする西洋ハーブ医薬品を開発し、“アンチスタックス”というという商品名で販売

#### ※レスベラトロールの成分を示すパッケージ



錠剤



(23)  
した。

今日では、アンチスタックスは“一般用医薬品”として、厚生労働省の承認を受け、販売されている。

既述のとおり、レスベラトロールが開発されてからは日が浅いが、アンチスタックスの主成分・ブドウ葉の歴史は、数万年を遡るといわれている。<sup>(24)</sup>

また、1948年刊行のフランスのP.フルニエによる薬草本に、タンテュリエというブドウ品種の赤い葉が、血管の疾患治療に有効だと記載され注目を浴びた。

その後、1953年に赤ブドウ葉に関する最初の研究がフランスで行われ、1996年にフランスの薬に関する基準書「フランス薬局方」に記載された。2010年には、欧州医薬品庁（EMA）の生薬製品委員会（HMPC）により採択された最終版が薬の規格書であるモノグラフに収載された。（ブドウ葉の歴史はエスエス製薬のホームページ参照<sup>(25)</sup>）

#### ◇レスベラトロールの効果の対する疑問

サーチュリス（Sirtris）社は、デービッド・シンクレアが設立し、その後、他社に売却されたが、その会社は、もとよりサーチュイン活性化物質の開発を目的とする。ところが、2011年、レスベラトロールに関し、サーチュイン活性化には効果がないとして臨床開発を断念したと報道されている。<sup>(26)</sup>

レスベラトロールだけに頼ろうとするのは間違いであることは、金沢医科大学の古家大祐教授も指摘。〈レスベラトロールを飲んでいいるから大丈夫〉と過信して暴飲暴食をすると、mTOR（エムトル）が活性化。異常なたんぱく質を処理する能力が低下し、老化を進める。<sup>(27)</sup>

また、2014年、米ジョンス・ホプキンス大学の医師が「効果に疑問あり」との調査結果を発表した。<sup>(28)</sup>

#### ☆サーチュイン遺伝子の活性化とレスベラトロールの効用

サーチュイン遺伝子の活性化とレスベラトロールの効用に関する問題を総括すると、いくつかのエポックメイキングが認められる。

第一は、WNPRCにおけるアカゲザルを使った実験データが、極めて明解な画像で公開されたことにより、一般の関心が大いに喚起された。

第二は、カロリー制限によりサーチェイン遺伝子が活性化されたとするネズミの動画がネットを通じて世界に広く発信されたことである。

この実験は、あくまでもカロリー制限によるサーチェイン遺伝子の活性化効果を伝えるものであり、本来はレスベラトロールとは無関係であったが、〈レスベラトロールを飲めば、サーチェイン遺伝子が活性化する〉という、命題と重なり、欧米を中心としてレスベラトロールが一大ブームとなるきっかけとなった。

第三は、NHKにおいて、アカゲザルとマウスの映像を含む、番組が報道されたこと。

坪田教授が述べている如く、レスベラトロールには多様な効能がある。

しかし、一時期、レスベラトロールの効果を誇大に謳った報道がなされたため、このサプリの効能が独り歩きすることとなった。

#### ☆レスベラトロールと筋力・持久力UP

テレビ番組における、二匹のマウスによる映像は世界に大きな衝撃を与えた。一匹はサーチェイン遺伝子が活性化したもので、他方は普通のマウスである。遺伝子が活性化したものは、筋力と持久力において、いずれも2倍の効果が認められたと報告されている<sup>(29)</sup>。

では、現実の問題として、このような結果が認められるであろうか。もし、ヒトにおいても、体力の向上が見込まれば、多くのアスリートはレスベラトロールを摂ることにより、記録の向上を目指すであろう。

永年、駅伝の名門校中央学院大学において指導にあたっている川崎勇二教授に、このサプリ関し、尋ねたところ、以下の回答を得た。

〈これに額面通りの効果があれば競技者の成績は向上するであろうし、その結果、ドーピングの対象になるはずである。しかしながら、このサプリはドーピングの禁止薬物リストにもない。ということは、臨床実験も行われていない。〉

## サーチュイン遺伝子に関する概要

項目	発見・特定者	内容・問題点
サーチュイン遺伝子の発見	ガレンテ博士・ 今井眞一郎博士	長寿遺伝子の一種。誰でも有するが、平常は眠っており、遺伝子のスイッチをONにする必要がある。ノーベル賞に相当 Sart 1. Sart 2・・・Sart 7などがある。
カロリー制限によるサーチュイン遺伝子の活性化	ガレンテ博士 ウィスコンシン大学 (NIAは否定的)	核・線虫・マウスに関しては検証済 アカゲザル対象に20年間にわたる実験。検証 但し、NIAにより反論が提示されている。
レスベラトロールによるサーチュイン遺伝子の活性化	シンクレア博士	“不老長寿”の妙薬。既に商品化。将来的には巨大なマーケットが見込まれる。但し、一部学者により過信することへの警告有り。また、近年、その効果に疑義が呈せられている。

以上、遺伝子の活性化と筋力と持久力のUPには因果関係は認められない。長寿の道を拓くべき“王道”は、健全なライフスタイルを習慣づけることであって、サプリはあくまでも副次的なものに過ぎない。

なお、本稿において、レスベラトロールについて様々な問題点を指摘したが、その趣旨は、効能そのものを否定するものではない。食生活や運動などの生活習慣に十分留意しつつ、これを摂取すれば、健康増進に所期の効果を発揮するであろう。

## iv テロメアと不老不死

本論では、サーチュイン遺伝子を中心に述べてきたが、現代医学の分野においては、この他に、様々な角度より、長寿へのアプローチがなされている。

ヒトを含めた多くの生物には寿命があり、“不死”は免れない宿命があるが、その中で、昨今、最も注目を浴びているのが“テロメア”に関する研究である。

カリフォルニア大学のキャロル・W・グライダーとエリザベス・H・ブラックバーンがテトラヒメナから、テロメアという酵素を単離し、さらにジャック・w・シヨスタックを加えた共同研究により、テロメアとテロメ

ラーゼ酵素が染色体を保護する機序を発見した。

2009年、この研究に対しノーベル生理学・医学賞が授与された。<sup>(30)</sup>

それを契機に、テロメアは世界の注目を浴びた。

テロメアとテロメラゼの研究は比較的新しい分野といえるが、先行研究としては、1961年、レオナード・ヘイフリックによる“ヘイフリック限界”がある。ヒトの細胞は約50回分裂を繰り返すと寿命が尽きてしまうという画期的なものである。<sup>(31)</sup>

さらに、1973年、アレクセイ・オロブニコフに酵素によるテロメアの伸長の予測がある。

サーチュインによる健康・長寿法は、長寿遺伝子の活性化というどちらかといえばアナログ的といえるが、テロメアは“命の回数券”というデジタル的要素を持つ。

#### ◇テロメアとは

2010年オーストラリアにおいて、ドキュメンタリー番組が制作され、それを日本語に翻訳されたバージョンがNHKで放送されたので、それに沿って、概略を紹介しよう。<sup>(32)</sup>

ブラックバーン氏によれば、テロメアは次のように説明される。<sup>(33)</sup>

細胞には細胞核があり、その内部には23対の染色体がある。染色体は遺伝情報を担うDNAの長い糸状になった分子であるが、その先端にあってDNAを保護する。

いわば、靴紐のビニール製のキャップのようなもので、これがなければ紐がほどけてしまう。

細胞分裂の過程でDNAが複製されるが、末端まで複製できないので、DNAはもとのものより短くなる。つまり、テロメアの部分が分裂のたびに短くなり、限界に達すると細胞は死ぬ。

ブラックバーン氏はタスマニアで単細胞生物のテトラヒメナの研究をしていたが、その染色体の末端部分で不可解な現象に際会した。何らかの物質が、

染色体の末端にDNAを継ぎ足すことで、細胞は無限の複製を続ける現象である。

これは事実上、細胞の不死化である。<sup>(34)</sup>

1980年代初頭、サンフランシスコに拠点を移し、遺伝学者のジャック・w・ショスタックと共に、テトラヒメナの複製が他の生物でも起きていることを確認、次いで、1984年、グライダー氏が研究に参加。彼らの研究により酵素の発見がなされた。この酵素は、テロメアの短縮を止め、細胞の複製能力を永遠に保つもので、テロメラーゼと名付けた。

#### ◇テロメラーゼとガン化

近年におけるテロメラーゼ研究は、“不老不死”への道を切り開いたが、その先には大きな障害が立ちふさがっていた。

テロメラーゼは確かにテロメアの短縮を抑制する作用があるが、同時に、ガン細胞の分裂を促進するという事実も併せ持つのである。通常はテロメアが短縮すると細胞の複製は止まり、細胞は死に至る。しかし、時折、細胞は老化にテロメラーゼより死なず、ガン細胞に変異する。変異はテロメラーゼ活性化を促し、ガン細胞は際限なく分裂する。

ガン細胞の90%でテロメラーゼは高いレベルで活性化し、不死の細胞となる。

テロメラーゼはいわば“両刃の剣”で、ヒトの寿命を延ばすという側面と、ガンリスクを増大するという側面を持つので、ヒトの医療の現場では活用されていない。<sup>(35)</sup>

#### ◇テロメラーゼとビジネス

細胞生物学者マイケル・ウエスト博士は、4000万ドルの資金を集め、バイオテクノロジー企業を設立。中国の薬草からテロメアの抑制に可能性のある物質の抽出に成功、それをTA65と名付けた。

博士は、人間のテロメラーゼ遺伝子を発見、老化現象の80%は細胞の老

化が原因であり、細胞の若返りのカギを握るのがテロメラーゼに他ならないことを検証。

その後、実業家のTAサイエンスCEOノエル・パットン氏は、ウエスト氏より、年間1万5000ドルで物質の販売ライセンスを取得し、ビジネスとして拡大。

この価格は、かつてデービッド・シンクレア氏が自ら設立した会社を売却した価格の7,2億ドルに比べてあまりにも低すぎるであろう。

アメリカにおけるレスベラトロールの市場は年間で300億円見込まれている、という状況に照らして、TA65市場価値はあまり期待されていないとみるべきであろう。

その後、テロメラーゼ活性化の研究はビジネスとして継続されているが、ヒトに対する効果は今日に至るまで科学的に証明されていない。

ブラックバーン博士・グライダー博士は、科学者としての立場より、この抽出物の効果は、人間の関心を集めているだけで、科学的に実証されていない、と安易な使用へ警鐘を鳴らす。

#### ◇テロメアとライフスタイル

カリフォルニア大学心理学者のエリッサ・エペル博士は慢性ストレスの専門家で、ブラックバーン博士とともにヒトの細胞内でストレスの度合いを測る試みに取り組んでいる。

エペル博士の報告によると、精神的ストレスを感じる人ほどテロメアの短縮が起きていた。

例として、長い間家族の介護をする人は自分自身をケアする余裕がなく、鬱や免疫機能の低下などがあり、早死にの傾向がみられ、ストレスの多い人は10～17年も早く細胞の老化が進んでいる。

予防医学研究所のディー・オーニッシュ医師はライフスタイルを変えることによりテロメアは30%UPすると報告。

前立腺のある患者は、手術に代替する治療として、博士らが薦めるライフ

タイトルによる方法を選んだ。

☆オーニッシュ医師の推奨するプログラム

- ①リラクゼーション
- ②定期的な運動
- ③低脂肪の食事
- ④精神面のサポート

オーニッシュ医師がブラックバーン博士と共同で調査、調査を始めてから患者のテロメラーゼを調べたところ、わずか3か月で30%も増えた。その結果、患者の遺伝子にプラスの影響が認められた。

博士らの研究により、運動をしたりストレスやマイナス思考を減らしただけで、テロメアの長さを変えられることが明らかになった。<sup>(36)</sup>

このプログラムでテロメラーゼの働きは向上しつつも、ガンの働きは活性化しない。

食生活とライフスタイルを変えるだけでテロメラーゼが活性化さらにストレスを減らせばテロメアが長くなる。

テロメアに関する研究者は、ライフスタイルとテロメアに関し、次のコメントをしている。

・カリフォルニア大学のエレッサ・エペル博士：運動したりストレスやマイナス思考を減らせば、25%の人が1～2年でテロメアが長くなった。ストレスを減らせば、テロメアが長くなるという相関が分かってきた。

・オーニッシュ医師：ライフスタイルを変えれば、健康状態が好転することは以前からよく知られていたが、その、理由はわからなかったが、遺伝子のレベルで解明された。老化のペースは生活習慣を改善することにより抑えられる。

また、テロメラーゼに関して、ブラックバーン博士は、〈研究室で培養した細胞で成果はみられるが、問題は人体で応用出来るか〉と今後の課題を提示する。

ジョンズホプキンス大学キャロル・グライダー博士：一つ一つの細胞に



とって、テロメラーゼはまさしく永遠の命をもたらす酵素であるが、人間への応用には他にも多くの要素が絡んでおり、“不老不死”の道は遠い。

#### ◇テロメアと日本人の感性

古今を通じて、ヒトの寿命には限りがあり、やがては自分の命も尽きるということは誰でも覚悟している。さらに、寿命は生まれ持った時計のようなものにコントロールされ、いかなる権力者といえども、その宿命には抗うことはできない。

テロメアは、俗に“生命の回数券”と称される、時間の経過とともに消費されていくが、この点に関する受け取り方は民族・文化によって一様ではない。

わが国には、落語という文芸があり、その中の〈死神〉という有名な演目がある。

一人一人に灯された蠟燭が時間とともに短くなりやがて蠟が尽きればヒトの命も消えていく、という説話めいた内容である。<sup>(37)</sup>

筆者も落語の愛好家で、この演目も幾度となく聞いているが、話の中の地下世界における蠟燭の場面は如実に脳裏に焼き付く。

遠い昔から、蠟燭を継ぎ足し命を伸ばすことは夢であるが、誰もそのようなことは落語の世界でしか実現しないと思っていた。

テロメアとは、いわば、この落語に出てくる蠟燭に相当するものである。そこで、もし、短縮化されたテロメアを延長することができれば、望み通りの延命が叶えられる。

また、一休の狂歌に〈正月は冥土の旅の一里塚、めでたくもありめでたくもなし〉とある。縁起物の門松も、それを飾るたびに年が加わり、命は縮められていく。この喩えは、結構、日本人の心情に受け入れられる。筆者がテロメアという言葉を初めて耳にしたのは、クローン羊が話題になったころであるが、そのとき、落語の〈死神〉や一休の狂歌に見られる日本人の死生観

を思い起した。

一方、欧米では、テロメア＝”生命の回数券”という感覚は受け入れがたいようである。

1961年、アメリカの生物学者・ヘイフリック博士は、ヒトの培養細胞について新しい説を唱えたが、そのとき、アメリカの学界では、これを非常識な理論として一斉に排除した。

教授の説が学界に受け入れられるまで、その後、20年を要することとなった。

その間博士は、まさに地動説を唱えたため大迫害を受けたコペルニクスの立場に近い状況におかれていた。<sup>(38)</sup>

#### ◇テロメア研究の将来

テロメアに関する研究は、対象とされる客体によって、二つに大別される。

- ① 正常細胞（生殖細胞を除く）においては、“生命の回数券”というテーマの克服。
- ② ガン細胞においては、テロメラーゼによる無限の分裂能を制約し、ガン治療に応用する。

さて、東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授・清宮啓之氏によれば、正常細胞（生殖細胞を除く）において〈テロメアとは、本来、染色体末端を安定に保護する機能を持っている〉とされ、ヒトの生理にとって、本来必要な組織で、細胞がガン化するのを防ぐ機能を持つ。しかし、複製のたびにテロメアが縮小し、予め限られた複製の回数が尽きると、細胞死に至るものである。反面、テロメアの縮小がないとガンのリスクが大となる、という側面も有し、なかなかの難物である。

一方、ガン細胞においては、テロメアは正常細胞におけるときとは、全く異なり、テロメラーゼ活性化のために、複製の際のテロメアの縮小はなく、無限の分裂能を示す。そのため、ガン細胞は増殖される。

2006年、清宮教授は、正常細胞におけるテロメラーゼの働きが不活発で

あるという性質に着目し、これをガン治療に応用する可能性を追求する研究を<sup>(39)</sup>発表した。

2010年には、アメリカの研究グループがヒトの皮膚の細胞から人工多能性幹細胞（iPS細胞）を作成することにより、テロメアの短縮を制御することに成功と、英科学誌ネイチャー（電子版）に<sup>(40)</sup>発表した。

2014年4月には、関西学院大学理工学部・田中克典教授らの研究グループは米国イリノイ大学シカゴ校医学部・中村 通教授のグループ等との共同研究により、分裂酵母という酵母菌を用いて、テロメアの長さを一定に保つメカニズムの解明に取り組んでいる、と大学の公式サイトを通じて発表。研究の目的は、下記のとおり。

- ① テロメアの縮小化をコントロールし、その長さを一定に保つメカニズムを解明する。
- ② 抗がん剤の開発や細胞の老化の防止。

研究グループは、分裂酵母での知見はヒトの細胞にも適用できる可能性が高いと、将来に対する展望を<sup>(41)</sup>述べている。

また、ヒト組織におけるテロメラーゼ活性については、井出利憲氏等の<sup>(42)</sup>研究がある。

### Ⅲ 益軒翁の教訓

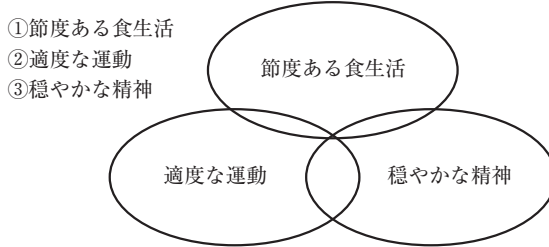
近年、にわかに人類最大の夢である“不老不死”の扉を開くことが現実味を帯びてきた。

それらの多くは、サプリなどに頼るものであるが、人工的に抽出・合成された薬品・サプリには、“不老長寿”を保証するものはない。その結果、現代では、ヒト本来の自然治癒力を引き出す方法が見直されている。

#### ☆サーチュイン遺伝子の活性化

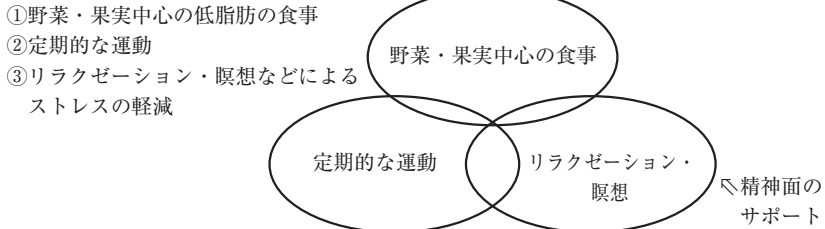
この分野で最も大きな期待が寄せられているのが、サーチュイン遺伝子で

ある。薬によらずライフスタイルの改善による活性化はレオナルド・ガレンテらにより唱えられている。



#### ☆テロメアの短縮化を抑制

サプリメントなどに依存することなく、食生活の改善やリラクゼーションによって、テロメアの縮小を抑える。薬によらずライフスタイルの改善による活性化はC. W. グライダー／E. H. ブラックバーンらにより唱えられている。



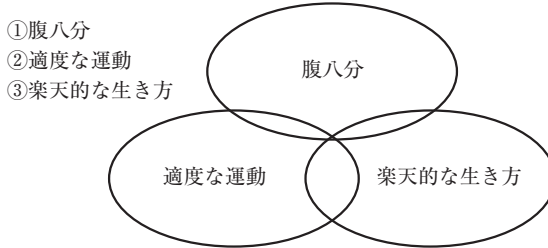
サーチュイン遺伝子とテロメア（の抑制）に関連し、長寿・健康にアプローチする方法を図解してみたが、両者にはベーシックの面で共通の項目がみられる。

それは、食生活・運動・ストレスの少ないライフスタイルである。

さて、益軒翁が著した養生論をまとめると下記の通りとなる。

#### [益軒翁の養生論]

益軒翁の養生論は《養生訓》《楽訓》などの著作に繰り返し説かれている。



上記の三か条は、まさに現代先進医学でたどりついた生活習慣に符合するであろう。

さらに、益軒は薬の摂取については慎重な態度をとる。

とりわけ、長生（長寿）薬の類については〈用ゆれども益なし、信ずべからず〉と、丘處機の言を引用しつつ、その濫用を戒めている。

貝原式の養生法は、400年の星霜を経た現代においても、なお、些かの輝きを失わない。

## あとがき

貝原益軒は博覧強記な学識に加え、老荘思想を通じて“少慾知足”の境地を会得した。

益軒翁の優れた処は、“論語読みの論語知らず”と異なり、養生論に記される生活習慣を自らの生活に実践したことである。

江戸初期に生きた人物としては、84歳の長命を全うできた事実は、長寿者としての範を垂れたことを如実に物語る。

昨今は健康ブームで、テレビや雑誌などでも、各種各様の健康法が紹介されている。

一般の人が、健康の増進やアンチエイジングに目を向けること自体は結構なことであるが、マスコミの報道は玉石混交で、受け取り側は十分注意する必要がある。

テレビ番組は、報道・科学・教養番組と視聴率を稼ぐためのバラエティー

番組に大別されるが、科学番組、とりわけ医学・生命に関する際は、専門家による監修を疎かにせず、周到な検証がなされるべきであろう。

レスベラトロールは、本来、良質な成分を含み、ヒトの健康に有益なものであるが、“不老長寿”の妙薬と過信すべきでない。

長寿・健康の“王道”は、良きライフスタイルを身に着けることであり、サプリなどの摂取は、あくまでも副次的な要素であることは忘れてはならない。

### 〔注〕

(1) 益軒が百寿を例示した論拠の一つとして、中国の孫思邈が百歳の長命を保ったことも理由の一つとして考えられる。

(2) 〈三楽〉の語に関しては、中国の古典に多くの記述がある。

まず《孟子・尽心上》に君子の三楽として、一、父母が共に健在で兄弟も事故がない。二、天下を仰ぎ見て、恥じることがない。三、天下の英才を教育すること。〈孟子曰君子有三樂而王天下不與，存焉父母俱存在兄弟，無故一樂也，仰不愧於天府不作於人二樂也，得天下英才而教育之三樂也。〉とあり、《列子・天瑞》に人生の三楽として、一、万物の靈長たる人に生まれたこと。二、男として生まれたこと。三、長寿を全うできたこと。〈孔子遊泰山，見榮啓期，鹿裘帶索，鼓而歌，孔子曰，先生何以為樂，，天生万物，惟人為貴，吾得為人，一樂也。男貴女賤，吾得為男，二樂也。人世不見日月，有不免襁褓者，，吾年九十，是三樂也。〉とある。そのほかに、《論語 季氏》などにも記述が見えている。

(3) 孫思邈《千金方》における「十二少」は、〈思・念・欲・事・語・笑・愁・樂・喜・怒・好・悪〉本文における「十二少」は〈食・飲・五味の偏・色欲・言語・事・怒・憂・悲・思・臥事〉と11項を数える。（孫思邈《千金方》における「十二少」に比べて1項少ない。

(4) 益軒の楽天的な人生観は、彼の名著《樂訓》に記されている。なお、「樂訓」に関する論文には、奥 貞二〈貝原益軒「樂訓」を読む〉《紀要 鈴鹿工業高等専門学校》36巻1-6（2003年1月）がある。

(5) 本文の後段では、同趣旨の一節が見られるが、そこには“仁心”と処方について言及している。

- (6) 孫思邈の言葉に続き、〈この言、信ずべし。諸芸をまなぶに、皆文学を本とすべし。文学なければ、わが熟しても理にくらく、術ひきし。ひが事多けれど、無学にしては、わがあやまりをしらず。〉とある
- (7) レオナルド・ガレンテ 白澤卓二《NHK未来への提言レオナルド・ガレンテ「長寿遺伝子」を解き明かす》(日本放送協会, 2007年) p12
- (8) レオナルド・ガレンテ 白澤卓二《NHK未来への提言レオナルド・ガレンテ「長寿遺伝子」を解き明かす》(日本放送協会, 2007年) p24
- (9) レオナルド・ガレンテ 白澤卓二《NHK未来への提言レオナルド・ガレンテ「長寿遺伝子」を解き明かす》(日本放送協会, 2007年) p24
- (10) 日本において、比較的早い時期に長寿遺伝子を紹介した番組として、は、白澤卓二“アンチエイジングの科学：長寿遺伝子をONにする”(2009年1月19日, NHKラジオ第2・NHKカルチャーアワー・科学と自然第3回)がある。
- (11) ポスドク；英語のpostdoctoralの略, 博士号をとった後に任期付きの研究職についている者  
石神氏は、現在、現在東京都健康長寿センター研究所に所属
- (12) 石神昭人〈カロリー制限しても寿命は延びない〉(《ビタミン》86巻2012年12月)
- (13) WNPRCとNIAの実験デザインを比較したとき、最も顕著な違いは餌の成分であった。NIAの実験では、自然の材料をもとに餌を作っていた。一方、WNPRCの実験では、抽出した成分をもとに餌を作っていた。自然の材料をもとにした餌は、作る度毎に成分のばらつきが生ずる。しかし、自然の材料に含まれる成分には、フィトケミカル(植物栄養素)、ミネラル、未だ同定されていないからだの健康維持に有益な成分などが含まれているかも知れない。一方、抽出した成分をもとにした餌は決められた栄養素、ミネラル、ビタミンなどを加えることができ、成分のばらつきが少ない。栄養素について比較してみると、NIAの実験ではタンパク質を麦、トウモロコシ、大豆、魚、アルファルファ(マメ科ウマゴヤシ属の植物)などから取っており、WNPRCの実験では乳アルブミンから取っていた。2つの実験で最も大きな栄養素の違いは、糖質の量であった。WNPRCの実験では餌に28.5%の糖質が含まれているが、NIAの実験ではたったの3.9%であった。この違いは2型糖尿病の発症率にも大きく影響しているかも知れない。さらに、NIAとWNPRCの実験でビタミンやミネラルの量も大きく異なっていた。NIAの餌には、カロリー制限群と自由摂取群の両方で食事摂取基準(米国)の40%増しのビタミンやミネラルが加えられていた。一方、WNPRCの実験ではカロリー制限群と自由摂取群で違う餌を与え、カロリー制限群のみにビタミンやミネラルを加え、自由摂取群には加え

ていなかった。このようにWNPRCとNIAの実験では餌の成分に非常に大きな違いがあった。

- (14) 坪田一男《長寿遺伝子を鍛える》(新潮社, 2012年) P76
- (15) レオナルド・ガレンテ 白澤卓二《NHK未来への提言レオナルド・ガレンテ「長寿遺伝子」を解き明かす》(日本放送協会, 2007年) p78
- (16) 坪田一男・澤登雅一《アンチエイジングの鍵をにぎるレスベラトロールの真実》(ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2014年)
- (17) “シリーズ最新科学が見つめる生と死(3) 長寿遺伝子が見つかった!” (NHK:サイエンスZERO; no290,2010年1月2日)  
“長寿遺伝子呼び覚ませ! ~寿命はどこまで伸ばせるか” (NHK:サイエンスZERO; no356,2011年8月6日)
- (18) カロリー制限によって起こるミトコンドリアのエネルギー代謝の特性変化によって、活性酸素の発生が抑えられていると考えている。NHK「老化に挑む」プロジェクト著《NHKスペシャル 老化に挑む よみがえる脳 延びる寿命》(日本放送出版協会, 2004年) p212
- (19) 古家大祐《老けない人は腹七分め 若返り遺伝子が活性化する食べ方》(マガジンハウス, 2012年)
- (20) NHK「サイエンスZERO」取材班・今井眞一郎編著《長寿遺伝子が寿命を延ばす》(NHK出版, 2011年) P64
- (21) 老化抑制の因子はつぎのとおり:  
遺伝子の修復・テロメアの保護・活性酸素の消去・脂肪の燃焼・炎症物質の抑制・免疫細胞の平常化・劣化ミトコンドリアの消化・インスリンの働きをよくする・ミトコンドリアを増やす。
- (22) 慶應義塾大学医学部眼科学教授・同SFC研究所ヘルスサイエンス・ラボ共同代表・日本会抗加齢医学副理事長・《アンチエイジング医学》編集長の職務にあり、アンチエイジング医学の専門医で坪田一男博士は、NHKの放送では、〈レスベラトロールさえ摂れば、健康寿命になれる〉という理解に陥りがちとなり、本質とは大きく逸脱してくると、抗議文をNHKに出した。《アンチエイジング医学》2012Vol.No 6 〈レスベラトロールはアンチエイジングに有効か〉)
- (23) 同社のホームページには、〈日本で初めて西洋ハーブ通知に基づき、ダイレクトOTC医薬品として承認を取得しました。

赤ブドウ葉エキスの効果や効能は薬として使用されるほどの働きがあることがわかっています。具体的には、血管を守り静脈瘤と呼ばれる病気を防ぐ効果があるとされています。赤ブドウ葉というくらいですから、当然赤いわけですから



が、果物の赤い色は非常に体に良い成分が多く含まれているケースが結構あります。〉とあり、このサプリの開発と、販売の経緯については、〈エスエス製薬は、ドイツに拠点があり世界で医薬品を提供しているベーリンガーインゲルハイムグループの一員です。「アンチスタックス」の原型となる医薬品は、1969年にドイツで誕生しました。〉とあり、また、販売については、下記の経緯を有する。

- ・2000年：ドイツ以外の国としてオーストラリアで販売。
- ・2007年：西洋ハーブ通知発出 注：
  - 2007年3月22日付 薬食審査発第0322001号 厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知（外国において一般用医薬品として汎用されている生薬製剤を一般用医薬品として製造販売承認申請する際の取扱いについて）
- ・2011年：日本で初めて、西洋ハーブ通知に基づいたダイレクトOTC医薬品として承認を取得
  - 静脈還流障害による足のむくみを治療する西洋ハーブ医薬品として、日本でアンチスタックスを販売

ダイレクトOTC医薬品とは、新規有効成分が、医療用医薬品としての承認を経ずに一般用医薬品として直接承認されたOTC医薬品です。また、OTC医薬品とは、「一般用医薬品」を指します。

- (24) 人類とブドウの葉との最初の出会いは、今から35万年前にさかのぼるといわれています。この時代の遺跡から見つかった化石は、ドイツのテューリンゲン州ビルツィングスレーベンに保管されています。（エスエス製薬のホームページ）
- (25) フランス・ドイツにおける薬局方の収蔵品目は以下のとおり。（エスエス製薬のホームページから）
- 1 赤ブドウの使用部分はワイン用のブドウ（*Vitis vinifera* L.）の赤色種の乾燥葉である。
  - 2 赤ブドウ葉は4.0%以上の総ポリフェノールと0.2%以上のアントシアン配糖体を含む。
  - 3 赤ブドウ葉乾燥エキスは10～15%の総ポリフェノールを含む。
  - 4 血管保護作用が有るとの考えから静脈不全、表在性毛細血管症候群の治療に用いられています。

Pharmacopée Française (1996) X版, La commission nationale de Pharmacopée, Paris.

同様にドイツでも医薬品として、静脈疾患（静脈瘤・静脈不全）などの治療に

使われています。血管細胞の間にできたすき間を閉じて水分の流出を止める。

- (26) 《NY times》Jan,10,2011 "Doubt on Anti-Aging Molecule as Drug Trial Stops"
- (27) 古家大祐《老けない人は腹七分め 若返り遺伝子が活性化する食べ方》(マガジンハウス, 2012年)
- (28) 赤ワインやチョコレートに含まれる「身体に良い成分」といえば、ポリフェノール。中でもレスベラトロールは、心血管疾患発症のリスクを減らし、寿命を延ばす成分として人気が高い。ところが、米ジョンズ・ホプキンス大学の医師が「効果に疑問あり」との調査結果を発表した。

研究者は1998～2009年にイタリア・トスカーナ州のキャンティ地方(ワインの有名な産地である!)で行われた二つの加齢研究に参加した65歳以上の男女783人を追跡調査。被験者はいずれもレスベラトロール豊富な食事を日常的に摂っていた。

9年間の追跡調査期間中、268人が死亡し、174人が心血管疾患を、34人ががんを発症した。それぞれ尿中レスベラトロール濃度を調べたところ、濃度が最も低い人と最も高い人の死亡率に有意差はなく、心血管疾患やがんの発症を予防する効果は認められなかった。また、動脈硬化を反映する血中炎症マーカーにも、何ら影響はなかったのである。研究者は「欧米型の食事パターンでレスベラトロールを摂っても、心疾患やがんの発症、長寿に影響するとはいえない」としている。

もともと、レスベラトロールが注目されたのは、「フレンチ・パラドックス」がきっかけ。動物性脂肪の消費大国フランスで、なぜか、心筋梗塞の発症率が低いという矛盾を解く鍵として「赤ワイン」が注目されたのだ。

それ以降、世界中で赤ワインの抗動脈硬化作用や抗酸化作用、最近では抗アルツハイマー病作用に言及した報告が相次ぎ、概ね「効果あり」の判定を下している。ただし、赤ワインの「何成分」が寄与するかは、未だはっきりしない。

今回の研究対象のレスベラトロールだが、実は数年前に長寿遺伝子活性化作用を証明した(といわれる)研究データの改ざんが発覚したため、長寿効果についてはすでに大きな疑問符が付いている。本研究結果は、それを現実で追認したといえるかもしれない。取材・構成/医学ライター・井手ゆきえ〈レスベラトロール効果無し?長寿作用はすでに疑問符《ダイヤモンド・オンライン》2014年6月23日(月)7時0分配信《週刊ダイヤモンド2014年6月21号》掲載

- (29) マウスの実験については、レオナルド・ガレンテ 白澤卓二《NHK 未来への提言レオナルド・ガレンテ「長寿遺伝子」を解き明かす》(日本放送協会,

2007年) p38に、イラスト付きで詳述されている。

(30) ノーベル医学生理学賞、「テロメア」解明の米3氏 老化に関与

スウェーデンのカロリンスカ医科大は5日、今年のノーベル医学生理学賞を、米カリフォルニア大サンフランシスコ校のエリザベス・ブラックバーン教授(60)、米ジョンズ・ホプキンス大のキャロル・グライダー教授(48)、米ハーバード大のジャック・ショスタク教授(56)の米国籍の3人に贈ると発表した。染色体の末端部にある「テロメア」が、細胞のがん化や老化にかかわる仕組みを解明した。

テロメアは、細胞の遺伝情報が詰まっている染色体の末端部にあり、染色体を安定させ保護する役割をもつ。細胞が分裂するたびに染色体が短くなること、以前から予想されていた。細胞の老化と関連すると見られていたが、詳しい仕組みは分かっていなかった。

ブラックバーン教授とショスタク教授は82年、原始的な単細胞生物のテトラヒメナを使った実験で、染色体の端にある特殊なDNA配列テロメアの役割を解明。さらにグライダー教授とともに、短くなったテロメアを伸ばす酵素テロメラーゼを見つけた。つまり、細胞の老化を防ぐ働きをする酵素だ。

老化が早く進む病気の人やクローン羊ドリーもが短い。テロメア染色体を守り細胞の寿命を延ばすといった働きがあり、老化との関係が明らかになりつつある。また、がん細胞では酵素テロメラーゼが活発に働き、無限に増殖させていることが分かってきた。この働きを止めれば、がんの増殖を抑えられるとして、新たな抗がん剤開発につながると期待されている。(佐藤久恵)

《朝日新聞》(2009年10月6日)

(31) レオナード・ヘイフリック著／今西二郎・穂北久美子《人はなぜ老いるのか 老化の生物学》(三田出版社、1996年)

(32) オーストラリア・December Films社制作、原題；Immortal

2012年4月25日放送、NHK：BS世界のドキュメンタリー〈シリーズ医療研究の最前線〉「老いを止める～人類の夢は実現するか～」

(33) テロメアに関する、近年の動向や諸問題については、

C. W. グライダー／E. H. ブラックバーン〈テロメアとガン〉(《日経サイエンス》1996年4月号)

E. H. ブラックバーン〈ブラックバーンが語るテロメアと健康状態〉(《日経サイエンス》2012年6月号)

(34) テトラヒメナ(学名：Tetrahymena)は水中に生息する繊毛虫の属の一つ、大核には染色体の末端が多数存在するため、テロメア研究のモデル生物として用いられた。

- (35) テロメラーゼは、直接長寿・健康のために用いられてはいないが、80%を超えるガン組織でその活性化がみられたため、ガン診断のおけるマーカーとして活用されている。

ヒト組織におけるテロメラーゼ活性については、井出利憲・檜山英三・檜山桂子《がんとテロメア・テロメラーゼ》(南山堂, 1999年) 参照

- (36) 運動不足は10歳老ける ロンドン大など細胞レベルで証明

運動を普段ほとんどしない人は、している人に比べて、細胞の老化が10年分ほど早く進むことが、英ロンドン大キングスカレッジなどの研究でわかった。運動は病気を防いで寿命を延ばすといわれてきたが、細胞レベルでも「抗加齢効果」が示された。

研究チームは18～81歳の男女約2400人に、運動習慣などを聞くとともに血液を採取。白血球の染色体にある「テロメア」という塩基対の構造を調べた。テロメアは、細胞が分裂するごとに短くなる。ほとんどなくなると細胞の異常につながることから、老化を示す指標の一つとされている。

参加者のテロメアは1歳年を重ねるごとに、平均で21塩基対ずつ減っていた。運動を週3時間あまりする人たちに比べて、16分程度しかしない人たちのテロメアは平均で200塩基対短かった。研究チームは「運動しない人は、生物学的にみて、やっている人より10年近く老いていることになる」と説明する。

テロメアは喫煙者や肥満の人も短く、体内の活性酸素によって細胞膜や遺伝子が傷つけられる酸化ストレスとの関係が推測された。順天堂大の白澤卓二教授(加齢制御医学)は「運動が細胞レベルでの老化プロセスに影響していることを示す重要な研究」と話す。米国の内科学の専門誌に掲載された。

《朝日新聞》(2008年2月08日夕刊)

- (37) 三遊亭円生の斬、「死神」(しにがみ)

死神は男と一緒に洞窟のような所に連れて行った。そこには燃えている蠟燭が沢山あった。蠟燭1本1本が人間の寿命で、くすぶっているのは病人、長いのは寿命があり、短いのは寿命が短いのだと言う。長くて元気に燃えているのは息子で、半分の長さは前の女房であった。

隣にある蠟燭は今にも消えそうであった。聞くと自分の寿命だと言う。死神は男の寿命がまだまだ有ると言ったが、それは、お金に目がくらんで患者と蠟燭を交換してしまった為だと言う。

「金を返すから何とかして」と懇願したが「一度交換したものは出来ない」とつれない返事であった。「昔、因縁があったのでしょうか、だったら何とかして・・・」, 「では、燃えさしがあるから、これを繋いでみな」。上手く繋がれば命が延びると言う。

- (38) 当時の博士の心境は、のちに新聞で報道された。

常識は、科学者にとっていいことばかりではない。常識が、真実を究めるのに邪魔になることもある。

〈若い研究者が常識に対抗するのは大変〉とカリフォルニア大サンフランシスコ校のレオナード・ハイフリック教授（七〇）は一九六〇年代初めを振り返る。当時、人の培養細胞は無限に増殖する、つまり“不死”だと思われていた。

二十代後半だった教授は、その常識に疑問をもち、実験を繰り返した結果、培養した人の皮膚の細胞は五十回程度で分裂をやめてしまうと確信、論文を投稿した。

『「適切な条件で培養すれば細胞は不死だとみんな知っている』とのコメントがついて突っ返された。つまり私の論文全体が意味がないと拒否されたわけだ。別の雑誌に掲載され、学会でも発表したけど、相手にされなかった。これで研究者生命が終わるかと思った』と言う。

それでも教授はくじけなかった。次第に教授の説に興味をもつ人が増え、二十年ほどかかって受け入れられるようになった。

《朝日新聞》（1998年11月9日、夕刊・科学面）

- (39) 清宮啓之〈テロメア維持機構をターゲットとしたがん治療〉《Drug Delivery System》（2006年21巻6号）

- (40) 細胞の老化にかかわる塩基配列「テロメア」が異常に短くなって発症する難病の患者の細胞から作ったところ、テロメアの長さが回復したことを米ボストン小児病院などのグループが確認した。17日付の英科学誌ネイチャー（電子版）に発表した。

通常の細胞は細胞分裂のたびに、テロメアが短くなり、分裂回数には限界がある。iPS細胞はテロメアを修復する酵素テロメナーゼの働きが活発で、何度でも分裂・増殖できるとされる。

グループは、皮膚の染みが全身に広がる「コール・エンゲマン症候群」の患者の皮膚細胞から、山中伸弥・京都大教授と同じ手法でiPS細胞を作製した。この病気では遺伝子の異常のためにテロメナーゼの一部（TERC）の働きが弱く、テロメアが早く短くなる。だが、作製したiPS細胞は、遺伝子の異常があるのにTERCの働きが活発で、テロメアが正常な長さに戻った。（福島慎吾）

《朝日新聞》（2010年2月26日朝刊）

- (41) 本研究成果は米国科学アカデミー紀要（PNAS）（オンライン初期版：Early Edition）に掲載。論文タイトル、原題：〈SUMOylation regulates telomere length by targeting the shelterin subunit Tpz1Tpp1 to modulate shelterin-Stn1 interaction in fission yeast〉 タイトル和訳：〈分裂酵母において、シェ

ルタリン複合体構成因子である Tpz1 タンパク質のSUMO 翻訳後修飾が、シェルトリン複合体と Stn1 タンパク質の相互作用を調節することでテロメアの長さを制御する)

著者名：

Keisuke Miyagawa, Ross S. Low, Venny Santosa, Hiroki Tsuji, Bettina A. Moser, Shiho Fujisawa, Jennifer L. Harland, Olga N. Raguimova, Andrew Go, Masaru Ueno, Akihisa Matsuyama, Minoru Yoshida, Toru M. Nakamura, and Katsunori Tanaka 2014年4月8日, 関西学院大学・広報室の公式サイト

- (42) 井出利憲・檜山英三・檜山桂子《がんとテロメア・テロメラゼ》(南山堂, 1999年) 参照

#### [参考文献]

NHK「老化に挑む」プロジェクト著《NHKスペシャル 老化に挑む よみがえる脳 延びる寿命》(日本放送出版協会, 2004年)

レオナルド・ガレンテ 白澤卓二《NHK未来への提言レオナルド・ガレンテ「長寿遺伝子」を解き明かす》(日本放送協会, 2007年)

NHK「サイエンスZERO」取材班・今井眞一郎編著《長寿遺伝子が寿命を延ばす》(NHK出版, 2011年)

坪田一男《長寿遺伝子を鍛える》(新潮社, 2012年)

坪田一男・澤登雅一《アンチエイジングの鍵をにぎるレスベラトロールの真実》(ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2014年)

井出ゆきえ〈レスベラトロール 効果なし?〉《週刊ダイヤモンド》(2014年6/21号)

古家大祐《老けない人は腹七分め 若返り遺伝子が活性化する食べ方》(マガジンハウス, 2012年)

〈長寿遺伝子を活性化 秘訣は腹七分目〉《週刊東洋経済》(2011年9/3号 第6345号)

坪田一男〈レスベラトロールはアンチエイジングに有効か?〉(《アンチ・エイジング医学 8-6—日本抗加齢医学会雑誌 特集: レスベラトロール》, 2012年)

新村健〈レスベラトロールの循環器疾患への応用〉(《アンチ・エイジング医学 8-6—日本抗加齢医学会雑誌 特集: レスベラトロール》, 2012年)

堀尾嘉幸・久野篤史〈レスベラトロールの筋肉・神経疾患への応用〉(《アンチ・エイジング医学 8-6—日本抗加齢医学会雑誌 特集: レスベラトロール》, 2012年)

- チ・エイジング医学 8-6—日本抗加齢医学会雑誌 特集：レスベラトロール》, 2012年)
- 井上浩義・母里彩子・久保田真理〈レスベラトロールの糖尿病、メタボリックシンドロームへの応用〉(《アンチ・エイジング医学 8-6—日本抗加齢医学会雑誌 特集：レスベラトロール》, 2012年)
- 澤登雅一〈レスベラトロールの癌への応用〉(《アンチ・エイジング医学 8-6—日本抗加齢医学会雑誌 特集：レスベラトロール》, 2012年)
- 白澤卓二《ボケずにサビずに100歳まで生きる上手な「養生」のススメ》(2014年, 世界文化社)
- D. A. シンクレアー／L. ガレンテ著・日経サイエンス編集部訳〈「長生き遺伝子」の秘密を探る〉(《日経サイエンス》2006年05月号)
- C. W. グライダー／E. H. ブラックバーン〈テロメアとガン〉(《日経サイエンス》1996年4月号)
- E. H. ブラックバーン〈ブラックバーンが語るテロメアと健康状態〉(《日経サイエンス》2012年6月号)
- R. ヴァインドルッヒ〈カロリー制限が老化を遅らせる いつでも若々しくあるためには、何も特別な薬が必要なわけではない〉(《日経サイエンス》1996年3月号)
- ふくおか人物誌編集委員会編《(ふくおか人物誌1) 貝原益軒》(西日本新聞社, 1997年)
- 坪田一男 ごきげんな人は10年長生きできる ポジティブ心理学入門 (青春新書 851)
- 山崎光夫《戦国武将の養生訓 (新潮新書)》(新潮社, 2004年)
- 山崎光夫《老いてますます楽し—貝原益軒の極意 (新潮選書)》(新潮社, 2008年)
- 坪田一男《アンチエイジング・バトル 最終決着》(朝日新書) (朝日新聞社, 2014年)
- 白澤卓二《長寿遺伝子をオンにする生き方》(青春新書 INTELLIGENCE)
- 宮澤正順《養生訓のことば》(斯文会, 2012年)
- 松田道雄訳《貝原益軒 養生訓ほか》(中央公論新社, 2005年)
- 杉本正信・古市泰宏《健康長寿を伸ばす! アンチエイジングへの取り組み》(東洋出版株式会社, 2014年)
- 白鳥早奈英《テロメア 生命の回数券》(自由国民社, 2009年)
- 井出利憲・檜山英三・檜山桂子《がんとテロメア・テロメラゼ》(南山堂, 1999年)

清宮啓之〈テロメア維持機構をターゲットとしたがん治療〉《Drug Delivery System》(2006年21巻6号)

スティーブン・S・ホール著／松浦俊輔訳《不死を売る人々「夢の医療」とアメリカの挑戦》(阪急コミュニケーション, 2004年)

奥 貞二〈貝原益軒「楽訓」を読む〉《紀要 鈴鹿工業高等専門学校》36巻1-6 (2003年1月)

レオナード・ヘイフリック著／今西二郎・穂北久美子《人はなぜ老いるのか 老化の生物学》(三田出版社, 1996年)



〔論文〕

# 三島由紀夫「橋づくし」の表現

水 藤 新 子

- 〈目 次〉
- 1 はじめに
  - 2 対象作品
  - 3 人物描写 [92例]
    - 3.1 小弓 [11]
    - 3.2 かな子 [17]
    - 3.3 満佐子 [31]
    - 3.4 みな [18]
  - 4 情景描写 [35]
    - 4.1 橋とその周囲 [18]
    - 4.2 光陰と天候 [17]
  - 5 比喩表現 [77]
    - 5.1 指標比喩 [33]
    - 5.2 結合比喩 [44]
  - 6 反復表現 [31]
  - 7 まとめ

## 1 はじめに

「橋づくし」(昭和三十一年)は、私がかねがね短編小説といふものに描いてきた芸術上の理想を、なるたけ忠実になぞるやうに書いた作品で、冷淡で、オチがあつて、そして細部に凝つてゐて、決して感動しないことを身上にしてゐる。

表題作として本作品を収めた短編集の「あとがき」である。絢爛豪華な建築のように重厚で、海外でも高く評価される作品を多々ものした作家自身が、このように述べた「橋づくし」とは、いかなる物語か。「芸術上の理想」は思想の問題、「オチ」は物語構成の問題だが、「冷淡で」「細部に凝つてゐる」点はことばのあり方にも多々現れるだろう。こうした観点に立ち、言語表現の面から本作品を読み解いていきたい。

## 2 対象作品

「橋づくし」は1956(昭和31)年、『文藝春秋』12月号に掲載された。翌1957(昭和32)年、同名の短編集として文藝春秋社から刊行されている。

陰暦8月15日の満月の夜、花柳界に伝わる橋づくし(実際は架空の風習)に臨み、築地界隈の七つの橋を無言で渡り切ることで大願成就を目論む女性四人の姿とその顛末を描いた、原稿用紙にして30枚程度の小品である。

テキストは新潮社刊『三島由紀夫短編全集』下巻を用い、旧かな旧字体表記と振り仮名はテキストに従った。( )内は論者による注記である。

## 3 人物描写 [92例]

陰暦八月十五日の夜、十一時半にお座敷が引けると、小弓こゆみとかな子は銀座板いたじんみち甚道わけかつらやの分桂家へかへつて、いそいで浴衣に着かへた。ほんたうは風

呂に行きたいのだが、今夜はその時間がない。

本作品はこのように始まる。主たる登場人物——小弓・かな子・満佐子・みなの女性四人（登場順）が、どのように描かれているかを見ていく。

### 3.1 小弓 [11]

- 1 小弓は四十二歳で、五尺そこそこの小肥りした體に、巻きつけるやうに、白地に黒の秋草のちぢみの浴衣を着た。[602頁-上段-5行目]

他の三人とは世代の離れた年増の芸妓である。彼女はこのところ奇妙な体調の異変に悩まされていた。「お座敷の前と後とに限つて」「突然發作に襲はれたやうに腹が空くのである」。

- 2 小弓は自分の腹工合のことばかり考へてゐた。今夜のお座敷は、最初が米井である。最後が文迺家である。文迺家で夜食をして來ればよかつたが、時間がないのでまつすぐ着換へにかへつて、又行先が米井では、夕食をした臺所で、一晚のうちに又夜食を催促しなければならぬ。それを考へると大そう氣が重い。[603-上-22]

しかし事情を知る米井の娘・満佐子のはからいで夜食を摂り、心おきなく橋づくしの先導役に立つのだった。

- 3 「まあ、お嬢さん、粹ねえ。黒塗りの下駄に爪紅つめべになんて、お月さまでもほだされる」／「爪紅だつて！ 小弓さんつて時代ねえ」／「知つてるわよ。マネキンとか云ふんでせう、それ」[606-上-11]

ごく自然に「爪紅」の語が口を突いて出て、外来語の「マニキュア」と「マネキン」を混同する。若い「かな子と満佐子は顔を見合はせて吹き出し、氣のよい旧世代を小馬鹿にしている節があるが、願掛けのためにわざわざ夜集まろうとする気持ちに世代差は感じられない。

- 4 満佐子は（映画俳優の）Rと一緒にになりたいし、かな子は好い旦那が欲しいのである。そして（略）小弓はお金ねぎごとが欲しいのである。

[606-下-6]

小弓、かな子と満佐子とでは「願事」の質が決定的に異なる。現実を見据

え身の振り方を考えている芸妓と、非現実的な恋に恋する素人の差であろう。ただし小弓は、実際の橋づくしが始まるとこのようなことを考えだす。

5 小弓は先に立って歩きながら、自分の前には人通りのないひろい歩道だけのあることに満足してゐる。誰にも頼らずに生きてきたことが小弓の矜りなのである。そしてお腹のいつばいなことにも満足してゐる。かうして歩いてゐると、何をその上、お金をほしがつたりしてゐるのかわからない。[606-下-9]

自らの人生に疑問を持たず陽気な彼女にとって、今回の願掛けはあくまで余興であって、差し迫ったものではないのだ。

6 小弓は自分の願望が、目の前の舗道の月かげの中へ柔らかに無意味に融け入つてしまふやうな気持がしてゐる。硝子<sup>ガラス</sup>のかけらが、舗道の石のあひだに光つてゐる。月の中では硝子だつてこんなに光るので、日頃の願望も、この硝子のやうなものではないかと思はれて来る。

[606-下-14]

当時の舗道はアスファルトではなく、切り餅様の敷石が並べられたものであった。その隙間に潜り込み日頃は目につかないガラスの破片が、月の光に照らし出される。願望がないわけではないが、それは今すぐという切迫感のあるものではなく、日常これと言って不満はない小弓の心情が、清新な比喻と重ね合わせて説かれている。

### 3.2 かな子 [17]

小弓とは親子ほど年の違うかな子は、満佐子の幼馴染でもある。

7 満佐子とはかな子と一等気が合った。同い年だといふこともある。小學校が一緒だといふこともある。どちらも器量が頃合だといふこともある。[603-下-20]

8 かな子はそれに大人しくて、風にも耐へぬやうに見えるが、積むべき経験を積んでゐるので、何の氣なしに言ふ一言<sup>ひとこと</sup>が満佐子の助けになることもあつて頼もしい。[604上-3]

若いなりに花柳界の女として生きて来たかな子は、世間知らずの満佐子にとっては頼れる存在となっている。しかしながら、彼女の「経験」がそれほど豊かなものでないことは、次の記述から明らかである。

9 かな子は二十二歳で踊りの筋もいいのに、旦那運がなくて、春秋の恆例の踊りにもいい役がつかない。これは白地に藍の観世水くわんぜみづを染めたちぢみの浴衣を着た。[602-上-7]

10 「けふ役の発表があつたのよ」／と坐るなり、かな子は貧しい口もとを歪ませて言つた。(略)／「又、唐子の一役きりだわ。いつまでたつてもワンサで悲観しちまふ。レビューだつたら、萬年ラインダンスなのね、私つて」[604-上-15]

不運を託つ表情を、眼差しでも横顔でもなく「口もと」に焦点を当てて描き、しかも「貧しい」と評していることに注目したい。かな子が美しい女ではないことが、実にさりげなく述べられている。彼女と満佐子が気の合う理由について同級生だというばかりでなく「器量が頃合だ」と書かれていた点を思い返すと、満佐子もやはり美しくはないと知れる寸法である。

そのせいかどうか、これまで運らしい運に恵まれてこなかったかな子は舞台での引き立てよりも、後ろ盾になるよい旦那を求めている。

11 かな子は、肥つた金持の中年か初老の男を夢みてゐる。肥つてゐないと金持のやうな気がしない。その男の庇護そそがひたすら惜しげなく注がれてくるのを、ただ目をつぶつて浴びてゐればよいのだと思ふ。かな子は目をつぶることに馴れてゐる。ただ今までは、さて目をあいてみると、當の相手ももうゐなくなつてゐたのである。[607-上-15]

12 いい旦那がすぐ目の前にゐて、手をのばせばつかまらうといふときに、その手がどうしても届きさうもない心地がかな子はしている。

[609-下-15]

決まった旦那が欲しいと思つても具体的なパトロンイメージはふくらまず、将来への不安を抱きながら妙に諦めがよい。一方で「山出し」の女中みんなに対しては「一寸大した用心棒だわね」「あらいつぱしだわね」と小馬鹿

にする。型にはまった昔ながらの世界で、ごく型にはまった価値観を持ち、個性に乏しい女性として描かれているかな子は、願掛けの途上俄かに腹痛を得て脱落することになる。

### 3.3 満佐子 [31]

13 勝氣な満佐子は、色事については臆病で子供っぽい。満佐子の子供っぽさは評判のたねで、母親もタカを括つてゐて、娘が萩の浴衣なんぞを誂へても氣にもとめないのである。[604-上-5]

満佐子は新橋の料亭の娘らしく、その柄の衣裳を着ると妊娠するという花柳界の迷信に従って「萩のちりめん浴衣」を着るような娘だが、実際に何か事を起こすというわけではない。

14 満佐子は早大藝術科に通つてゐる。前から好きだつた映畫俳優のRが、一度米井へ来てからは熱を上げて、部屋にはその寫眞を一杯飾つてゐる。そのときRとお座敷で一緒に撮つた寫眞を、ボーン・チャイナの白地の花瓶に焼付けさせたのが、花を盛つて、机の上に飾つてある。[604-上-10]

15 満佐子はRの甘い聲や切れ長の目や長い揉上げを心に描いてゐる。そこらのファンとちがつて、新橋の一流の料亭の娘がかうと思ひ込んだことが、叶へられないわけではないと思ふ。Rがものを言つたとき、自分の耳にかかつたその息が、少しも酒くさくはなく、香はしかつたのを憶えてゐる。夏草のいきれのやうに、若い旺んな息だつたと憶えてゐる。一人であるときにそれを思ひ出すと、膝から腿へかけて、肌を漣が渡るやうな氣がする。[607-上-4]

たまたま訪れた俳優の笑顔が營業用に過ぎないことも見抜けず、本気で思えば結ばれると信じ込むやうな幼さを抱えており、同世代の女中に対しては「<sup>けんだか</sup>権高な聲」を出す。経済的に不自由のない環境に育ち、戦後の文化的進歩的教育を受けてはいても、結局は世間知らずの「箱入娘」なのである。先述のように萩の柄の浴衣を着たり、橋づくしを試みたり、芸妓でもないのに芸

妓らしい振る舞いを最も熱心に行っているのも満佐子のように見える。

### 3.4 みな [18]

女だけで夜の街をうろつくことを心配した満佐子の母親が、女中に伴を命じた。「一ト月ほど前に東北から来た」ばかりのみなである。

- 16 答は胴間聲で、こちらの感情がまるつきり反映してゐないやうな聲である。姿を見ると、かな子は思はず笑ひを抑へた。妙なありあはせの浴衣地で拵へたワンピースを着て、引つかきまはしたやうなパーマネットの髪をして、袖口からあらはれたその腕の太さと云つたらない。顔も眞黒なら、腕も眞黒である。その顔は思ひきり厚手に仕立てられてゐて、ふくらみ返つた頬の肉に押しひしがれて、目はまるで絲のやうである。口をどんな形にふさいでみても、亂杓齒のどの一本かがはみ出してしまふ。[605-上-8]

小弓、かな子、満佐子に較べ、具体的で情け容赦のない外見描写がなされている。他の三人とは全く異質な存在であり、このような伴を連れて歩くことに不服な満佐子は当然のように邪慳にする。では、当のみなは何を思い、何を考えているのだろうか。

- 17 「はい」とみなのは答へたが、本當にわかっているのかいないのか不明である。／「どうせあんたもついて来るんだから、何か願ひ事をしなさいよ。何か考へといた？」／「はい」／ とみなのはもそもそした笑ひ方をした。[605-下-13]

- 18 みなが黙つてついて来てゐた。頬に両手をあてて、ワンピースの裾を蹴立てて、赤い鼻緒の下駄をだらしなく轉がすやうにしてついて来る。その目はあらぬ方を見てゐて、一向眞劍味が無い。[607-上-22]

願ひ事を考えたと「もそもそ」笑い、歩きながら「目はあらぬ方を見て」  
「一向眞劍味」が感じられないまま、「何かの感情を掘り当てることはむつかしい」顔つきで、三人の後ろからただ黙々として来るのである。

しかしながら、作者が「冷淡で、オチがあつて」というこの物語の趣向は、

実はこのみなに負うところが大きい。これについては後述する。

## 4 情景描写 [35]

無言の行である橋づくしが始まってからは会話がない。それを補うかのよ  
うに、夜の街の情景が丁寧に描かれている。

### 4.1 橋とその周囲 [18]

19 小弓が先達になつて、都合四人は月下の昭和通りへ出た。自動車屋  
の駐車場に、今日一日の用が済んだ多くのハイヤーが、黒塗りの車体  
に月光を流してゐる。それらの車体の下から蟲の音がきこえてゐる。

[606-上-16]

19' 今日一日の用が済んだ多くのハイヤーの黒塗りの車体に、月光が流  
れてゐる。

ハイヤーの黒い塗装に月の光が反射している。光を、静止した平面的なも  
のではなく、液体状の動的なものとした捉えた隠喩である。19'のように主体を  
「流れる」光とせず「流す」ハイヤーの側とした点は、非情物を有情物に置  
き換える活喩となっている。「今日一日の用が済んだ」ハイヤーの気楽さを  
も表しているように感じられる。

20 四人は東銀座の一丁目と二丁目の堺のところ、昭和通りを右に曲  
がつた。ビル街に、街燈のあかりだけが、規則正しく水を撒いたやう  
に降つてゐる。月光はその細い通りでは、ビルの影に覆はれてゐる。

程なく四人の渡るべき最初の橋、三吉橋がゆくてに高まつて見え  
た。それは三又の川筋に架せられた珍しい三又の橋で、向う岸の角に  
は中央区役所の陰気なビルがうづくまり、時計台の時計の文字板がし  
らじらと冴えて、とんちんかんな時刻をさし示してゐる。橋の欄干は  
低く、その三又の中央の三角形を形づくる三つの角に、おのおの古雅  
な鈴蘭燈が立ってゐる。鈴蘭燈のひとつひとつが、四つの燈火を吊し



てゐるのに、その凡てが灯つてゐるわけではない。月に照らされて灯つてゐない灯の丸い磨硝子の覆ひが、まつ白に見える。そして灯のまはりには、あまたの羽虫が音もなく群がつてゐる。[607-下-17]

「三叉の川筋に架」かる三吉橋は途中から二股になっており、この「二邊を渡ること、橋を二つ渡つたことになる」と考えて選ばれた。「街燈のあかり」は「水を撒いたやう」、ビルは「陰氣に」「うづくま」と見るのも比喩的発想である。前者は比喩指標「よう」を共起させる指標比喩（直喩）、後者は19同様活喩の中でも、人ならぬものを人に喩える擬人法を用いている。

21 **第三の橋は築地橋**である。ここに来て気づいたのだが、都心の殺風景なかういふ橋にも、袂には忠実に柳が植えてある。ふだん車で通つてゐては氣のつかないかうした孤獨な柳が、コンクリートのあひだのわづかな地面から生ひ立つて、忠実に川風をうけてその葉を揺らしてゐる。深夜になると、まはりの騒がしい建物が死んで、柳だけが生きてゐた。[609-上-2]

「ここに来て気づいた」のは誰か。先頭を歩く小弓の視点のようにも思われるが、これは語り手自身の発見だろう。都心の橋を「殺風景」、近代建築を「騒がしい」とする美意識は、書き手である三島自身のそれと大きく重なるものと考えられる。

22 **第四の橋は入船橋**である。それを、さつき築地橋を渡つたのと逆の方向へ渡るのである。入船橋の名は、橋詰の低い石柱の、緑か黒か夜目にわからぬ横長の鉄板に白字で読まれた。[610-下-9]

白字で書かれた橋の名が闇夜に浮き上がるさまを、「書かれていた」ではなく「読まれた」としている。橋の名を記す側でなく、街を歩き来しつづその名を認める側の視点に立っている。かつて橋を造った誰かではなく、今現在その橋を見ている人物の「目」を感じさせる表現である。

23 やがて左方に、川むかうの聖路加病院の壮大な建築が見えてくる。それは半透明の月かげに照らされて、鬱然と見えた。頂きの巨きな金

の十字架があかあかと照らし出され、これに侍するやうに、航空標識の赤い燈が、點々と屋上と空とを劃して明滅してゐるのである。病院の背後の会堂は灯を消してゐるが、ゴシック風の薔薇窓の輪郭が、高く明瞭に見える。病院の窓々は、あちこちにまだ暗い燈火をかかづてゐる。[611-上-12]

聖路加病院は「頂きの巨きな金の十字架」, 「ゴシック風の薔薇窓」, さらに消灯している「背後の会堂」の存在までが示され, 「半透明の月かげ」を浴び, 赤く明滅する「航空標識」が「侍する」ようだと高く評価される。偉容を誇る病院の建築に対し, その後の橋はどのように紹介されるか。

24 **第五の曉橋**の、毒々しいほど白い柱がゆくてに見えた。奇抜な形にコンクリートで築いた柱に、白い塗料が塗つてあるのである。

[611-下-6]

25 **第六の橋**はすぐ前にある。緑に塗つた鉄板を張つただけの小さな**堺橋**である。[612-下-1]

26 橋詰の小公園の砂場を、點々と黒く雨滴の穿つてゐるのを、さきほどから遠く望んでゐた街燈のあかりが直下に照らしてゐる。果たして橋である。

三味線の箱みたいな形のコンクリートの柱に、**備前橋**と誌され、その柱の頂きに乏しい灯がついてゐる。見ると、川向うの左側は築地本願寺で、青い圓屋根が夜空に聳えてゐる。[613-下-3]

曉橋, 堺橋, 備前橋, いずれの紹介もごくあっさりとしている。しかも、「奇抜」で「毒々しいほど白い」とか、「鉄板を張つただけ」とか、「柱の頂きに乏しい灯」とか、よい感情を抱いてはいないことが読み取れる描かれ方である。対して、川向うの築地本願寺は「青い圓屋根が夜空に聳えてゐる」と、「壮大」で「鬱然」とした聖路加病院同様に仰がれる。これもまた、四人の女性というよりは三島自身が下した評価と見做せよう。

## 4.2 光陰と天候 [17]

27 すでに寢静まつた銀座を、小弓とかな子が浴衣がけで新橋の米井へ歩いてゆくとき、かな子は窓々に鑑戸を下ろした銀行のはづれの空を指さして、／「晴れてよかつたわね。本当に兎のみそうな月よ」

[603-上-18]

「陰暦八月十五日の夜」、暦を裏切らぬ満月を見上げ、かねてより示し合わせていた三人とお付きのみなは願掛けに出る。

28 月の下には雲が幾片か浮かんでをり、それが地平を包む雲の堆積に接してゐる。月はあきらかである。車のゆききがしばらく途絶えると、四人の下駄の音が、月の硬い青ずんだ空のおもてへ、ぢかに弾けて響くやうに思はれる。[606-下-4]

29 川水は月のために擾されてゐる。[607-下-14]

「下駄の音」が響き渡るほど澄んだ夜気の下、川の表にも月光は振り注ぐ。29は、川の流れと揺れに合わせて水面に映る光も揺れる当たり前の眺めを、「月のために」水の側が「擾されてゐる」と見立てる点が面白い。19／19'と同じく目の前の見慣れた現実を裏返すことで、清新な印象を与える。

三吉橋を過ぎるあたりから、かな子は急な腹痛に襲われる。築地橋を渡り切り入船橋が目の前に来たところで堪え切れなくなり、「身をひるがへして、電車通りのはうへ駈け戻つた」。

30 月かげの下を、観世水を藍に流した白地の浴衣の女が、恥も外聞もない恰好で駆け出してゆき、その下駄の音があたりのビルに反響して散らばると思ふと、一臺のタクシーが折よく角の<sup>かど</sup>ところにひつそりと停るのが眺められた。[610-上-15]

これもまた、容赦のない書き振りである。痛みに耐え切れず、浴衣の裾を蹴立てて走り出すさまを視覚の側だけでなく、「下駄の音があたりのビルに反響」すると聴覚の側からも描く。その音にあてた動詞「散らばる」はあちらこちらへと広がる動きであり、表現が再び視覚へと戻る面白味がある。

31 氣がつくと、あれほどあきらかだつた月が雲に隠れて、半透明になつてゐる。総體に雲の嵩が増してゐる。[611-上-1]

32 はじめは氣のせむかと思はれたが、まだ月の在處<sup>ありか</sup>のわかる空が怪しくなつて、満佐子のこめかみに、最初の雨滴が感じられたからである。が、幸ひにして、雨はそれ以上激しくなる氣配はない。[611-上-21]

かな子の脱落の後三人は無事入船橋を渡るが、このあたりから空模様が怪しくなり始め、時を同じくして「小弓の身に不運が起つた」。

33 むかうから、だらしなく浴衣の衿をはだけて、金盥をかかへた洗い髪<sup>う</sup>の女が、いそぎ足で三人の前に來たのである。(略)

「小田原町のお風呂屋のかへりなのよ。それにしても久しぶりねえ。めづらしいところで會つたわねえ、小弓さん」[611-下-15]

とうに妓籍を退いたかつての同輩に偶然声をかけられ願の破れた小弓を残し、満佐子はみなと二人だけで先を急ぐことになる。

34 まばらな雨滴が、再び満佐子の頬を搏つた。[612-下-11]

35 橋詰の小公園の砂場を、點々と黒く雨滴の穿つてゐるのを、さきほどから遠く望んでゐた街燈のあかりが直下に照らしてゐる。果たして橋である。[613-下-3]

最後の備前橋に着き、「ほつとして、橋の袂で手を合はせ、今までいそいだ埋め合せに、懇切丁寧に祈念を凝らし」ながら、満佐子は隣のみなが「分厚い掌を殊勝に合はせているのが忌々しく祈願に集中できない。その直後、満佐子自身も思いがけない不運に見舞われるのである。

## 5 比喩表現 [77]

### 5.1 指標比喩 [33]

36 毎度のことであるのに、空腹はまるで事故のやうに、突然天外から降つて來る心地がする。[602-下-11]

小弓の空腹感は脈絡なく訪れる。座敷の間はどんなに退屈でも空腹を感じたりしないのに、座敷の前後に限って発作的に腹が空く。望むと望まざるとにかかわらず起こってしまう点で、「事故」の喩えはふさわしい。

37 女たちはそろそろと橋を渡りだした。下駄を鳴らして歩く同じ舗道のつづきであるのに、いざ第一の橋を渡るとなると、足取は俄かに重々しく、檜の置舞臺の上を歩くやうな心地になる。[608-上-5]

花柳界の迷信のような願掛けから古風な「置舞臺」を連想したのだろう。女一生の願いを叶えようとしていることを思えば、そのために渡る橋が人生の「檜」舞台になぞらえられることにも納得がいく。

38 願ひ事は自分一人の問題であつて、こんな場合になつても、人の分まで背負ふわけには行かない。山登りの重い荷物を扶けるのとはちがひ、そもそも人を扶けやうのないことをしてゐるのである。

[610-下-5]

比喩指標といえは「まるで」「やうな」などが挙げられるが、38のように「Aとは違う」と否定してもAのイメージは確実に想起され印象付けられる。似ているものになぞらえるばかりでなく、似ていないものを挙げて捨象していく形式も、比喩指標の働きに加えられるのである。

「小指と小指をからみ合はせて歩」くほど親密なかな子が脱落したというのに、満佐子の胸には同情よりも「冷酷な感懐が浮ぶだけ」と明示している点も目を引く。幼稚でありながら打算的、そのような自分を正当化する心理は現実にもあり得るが、それをはっきりと描き出す筆致には容赦がない。

## 5.2 結合比喩 [44]

広く喩詞（イメージ）と被喩詞（トピック）をつなぐ比喩指標がないもので、いわゆる隠喩、活喩、擬人法などが含まれる。

39 この三人の願ひは、傍から見ても、それぞれ筋が通っている。公明正大な望みといふべきである。月が望みを叶へてくれなかつたら、それは月のはうがまちがつてゐる。三人の願ひは簡明で、正直に顔

に出てみて、実に人間らしい願望だから、月下の道を歩く三人を見れば、月はいやでもそれを見抜いて、叶へてやろうといふ気になるにちがひない。[604-下-9]

- 40 「まあ、お嬢さん、粹ねえ。黒塗りの下駄に爪紅なんて、お月さまでもほだされる」[606-上-11]

自分たちの望みを訴えかける対象=月を擬人化している。「ほだされる」はひとりだけ年の離れた小弓らしく古風な語彙選択が見られる。

- 41 満佐子はかな子を氣の毒にも思ふが、その氣の毒さが、ふだんのやうに素直に流れ出ない。[610-下-1]

- 42 祈願はいつしかあらぬ方へ外れて、満佐子の心のなかでは、しきりにこんな言葉が泡立つた。[613-下-15]

19で「月光を流してゐる」とあったように、41では「氣の毒さ」が「流れ出」るもの、42では「言葉」が「泡立つ」ものとされる。月光よりもさらに抽象的なものを具象物、しかも液体に喩えた表現は印象に残る。

- 43 自分のうしろに接してくるみなの下駄の音が、行くにつれて、心に重くかぶさつて来るのである。その音は氣楽に亂れてきこえるが、満佐子の小刻みな足取に比べて、いかにも悠揚せまらぬ足音が、嘲けるやうに自分をつけてくるといふ心地がする。[612-下-18]

かな子と小弓が相次いで脱落して以来みなの存在感が思いの外にじわじわと増していく。付き従う下駄の「足音」は聴覚刺激でやはり抽象物だが、それが「重くかぶさつて来る」と捉えるのは質量を持つ実体への具象化である。カテゴリーの異なる喩詞と被喩詞を用いることで、満佐子の覚える圧迫感が生々しく表現されている。

## 6 反復表現 [31]

- 44 築地橋は風情のない橋で、橋詰の四本の石柱も風情のない形をしてゐる。[609-上-21]

44' 築地橋は、橋詰の四本の石柱に至るまで風情のない形をしてゐる。

反復は最も単純な強調の手段である。44'のように包括的な描き方にしてても大意に差はないが、重ねて用いられる「風情のない」から、橋に向けられる語り手の批判的な目線が感じ取れるのである。

45 奇癖がはじまつたのは、いつごろからとも知れない。呼ばれた家の臺所で、お座敷に出る前に、小弓が足許に火がついたやうに、「ちよいと何か喰べるものないこと」と要求するやうになつたのは、いつごろからとも知れない。[603-上-8]

46 少しでも早く第七の橋を渡つてしまはなければならぬ。それまで何も思はないで急がなければならぬ。[613-上-19]

いずれも同形の文末表現が繰り返される。45ではいつから「奇癖」が始まったか小弓自身皆目わからないこと、46ではかな子、小弓の脱落を受けて満佐子が願掛けを急ぎ焦るさまが、強く表されることになる。

47 三叉の橋の中央へ来るまではわづかな間である。わづかな間であるのに、そこまで歩いただけで、何か大事を仕遂げたやうな、ほつとした氣持になつた。[608-上-5]

前文の文末表現を後続文の文頭で繰り返す前辞反復は俗に尻取り文と呼ばれる。二度目の「わづかな間であるのに」は「しかし」のような逆接の接続語句に置き換えるのが一般的と思われるが、敢えてそのまま繰り返すことにより、語り手が感じる「間」の「わづか」さを強調する。

48 何か見当のつかない願事を抱いた岩乗<sup>ねぎごと</sup>な女が、自分のうしろに迫つて来るのは、満佐子には氣持が悪い。氣持が悪いといふよりも、その不安はだんだん強くなつて、恐怖に近くなるまで高じた。

満佐子は他人の願望といふものが、これほど氣持のわるいもののだとは知らなかった。いはば黒い塊りがうしろについて来るかのやうで、かな子や小弓の内に見透かされたあの透明な願望とはちがつてゐる。

[613-上-6]

「氣持が悪い」が二回、さらに「氣持のわるい」が続けて現れる。侮って

いたみなと二人きりになった満佐子は、ほぼ同世代でありながら何を考えているか窺い知れない、自分とは全く異質な相手にひどく心を乱されていく。この後、夜の街を浴衣がけで歩く若い女を見咎めたパトロールの警官に追われ、逃れようとして却って乱暴に捕えられ声を上げてしまう満佐子を後目に、み<sup>な</sup>は悠々と最後の祈念を終えるのである。

## 7 まとめ

物語としては、熱意をもって“願掛け”に臨んだ三人が三人とも果たし切れず、本人が望んだわけではなく偶然から同行することとなった一人が完遂するという皮肉な落とし話である。架空の伝統である橋づくしを提案したであろう花柳界の女たちが相次いで脱落し、一流の料亭の娘としてのたしなみがあり、高等教育も受けてそれなりに磨かれていたであろう満佐子が、「山出し」で「岩乗」で感情が伺えないと見下していたみなに対し次第に脅威を覚える流れは、スリリングな心理描写となっている。

凝った修辞が多々出現する作品ではない。比喩表現はあっても個性的と呼べるほどのものは少ない。警句めいた言い回し、難読語などもほとんど見当たらない。この書き手の他の作品を思えば、ごく地味でおとなしい。

ただ、満佐子がかな子と気の合う理由として「同い年」「小学校が一緒」だけでなく「器量が頃合」を挙げている点は見逃せない。これだけでははっきりしないが、後に語り手はかな子の口許を「貧しい」と言い切っていることから、「器量が頃合」の満佐子の容貌がどの程度のものであるかも容易に想像がつくのである。また、映画俳優に熱を上げる満佐子の「そこらのファンとちがって、新橋の一流の料亭の娘（である自分）がかうと思ひ込んだことが、叶へられないわけではない」という身勝手に幼い考えを明かしつつ、語り手自身は見解を述べることなく先へ進む。いずれも評価の形容詞を用いることなくマイナス寄りの評価をほめめかす、巧みな間接表現である。

街に行く四人は願掛けのため口がきけない。話しながら歩いていれば見逃



すあれこれを目に留めながら進む道々、夜の街や空模様が丁寧に描かれるのも納得できる。但し、聖路加病院や築地本願寺の伝統的な建築を讃える一方で、コンクリートと鉄板でできた新しい橋梁は素っ気なく、またいささかの侮蔑をもって紹介されるに過ぎない。語り手は小弓、かな子、満佐子の心情を自由に行き来するが、こうした街の見方は彼女たちのものというよりは、明らかに三島自身の価値観が反映されたものと考えられる。

冒頭引用した「あとがき」の「冷淡で、オチがあつて、そして細部に凝つてゐて、決して感動しない」とは、物語の手堅い構成のみを指した発言とは思われない。人物の典型を造形し实景を写し取る手腕を遺憾なく発揮し、緻密で周到な間接表現を散りばめ、その上で自身の強固な美意識をも織り込み得たという、作家・三島由紀夫の満ち足りた思いが言わしめたものであろう。

#### 〔参考文献〕

- 尼ヶ崎彬（1988／1995）『日本のレトリック』筑摩書房／ちくま学芸文庫  
 佐藤信夫（1986／1994）『わざとらしさのレトリック』講談社／講談社学術文庫  
 下河部行輝（1987）『三島由紀夫の語彙研究序説』岡山大学文学部研究叢書1（非売品）  
 下河部行輝（1990）『続 三島由紀夫の語彙研究序説』西日本法規出版  
 竹田日出夫（1979）「三島由紀夫「橋づくし」論」武蔵野女子大学紀要14  
 中村明（1977）『比喩表現の理論と分類』（国立国語研究所報告57）秀英出版  
 中村明編（1979／1993）『感情表現辞典』六興出版／東京堂出版  
 中村明（1991）『日本語レトリックの体系—文体のなかにある表現技法のひろがり』岩波書店  
 中村明編（1995）『感覚表現辞典』東京堂出版  
 中村明（2002）『手で書き写したい名文』角川書店  
 中村明（2011）『文体論の展開—文藝への言語的アプローチ』明治書院  
 中村明他編（2011）『日本語 文章・文体・表現事典』朝倉書店  
 野口武彦（1969）「三島由紀夫「橋づくし」」国文学解釈と鑑賞35（特集：短編小説の面白さ）  
 原子朗（1970）「三島由紀夫における「文体」——その要旨と、付随的ないくつかの問題——」文体論研究16

- 廣野由美子（2005）『批評理論入門——『フランケンシュタイン』解剖講義』中公  
新書
- 前田愛（1986／2006）「三島由紀夫『橋づくし』——築地」『幻景の街——文学の  
都市を歩く——』小学館／岩波現代文庫
- 柳川朋美（2005）「三島由紀夫「橋づくし」論——習俗性の断絶と“対話”への  
基盤——」奈良女子大学大学院人間文化研究科年報20
- 山口基編（2009）『三島由紀夫研究文献総覧』出版ニュース社

〔論文〕

# アガサ・クリスティにおけるワーグナー表象と 後期クリスティ問題（1）

富田雄一郎

- 〈目次〉
- 1 探偵小説とワグネリズム
  - 2 ボリス・グローエン——『巨人』
  - 3 ヴァーノン・ディア——『塔の王女』
  - 4 『巨人の糧』のワグネリズム
    - 4-1 竜とフロイト
    - 4-2 女たちの自己犠牲
  - 5 ワーグナーの現代化

## 1 探偵小説とワグネリズム

近代探偵小説はワグネリズム旋風が吹き荒れるさなかに誕生した。十九世紀後半から二十世紀前半にかけて猛威を振るったワグネリズムという汎ヨーロッパ的な文化現象は、当然のことながら、ハイカルチャーにのみ限定したのではなく、多くの探偵小説にも様々な形でその痕跡を残すこととなった。もっとも早い時期のワグネリアンのひとりが、かのシャーロック・ホームズ<sup>(1)</sup>である。彼は「赤輪党（‘The Adventure of the Red Circle’）」（1911年発表）の事件解決後、相方のワトソンを誘い、コヴェント・ガーデンで上演されている「ワグナー」の「第二幕」に赴く。

ねえ、ワトソン、きみはきみで、悲劇的かつグロテスクなるものの標本をまたひとつ、きみのコレクションに加えたわけだね。ところで、まだ八時になっていないが、今夜はコヴェント・ガーデンでワグナー [Wagner night] があるんだ！急げば、何とか第二幕には間に合うぜ。<sup>(2)</sup>

ロンドンにおけるワグネリズムの最盛期は1890年代であるとされる。『タンホイザー』の二元論を下敷きとしたワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』が発表されたのが1890年、同じく『タンホイザー』の官能性を前面に押し出したピアズリーの挿絵付き小説『ヴィーナスとタンホイザー』（改稿版『丘の麓で』）が書かれたのが1895年、世紀末イギリスを代表する論客アーサー・シモンズによる最初のワグナー論「パイロイトのワグナーに関する覚書」が1897年——ちなみにワグネリズムを基盤に書かれた『文学における象徴主義の運動』は1899年、本格的なワグネリズム論「リヒャルト・ワグナーの思想」が『七つの芸術の研究』として出版されたのは1906年——、そしてバーナード・ショーの『完全なワグナー主義者』が出版されたのが1898年である。また、1888年から1895年にかけては『ザ・マイス

ター』というイギリス版のワグネリアン機関誌も発刊されており、この時期をもって最盛期と見做す研究者は多い。その余塵は二十世紀に入ってもしばらく継続する。1912年にはロレンスがワーグナーの『ニーベルングの指環』を下敷きにした『侵入者』を発表し、1915年にはヴァージニア・ウルフが『船出』でスノップたちの浅薄なワーグナー崇拝を皮肉めいて描くようになる。<sup>(3)</sup>その後ジョイスの『ユリシーズ』（1918年から一部連載、1922年に出版）やT・S・エリオットの『荒地』（1922）によって解体と異化の対象となるものの、それでもなおワーグナーは間欠的に言及され続ける。つまり、1911年に発表された前述のホームズの発言は、まさにイギリスにおいてワグネリズムが円熟し、同時に革新であったはずの詩学が体制に回収され始めた時期に相当するのである。<sup>(4)</sup>1887年の『緋色の研究』から1927年の「シヨスコム・オールド・プレイス」に至るまで、主にヴィクトリア朝及びエドワード朝時代を中心に活躍したこの名探偵は、サミュエル・ローゼンバークら多くの研究者が指摘しているように、デカダント或いは世紀末教養人としての資格を十二分に備えていた。<sup>(5)</sup>彼はロンドン音楽界におけるワグネリズムの胎動を同時代人としてリアルタイムで感じ取っていたわけである。

「赤輪党」事件におけるワーグナーへの言及は、探偵小説とワグネリズムの最初期における接点を示す証言として大きな価値があるものの、<sup>(6)</sup>最後に軽く触れられているだけであるため、ホームズとワトソンの私生活がエピソード的に挿入されたに過ぎないようにも見える。しかしロルフ・ボズウェルの言うように、もし彼らが見たオペラが『トリスタンとイゾルデ』だったとすると、<sup>(7)</sup>男女の逃避行とそれを追う死神というあだ名の男の存在は、三角関係の果てに死へと追いやられていくトリスタンたちの悲劇と重なり合い、恩人を裏切るか否かという苦悩の主題ともうまく符号する。なにより、謎解きの中心に据えられている蠟燭による警告は、『トリスタン』の“第二幕”におけるブランゲーネの警告の場面——蠟燭ならぬ松明が象徴的に使用されている——を思わせ、先の引用の中でホームズが“第二幕”へ注意を促すような発言をしていた理由も説明がつくのである。

ドイルがどこまで意識的にワグナーを持ち込んだか、また当時の読者がどこまで物語とワグナーの関連を読み取ったかは定かではない。しかし、ヨーロッパ屈指の著名人であった名探偵によるワグナー言及が、ワグネリズム言説の形成の一端を担っていたことは確かだろう。一般大衆に対する言説形成という観点からは、ハイカルチャーの実験的な純文学テキストより、より広い層の人たちに親しまれた探偵小説やロマンス小説など娯楽性の高いテキストの方が広範な影響力を持っていたはずである。しかしながら、これまでのワグネリズム研究においては探偵小説をその分析対象としたことはなく、また探偵小説の研究においてもワグネリズムの視点からテキストを読み解く試みはなされたことはない。両者の関わりが焦点化されたことは皆無と言ってよいのである。本論ではその空隙を埋めることを目的のひとつとして定め、いわゆる“本格パズル小説”の女王——聖書とシェイクスピアの次に多くの人に読まれたといわれる——アガサ・クリスティを取り上げ、クリスティにおいてワグナーがどのように表象されていたか、それはどんな意味を持ちうるか、さらには探偵小説におけるワグネリズムとは何だったのかという問いに対する答えを素描してみようと思う。

## 2 ボリス・グローエン——『巨人』

アガサ・クリスティといえばトリッキーなテキストの評判のみが高い。「犯人対探偵」から「作者対読者」へという探偵小説の枠組みそのものに対する構造革命をもたらした『アクロイド殺し』、容疑者の中から犯人を“選択”するという読書習慣を逆手に取った『オリエント急行の殺人』とその反転としての『そして誰もいなくなった』、愛憎劇の心理的盲点を突いた『ナイルに死す』など、そのほとんどが作者と読者の騙し合いの場となっている。ロバート・バーナードが「騙しの天才」と名付けたように、<sup>(8)</sup>騙しの独創的なテクニクこそがこれらのテキストの最大の価値であることはいまさら繰り返すまでもないが、しかし一方で、彼女の関心が“騙し”だけではなかった

ことは忘れられがちである。特に、1930年からおよそ四半世紀の間に定期的に発表された一連のロマンス小説と生涯を通じて書かれ続けた相当数のエスピオナージ小説に対して向けられた熱意は、その量だけでなく扱われている主題が他の本格パズル小説群と深い繋がりがあることから、看過するわけにはいかない<sup>(9)</sup>。本論では、このあまり言及されることのない二種のテキストを中心に、ワーグナーがどう扱われていたかを洗い出していくこととする<sup>(10)</sup>。

最初のロマンス小説『巨人の糧 (*Giant's Bread*)』(邦題は『愛の旋律])がメアリ・ウェストマコット名義で発表されたのは、1930年という探偵小説の黄金時代真っただ中であり、クリスティ自身年に数冊の探偵小説を発表していた多忙期に当たる。『巨人の糧』は主人公ヴァーノン・ディアが幼少期から第一次世界大戦を経てオペラ作曲家として成功していく過程を描いた物語で、いわゆる「教養小説」「音楽家小説」である。

物語は「ボリス・グローエンという無名の作曲家の『巨人』と題する新作」(GB1)の初演シーンから始まる。クリスティが創造したこの架空オペラは作中の観客たちから難解なアヴァンギャルドと評される。

「なにしろ、時代の尖端を行くものだからね。始めからおしまいまで故意に調子をはずしてあるので、アインシュタインの理論でも勉強しなければ、てんで理解できないとか…」(GB1)

「ボルシェヴィキの思想の体現というやつかね。騒音音楽というんじゃないか。たっけ、こういうのを？」(GB3)

「まあ、これだけのものだね。大向こうの喝采を狙ったこけおどしさ」「だがわからんぞ。こういった<sup>キュービズム</sup>立体派に随喜の涙を流す向きもなきにしもあらずだからな」(GB3)

「アインシュタインの理論」「ボルシェヴィキの思想」「騒音音楽」「<sup>キュービズム</sup>立体派」,

これらはすべて1910年代頃に登場した思想・美学の諸概念である。<sup>(11)</sup> 特に「騒音音楽」——原文ではnoise orchestra——については、「彼の音楽は明日に属する」(GB7)、<sup>フューチャー</sup>「未来への歩みを大胆に印する男」(GB7)、或いは「あなたは未来の音楽を書かれるそうですね」(GB244)、「ほくの音楽は機械の音楽となるだろう」(GB496)などと記されていることから推察して、ノイズミュージックの父たるルツソロの<sup>ラルテ・ディ・ルモーリ</sup>「騒音音楽」やマリネッティらの<sup>フトゥリスモ</sup>「未来派」の音楽或いはその類似物を指していると考えてまず間違いない。つまり最先端の斬新な音楽エクリチュールの形式によるオペラがここで想定されていることになる。

それは普通のオペラとはまったく類を異にする構想のものだった。筋もなければ、これという登場人物もない。オペラというよりは、大掛かりなロシア・バレエとでもいったらわかりいいだろうか。それは視覚的に壮麗な効果を、数々の証明の織りなす、奇妙な、どこかこの世離れのした効果を狙っていた。(GB4)

この「筋もなければ、これという登場人物もない」オペラというのは、例えばプッチーニのような緊密なドラマ性に基づいたオペラとはまるで違う、もっと実験的な作品であると考えられる。クリスティと同時代の絵画、音楽、政治における最先端の概念が織り込まれた、極めてアヴァンギャルドなオペラであり、オペラの「革命」と言ってもよい。ウィリアム・ウィーバーはクリスティと音楽について考察した「音楽とミステリ」において、考えうるモデルとしてアーサー・ブリス、プロコフィエフ、スクリャーピン、クセナキス、ケージなど当時の「進歩的な」作曲家を挙げている。<sup>(12)</sup>

だが革命的、進歩的とは言いながらも、オペラ『巨人』が未来派風の、或いは新ウィーン楽派のような、従来の音楽語法を完全に覆した新しい音楽美学に基づいた作品かという点、実はそうとは言い切れない。最先端を示唆する諸々の語彙の他に、1930年前後にはすでに最先端とは言えなくなっていた美学或いは詩学も同時に書き込まれているのである。



例えば、作中の批評家たちの「<sup>デカダント</sup>退廢的…<sup>モービッド</sup>病的…<sup>ニューロティック</sup>神經症的…<sup>チャイルディッシュ</sup>小兒的」(GB2) という言い回しには、明らかに世紀末のベストセラーであったノルダウの『退化論』(1892年、英語訳は1895年) のコノテーションが指摘できる。当時の様々な文化現象のほとんどをデカダンスであるとして一括りに棄却したこの現代文明批判のひとつの章が「リヒャルト・ワーグナー・カルト」と題され、ワグネリズムという現象自体が神経症や病の比喩をもって反知性的な神秘主義として否定的に語られていたことを考える時、グローエンの「<sup>フューチャー</sup>未来/<sup>トゥモロー</sup>明日の音楽」はもうひとつの革命的音楽へと変貌する<sup>(13)</sup>。すなわちリヒャルト・ワーグナーの「<sup>フークンフト</sup>未来の音楽」である<sup>(14)</sup>。

では、肝心のオペラはどんなものだったのか。断片的ではあるが、その特徴を示すエピソードがいくつか記されている。

人類の揺籃期を象徴する「石」と題されたプロローグから、発電所や摩天楼すなわち機械文明を主題とする絢爛たるページェントが続き、霧の幕開け、強烈な光と爆音によるクライマックスのエピローグで終わるこのオペラは、石から機械へと道具が進化してく人類の歴史をアレゴリカルに表現した文明論オペラである。まずこの点で——ショーの慧眼が見抜いたような——資本主義システムのアレゴリーとしての『指環』四部作と同種の主題を扱っていることになる。

主題だけではなく表現スタイルやモチーフにもワーグナーからの借用と思しき痕跡がそこかしこに指摘できる。例えば、『巨人』のエピローグの幕開けに出現する「<sup>ミスト</sup>一面の霧」(GB5) は、一般に「ワグネリアン・フォッグ」と呼ばれる象徴主義の暗示の詩学を基盤としたアウラ生成装置であるが、霧状の混沌の中から物語が徐々に姿を表し始めるという開始のスタイルは『指環』四部作の序夜『ラインの黄金』の冒頭と全く同じ——そしてブルックナーらによって継承された——書法である。

象徴主義の神秘的暗示作用と並んで、ワーグナーのオペラが持つもうひとつの強力な力は、圧倒し呪縛する力、極限にまで高まり更にはそれをすら超えんとするエネルギーの爆発である。かつてボードレールがワーグナーに圧

倒される快樂を「絶頂に登りつめた魂の最後の叫び」にも似た閃光と表現し「強烈さ」の詩学として理解したように、グローエンのオペラも未来派風の機械音と共に、「輝きは刻々増し、マグネシウムの白熱光となった。人々は本能的に苦痛の叫びを發し、両手で目を覆った」(GB5)と、極限をさらに超える凄まじい光の爆発をその特徴とする。

こうした文脈上にオペラ『巨人』のキーワードである「巨人」<sup>ジヤイアント</sup>、「摩天楼」<sup>スカイスクレイパー</sup>、「矮小な人間」<sup>ビューニー</sup>そして「発電機」<sup>ダイナモ</sup>「発電所」<sup>パワーハウス</sup>(GB4-5)などの語が並び置かれると、テクノロジーの近代的で未来派的な響きの他に、もうひとつ別の意味が二重写しに見えてくる。すなわち、「巨人」は『指環』の主要キャラクターであるファーフナーとファーゾルトの巨人族を、「摩天楼」はヴォータンをはじめとする神々が住む天空の城ヴァルハラを、「矮小な人間」はアルベリヒやミーメラ小人のニーベルング族を、そして「発電機」「発電所」はニーベルング族が鉱脈と鍛冶のテクノロジーによって財を蓄えた地下世界であるニーベルハイムをという風に、それぞれの語において意味の転換が起こり、ワーグナーを中心とした読みへの回収が可能となる。『巨人』は外装は未来派でも、実質はワグネリアン詩学の延長なのである。

ここでもうひとつの小説内オペラである『塔の王女』を見てみよう。

### 3 ヴァーノン・ディア——『塔の王女』

『塔の王女』はグローエンではなく、主人公ヴァーノンが世界大戦前に作曲するオペラである。「古いお伽噺によくある話」と評されるものの、筋はお伽噺としては少々込みいったものになっている。あるジブシーの若者（実は百年前行方不明になった同国の王子）が、高い塔に住んでいる長い金髪の王女と恋に落ち駆け落ちを試みる。だが、王女が服の裾に真珠を縫い込んでいたためにその重さで失敗。若者は大切な緑の帽子と笛をユダヤの商人に売って王女と結婚するも、次第に耐えられなくなってそれらを取り戻そうとする。しかしユダヤの商人は帽子を破り笛を折って若者に投げ返す。失意の

うちにさまよう若者は、人形の修繕を生業としている黒い髪の娘と出会い、破れた帽子と折れた笛を直してもらう。そして自分が王国の王子であり、百年前にその黒髪の娘と駆け落ちをしようとしたのだが、上着の裏に黄金を縫い込んだためにその光に目をくらまされ、駆け落ちは失敗、二人は離ればなれになってしまったことを思いだす。若者は金髪の王女ではなくこの黒髪の娘と旅を始めるところで物語は終わる。寓話性の強いお伽噺である。

物語にはワグナーのオペラからの切り貼りとも読める場面が散見される。「真珠」或いは「黄金」が不幸を招くというエピソードは、所有者に不幸をもたらすニーベルングの指環と同じ機能を果たすと共に、先述した資本主義批判とも通じる主題と言えよう。ライン河の水底で守られていた黄金から作られた指環は、『塔の王女』においては、水の中で生成される真珠と黄金とに分割されて登場する。一方、ユダヤの商人によって破壊された「破れた帽子と折れた笛」(GB269)はそれぞれ指環と並んで重要なアイテムである隠れ頭巾とノートゥングの代替物であると考えられる。ノートゥングは一度折られた後に鍛え直されてジークフリートの武器となるが、王子の笛も折られた後で修繕され新たな旅へと向かう。ニーベルング族はユダヤ人のメタファーだと言われていることも裏付けとなろう。また、髪の色が違う二人の女性の登場は、幼馴染みのネル・ヴェリカーと『塔の王女』を演ずるソプラノ歌手ジェーン・ハーディングの間で揺れ動くヴァーノンの運命を暗示するとともに、もしかしたらトリスタン伝説に出てくる二人のイゾルデのシチュエーションも流れ込んでいるのかもしれない。だとするとワグナーの『トリスタン』まで関与している可能性が浮上してくる<sup>(17)</sup>。

〈ワグナー〉という空白の中心に鑲められたこれらの記号は、しばらくはゆるやかな共振のもとで、中心を浮き彫りにするかのよう周辺を漂っているが、その空白は物語の後半になって埋められる。『塔の王女』のタイトルロールであるソプラノ歌手ジェーンが“ワグナー歌手”であることが明示されるのである。「わたしはこれまでワグナーやシュトラウスのオペラを歌ってきました」(GB260)。そして具体的なレパートリーとして「エレク

トラやブリュンヒルデ、イゾルデ」(GB272)が言及される。したがって、多少の解釈過多があったとしても、大筋ではワーグナーがテキストの深層に書き込まれていることはほぼ疑いようがない。『塔の王女』はワーグナーの『指環』や『トリスタン』、そしてワーグナーの楽劇の交響詩化とも言えるリヒャルト・シュトラウスの『エレクトラ』と同種の「ワグネリアン・オペラ」なのである。

金髪の王女と高い塔という設定から誰もが連想するのは、ラプンツェルの童話、或いはドビュッシーのワグネリアン・オペラ『ペレアスとメリザンド』であろう。『ペレアス』の原作者メーテルランクはワーグナーを神格化したカルト集団である象徴主義グループの一員でもあり、このオペラは『巨人の糧』が書かれる二十年程前の1902年に初演されている。それ程昔のことではなく、したがって、「半ば忘れかけていたあのお伽噺」(GB233)という言い方からすると、むしろラプンツェルの物語が想定されていると考える方が自然とも言えるが、いずれにしろ、ヴァーノンのオペラがメルヘン・オペラであることには違いない。この「メルヘン・オペラ」というジャンルがひとつの意味を持つ。

世紀末から二十世紀初頭にかけてのいわゆる〈ワーグナー以後〉の時代にはワーグナーという巨大な存在を乗り越えようとする様々な試みがなされた。ある者はワーグナーの詩学をさらに推進し(『ペレアス』『サロメ』『エレクトラ』)、ある者はそれを迂回した(『ばらの騎士』)が、ある者はワーグナーの楽劇の規模を——詩学はそのまま——縮小したメルヘン・オペラという形式に着手した。現在ではフンパーディンクの『ヘンゼルとグレーテル』(1893)くらいしか上演されることはないが、ワーグナーの息子のジークフリート・ワーグナーは1898年の『熊の皮を着た男』からおよそ三十年の間に数多くのメルヘン・オペラを残した。ワーグナーの後継者でありかつワーグナーを回避した“モーツァルト回帰”で有名なりヒャルト・シュトラウスも『火の消えた町』(1901)や『影のない女』(1919)というメルヘン・オペラに手をつけていて、このジャンルはポスト・ワーグナー時代におけるワー

グナー継承の象徴現象となったのである。『塔の王女』は作中では第一次世界大戦直前に初演されていることから、1910年代前半に構想されたと推察される。そう考えると、戦前のヴァーノンの音楽は、最先端という程ではないにしても、〈ワーグナー以後〉の現実世界の音楽風土を如実に反映していたことになる。

ヴァーノンが頻繁に口にする理想の音楽がワーグナー美学の要約になっている点も指摘しておかねばなるまい。例えば次のような台詞。

救われるって、どんな気持ちだろうって、何の気もなしにいったんだよ。それが——わかったんだ！〔中略〕宗教？何をいっているんだい！でもある人にとっては宗教みたいなものかな？〔中略〕音楽だよ！（GB149）

ここにはワーグナーの生涯のテーマである「救済」に加え、「音楽」がニーチェによって殺された神に替わる「芸術宗教」として位置づけられている。宗教の衰退と共に芸術を、特に世紀末の象徴主義芸術においては、音楽或いは音楽的交響状態を、宗教の代替物としての理想的芸術形態とする美学が共有されていた。次の台詞ではその「音楽至上主義」が宣言される。

音楽こそ、およそ世の中でもっともすばらしいものだよ！〔中略〕すばらしいものになる可能性をもっているんだよ！〔中略〕全体として捉えなくては問題にならないんだよ」（GB150）

「<sup>クワッド・ビー</sup>可能性」という語からは「未来の音楽」が、そして「全体主義」の総合芸術美学までもが読み取れる。さらにその音楽の構成は「ハーブを五十ほど」（GB152）という表現から推測されるように、想像を絶する、ほとんどパロディとしか思えないような大編成で、〈ワーグナー以後〉の肥大化した器楽編成の特徴——例えばマーラーの交響曲——を捉えていて興味深い。また、<sup>ゴフレット</sup>「酒杯のシンフォニー」（GB178）という表現からはニーチェがワーグナーに

見出した「ディオニュソスの音楽」が連想される。すべてがワーグナーを指向しているのである。ヴァーノンの音楽がワグネリアン美学に基づいていることは疑いの余地がない。

## 4 『巨人の糧』のワグネリズム

### 4-1 竜とフロイト

ヴァーノンのワグネリズムは彼一個人に留まらず、『巨人の糧』のテキスト全体に広がりを見せる。いやむしろ、『巨人の糧』というテキストがワグネリアン小説であるが故に小説内の音楽がワグネリアンな要素に満たされたのだというべきであろうか。次に『巨人の糧』においてワーグナーがどのように取り込まれているかを洗い出してみる。

大きなポイントは2つある。いずれもモチーフの利用に関わるものだが、まず、主人公のヴァーノンに『指環』の主人公ジークフリートのイメージが重ねられていることが挙げられる。

<sup>ビースト</sup>〈獣〉は応接間に住んでいた。四本の足、ぴかぴか輝く栗色の胴体。ヴァーノンははじめて見たときから、獣には黄色く光った、大きな歯があるとひとりぎめしていた。そもそもの初めからヴァーノンは〈獣〉に魅力を感じ、それでいてひどく恐ろしかった。(GB34)

四本足の〈獣〉とはグランド・ピアノのことなのだが、彼はこの音楽の〈獣〉を退治する夢を見る。

ナースに竜退治の物語を読んでもらうとき、ヴァーノンはきっと応接間の〈獣〉を思い浮かべた。ミスター・グリーンとの空想の遊びの中で彼がとくに気に入っているのは、二人して〈獣〉退治をする場面だった。〈獣〉の栗色の体に

剣を突き刺すヴァーノンの後ろで、百人の子どもたちが大声で叫んだり、歌ったりしていた。（GB34）

この時「ドラゴン退治」のイメージが重ね合わされていることが重要である。

彼の夢に現われるその姿には、輝かしい日没と魔法、そして<sup>ドラゴン</sup>竜退治の連想があった。（GB38）

〈獣〉がドラゴンに譬えられることでヴァーノンはジークフリートとなるのである。こうして革命児ジークフリートの役を担わされたヴァーノンは、音楽の世界において「革命」を実現していくことになる。

ここで指摘しておきたいのは、〈獣〉が不安の象徴として、成人しても繰り返し生起し続けることである。

このロシアに、名のない獣についての古い伝説があるのをきみは知っているかい？〔中略〕その伝説が小さいころのぼくの〈獣〉に対するあの恐怖心を思い出させるからだ。ロシアにきて以来、ぼくは〈獣〉のことをずいぶんあれこれと考えた——その本当の意味を探りあてたいと思ったからだ。そこにはピアノに対する盲目的な恐れ以上のものがあつたとぼくは考える。ロンドンのあの医者とはさまざまなものに対して、ぼくの目を開いてくれた。〔中略〕今思いめぐらすと、〈獣〉は象徴的な意味をもっているようだ。（GB485-6）

「ロンドンのあの医者」とは精神分析医のことであり、フロイトの無意識に関する言説がここで浮上してくる。そしてヴァーノンの母への強い思いと父の戦死を思いやる時、エディプス・コンプレックスの主題が物語と絡み合っていたことに気づかされる。ジークフリートにとって母と森が大切な思慕の対象であつたように、<sup>(18)</sup>ヴァーノンも夫と不仲だつた母に対して強い同情を持ち<sup>(19)</sup>続ける。

ヴァーノンはマミーのために竜を退治してあげたいと思った。応接間の〈獣〉のように栗色に輝く竜を。(GB38)

ワーグナーはフロイト以前に無意識の領域を探求し、それをライトモチーフなどの技法で音楽に取り込んだ芸術家である。ここでフロイトとワーグナーが出会ったのも必然であったと言えよう。犯人及び被害者の心理分析をなにより重視するエルキュール・ポアロの探偵法にも通ずる、クリスティのもうひとつの特徴である。

では、この不安とは何なのか。

先の引用で〈獣〉とは音楽に対する不安の象徴であったことがヴァーノン自身の口から語られているが、それは次の引用にもあるように、音楽そのものというよりは音楽に“捕われる”ことへの本能的な恐怖であると考えられる。

ぼくは音楽から逃げようとした——しかし、音楽のほうでぼくを捕らえた。あ  
る人々が救世軍の集会で宗教に捕らえられるように、ぼくは音楽に捕らえられ  
たのだ。(GB486)

『巨人の糧』の音楽はワーグナーと密接な関係にある。とすると、ここで語られている不安とはワーグナーのような呪縛力の強い音楽に捕われる不安だったのではという推測が成り立つ。テキスト内ではっきりと語られることはないが、民衆を熱狂の渦の中で翻弄するためにワーグナーの音楽を利用した独裁者の歴史を思い起こせば、クリスティが熱狂から、それも理性を失う程の宗教的ともいべき盲目的熱狂から、距離を保っていたことが窺われるのである。これはもしかしたら探偵小説そのものの特質であるかもしれない。

#### 4-2 女たちの自己犠牲

ヴァーノンがジークフリートならばもうひとりの重要人物ブリュンヒルデ



も設定に取り込まれている可能性がある。

まず気づくのは、男勝りの女性の存在である。幼馴染みのジョー・ウェイトは女戦士ブリュンヒルデのごとく「がっちりした体格の女の子」で「彼の二倍もおとなびていた」(GB98)と描写され、ブリュンヒルデが英雄以外の男を拒絶したように「あたし、おとなになったら、男の人となんて、何の関係ももたないつもり」(GB99)と宣言する。しかしその言葉とは裏腹にジョーは不幸な結婚を繰り返す。幼馴染みのセバスチャンはこう思う。

“窮地に陥ったときに男を助けてくれる女はいないわけではない。しかし、山の頂上に達した男の道づれになってくれる女はめったにいない。人は山の頂きでこそ、恐ろしい孤独を感じるに違いないのに。” (GB342)

山頂の比喩、そして女性による救済。ここからワグネリアンな読者は、ジークフリートの恋人であったブリュンヒルデが山頂で魔の炎に囲まれて眠らされていたこと、そして幕切れで愛馬グラナーネと共にジークフリートを埋葬する炎の中に飛び込んでいたことを思い起こすに違いない。いわゆる「ブリュンヒルデの自己犠牲」である。

しかしジョーはヴァーノンの人生においてはさほど重要な役割は果たさない。ヴァーノンにとってのブリュンヒルデはソプラノ歌手ジェーンに引き継がれる。ジェーンこそがヴァーノンのために自己を捧げるからである。彼女はヴァーノンの『塔と王女』の初演を務め、彼がオペラ作曲家として成功するのに尽力するが、その結果、歌手の命である声をつぶしてしまう。

とうとうつぶれてしまったのよ、わたしの声は、それも永久に。(GB320)

彼女はそれを後悔はしない。むしろ嬉々として自らを捧ぐ。

「もしきみがもう一度その選択をする羽目に立ったら――」

「やっぱり同じことをするでしょうね」(GB322)

創造者であるということはこういうことなのだ——あらゆるものを——非情に——目的のために用いるのだ。ジェーンのような人間がその犠牲となるのだ。(GB513)

しかしこうした献身にもかかわらず、ジェーンは沈没事故の際にヴァーノンに見捨てられてしまう<sup>(21)</sup>。ネルとジェーンの二者択一の中で彼はネルを選択し、彼女は哀れにも海の底に沈んでいくのである<sup>(22)</sup>。

そのネルも結局はヴァーノンに遠ざけられることになる。物語は次の文章で閉じられる。

ネルがやっとドアを締めて立ち去ったとき、ヴァーノンは安堵の溜息を洩らした。彼と仕事の間に介在するものは、もう何一つない。彼はふたたびテーブルの上に身をかがめた。(GB515)

『巨人』の初演の際に批評家のバウアマンが言う<sup>(23)</sup>。「天才とは、レヴィン、残忍きわまる巨人だよ。人間の血と肉を貪り食う怪物だ。グローエンについては私は何も知らぬ。だが誓ってもいい。彼は自分の中の巨人に自らの血や肉を、またおそらくは他人のそれをも提供したことだろう…すべてが、それこそ、骨まで噛み砕かれて巨人の糧となったのさ…」(GB9)。この「糧」を自己犠牲と見做すならば、ジェーンを始めとする女性たちは、ブリュンヒルデや『さまよえるオランダ人』のゼンタのように、ワーグナーの生涯のテーマである「女性の自己犠牲による救済」の役割を割り当てられ、英雄ジークフリートならぬ“巨人”ヴァーノンの“糧”となるべく運命づけられていたことになる。主題の点から鑑みても、音楽小説『巨人の糧』の中心にワーグナーが据えられたのは当然の選択だったと言える<sup>(24)</sup>。

## 5 ワーグナーの現代化

では、ワグネリズム文化史から見た場合、『巨人の糧』のワーグナー表象にはどのような特徴があると言えるだろうか。

グローエンの『巨人』もヴァーノンの『塔の王女』もドイルの「赤輪党」同様、モチーフの利用が基本であり、象徴主義詩人のような〈微分〉の詩学に基づいた言語のエクリチュール革命とはあまり関係がないが、検討に入る前にここで明かしておくべき事実がある。前衛オペラ『巨人』の作曲家ボリス・グローエンは、実は、主人公ヴァーノン・ディアの偽名なのである。彼は交通事故で記憶喪失となり、<sup>(25)</sup>しばらくはジョージ・グリーンとして別の人生を生きるが、記憶を取り戻し、戦後になってグローエンの名で『巨人』を発表する。ヴァーノンは死んだのだと読者が錯覚するような書き方が一種の替え玉トリックとして機能し、クリスティの他のパズル小説同様、サプライズな騙しを生み出している。そしてグリーンがヴァーノンだと明かされた後、さらにグローエンとヴァーノンも同一人物であったことが明らかとなり、<sup>(26)</sup>読者は二度目のサプライズに直面することになる。この時、小説のプロローグが実は物語全体の流れではエピローグにあたり——『指環』四部作同様の円環構造——ヴァーノン＝グローエンというひとりの音楽家の成長を描いたものであったこと、つまり『巨人の糧』とは、戦前のポスト・ワーグナー時代のメルヘン・オペラ『塔の王女』から戦後の未来派風の前衛オペラへという音楽美学の変貌を描いた小説だったのだということが判明する。われわれにとって重要なのは、主人公の2つのオペラ・テキストのいずれにもワグネリズムの痕跡が認められるということは、すなわち、この音楽小説全体の中心的な音楽のイメージがワーグナーに他ならず、さらにそのワーグナーが時代の変化に呼応しつつ、戦後になって前衛美学と融合されているという事実である。グローエンの『巨人』は未来派のようなアヴァンギャルドであると同時にワグネリアンな要素をも併せ持った、いやむしろ、ワーグナーの美学

を残しつつドラマ性をさらに棄却し響きをさらに斬新なものにした、「未来の音楽」と「未来派」が融合された美学へと変化したのだと捉えるべきであろう。ワグネリズムに現代的な要素が組み込まれ、「ワグナーの現代化」という独自の視点が織り込まれている。それが『巨人の糧』のワグナー表象における最大の特徴である。これは、通説とは異なり、クリスティが単にメイヘム・パーヴァの桃源郷に閑居する老婦人ではなく、現実世界へのアクチュアリティを常に意識していた作家だったという証左ともなる。『巨人』のみならず『塔の王女』もまたその当時のリアルな音楽風土を反映していたことを思いだして欲しい。クリスティのテキストは、コージー・ミステリのイメージを一旦かっこに入れ、アクチュアリティの視点から読み直す必要がある。それによってこれまで見えていなかった様々な側面が可視化されてくるに違いない。

最後に「過去」との繋がりを指摘しておこう。それは『巨人の糧』の自伝的側面と関係がある。ヴァーノンが記憶喪失中に名乗っていた「ジョージ・グリーン」とは、彼が唯一記憶していた幼い頃の想像上の人物の名で、ヴァーノンは彼の「百三人の子供」のうち三人に「プードル、リス、木」という名をつけていた (GB17)。クリスティ自身空想の友達とよく「ごっこ遊び」に夢中になっていたが<sup>(27)</sup>、中でも「グリーン夫人」という仮想人物の「百人の子供」のうち「プードル、リス、木」の三人を大切に思っていたと『自伝』に記している<sup>(28)</sup>。細部の固有名までそっくり同じ設定である。つまり『巨人の糧』は自伝要素が多分に織り込まれた「半自伝小説」と言えるのである。マイケル・パーキンソンが1972年に行ったアンケートで、クリスティは好きな作曲家として「エルガー、シベリウス、ワグナー」を挙げている<sup>(29)</sup>。オペラ歌手を目指してレッスンをしたこともあるくらい音楽は常に彼女の中心にあった。中でもワグナーは若い頃からのお気に入りであり、だからこそ『巨人の糧』という半自伝小説でワグナーが選択されたとも言える。つまりクリスティにおいては、ワグナーは過去の自己の思い出と不可分な状態にあるのである。後に最後の小説『運命の裏木戸』(1973)において、ワー

グナーは他の諸々のアイテムと共に、現実味を失った黄昏色の郷愁として再現されることになるのだが、この「過去」という主題こそは、現実へのアクチュアリティ——すなわち「現在」への意識——と共に、後期クリスティのテキストを読み解く上で最も重要なキーワードである。

（続く）

〔注〕

『巨人の糧』の引用にはAgatha Christie, *Giant's Bread* (Harper Collins, 2009) の頁数を併記してある。タイトルは略してGBとし、それに続くアラビア数字が頁を表している。翻訳はクリスティー文庫 75 の『愛の旋律』（早川書房, 2004）を使用した。必要に応じてルビを追加したり、表現を変えたりしている。

- (1) Pierre Nordon, *Conan Doyle* (John Murray, 1966), p.338でドイルの未発表日記が引用されている。その中でドイルは、ノルダウの『退化論』を引き合いに出しながら、ラファエル前派と後期印象派、フランス象徴主義とイタリア未来派、そしてワーグナーのオペラと『エレクトラ』の違いを、‘queerness’ と ‘madness’ だと書き残している。つまりリヒャルト・シュトラウスとの音楽性の違いにまで言及できる程、ワーグナーのオペラに関する知識があったということになる。さらには、1912年7月の日記と記載されていることから、「赤輪党」発表後間もなくして書かれたものであり、ということは、「赤輪党」は想像以上にワーグナーを意識しながら書かれた可能性が浮上してくるのである。
- (2) Arthur Conan Doyle, *The Original Illustrated 'Strand' Sherlock Holmes* (Wordsworth Editions, 1998), p.813. 翻訳は『詳注版シャーロック・ホームズ全集9』（ちくま文庫, 1998）より。かっこは筆者。
- (3) Virginia Woolf, *The Voyage Out* (The Hogarth Press, 1915), p.48-9に“Have you been to Bayreuth?” という定型化した挨拶が出てくる。これはワグネリズムが教養主義化し制度化しはじめていた文化状況を反映している。
- (4) 後述するように「赤輪党」は1902年に起こった事件だという説がある。だとするともっとワグネリズム全盛期に近いことになる。
- (5) サミュエル・ローゼンバーグ『シャーロック・ホームズの死と復活 ヨーロッパ文学のなかの Conan・Doyle』（河出書房新社, 1982年）など。
- (6) ホームズに続いて実際にワーグナーのオペラを観劇した探偵としてはフィリップ・トレント、ファイロ・ヴァンスなどの名を挙げることができる。

- (7) 「赤輪党」はむろんフィクションではあるが、音楽学者のボズウェルはコヴェント・ガーデンの上演記録と照らし合わせて、1902年9月25日の『トリスタン』がこの時の「ワーグナー・ナイト」にあたるのではないかと推測している。これはドイル自身の体験を反映しているとも考えられる。『詳注版シャーロック・ホームズ全集9』の523ページを参照。
- (8) Robert Barnard, *A Talent to Deceive: An Appreciation of Agatha Christie* (Collins, 1980) など参照。
- (9) クリスティのエスピオナージ小説は、長編小説に限ってみても、全体の13～15%を占める。ロマンス小説は、現在では読まれることすら少なくなっているが、自らを「ソーセージ製造機」と揶揄した程多忙だったにもかかわらず、計6冊のロマンス小説を書き残した情熱は、相当なものだったと考えざるを得ない。
- (10) あまり言及されないテキストを中心に文化史の読み直しを行うのが本論が定めるもうひとつの目的である。
- (11) 特殊相対性理論の発表は1905年、ボルシェヴィキがロシア共産党と改称するのが1918年、キュビストという言葉が『フィガロ』誌に出たのが1909年、ルッソロの『騒音芸術』は1913年、マリネッティの『未来主義創立宣言』は1909年である。また、ヴァーノンはシェーンベルクのラディカリズムを高く評価している。「我々はいまだにシェーンベルクを正当に評価していないのではないだろうか。現代精神そのものである明晰非常なロジック、シェーンベルクだけが伝統を無視する勇氣、岩床まで掘り下げて真理を見出す勇氣をもっていたのだ。ほくにとってはシェーンベルクこそ、問題にするに足る唯一の人物だ。〔中略〕シェーンベルクでほくが残念に思うのは、楽器に対する軽蔑だ。」(GB496)
- (12) William Weaver, "Music and Mystery" in *Agatha Christie: First Lady of Crime* (Weidenfield and Nicolson Ltd., 1977), p.191.
- (13) 「デカダン」という言葉は何度か出てくるが、ワーグナーとデカダンスの繋がりを読者に思い出させるかのように、溺死体を主題とするロシア生まれのデカダン彫刻家ボリス・アンドロフの挿話が付与されていることにも注目(GB276)。
- (14) 『巨人』の特徴のひとつに「視覚的に壮麗な効果 (spectacular effects)」が挙げられていることや、ヴァーノンの友人でプロデューサーのロシア系ユダヤ人セバスチャン・レヴィンに対する作中人物の反ユダヤ的発言、そして反ユダヤ主義への批判的言述 (おそらくクリスティ自身の) など、ワーグナーという空白の中心を指向していると読める。

- (15) ショーは *The Perfect Wagnerite* (Constable and Co., 1898) で、ワーグナーの『指環』を資本主義システムのアレゴリーとして読み解いた。これを舞台で実現したのが1970年代のバイロイトにおけるパトリス・シェローの演出である。現在ではごく当たり前の解釈となったが、当時の文献にはショーのような読みは余り見られないことから、極めて斬新な解釈だったのではないかと推察される。
- (16) Charles Baudelaire, *Correspondance I* (Gallimard, 1976), p.674.
- (17) 「悲しみに打ちひしがれながらも、彼女は幸福だった。生きているあいだはついに彼女のものとなることがなかった夫は、死においてはじめて彼女のものとなった。」(GB123-124) という箇所はトリスタンの愛と死の系譜の変形である。クリスティ大佐との離婚に苦悩しているアガサの姿が目浮かぶ。
- (18) 〈森〉への強い関心もジークフリートと同様である。「〈森〉はいつもヴァーノンにとって、たとえようもない魅力をもっていた。」(GB18)、「絵が一つ掛かっていた——葉の落ちた木の幹を幾本か描いた習作であった。その絵の何かはヴァーノンに幼児のあの〈森〉の探検を思い出させた。」(GB257) など森の重要性はことあるごとに繰り返される。
- (19) ヴァーノンの女性問題をエディプス・コンプレックスから読み直すこともできるだろうし、夫婦仲に悩んでいた母親を執筆当時のクリスティ本人の姿と重ねて自伝的に読み直すことも可能だろう。ただし、ヴァーノンは父親に同情を感じていたことは忘れてはならない。「そしてそんな父親を気の毒に思った。思えば彼はいつも父親を気の毒に思っていた。なぜかはわからないが。」(GB124)。パルジファルがアンフォルタスに対し「共苦」を感じたように。
- (20) 彼女にブリュンヒルデのイメージが重ねられているとすると、その直後にある「窓敷居に坐って足をぶらぶら揺すっていた」(GB97) という何気ない描写も、愛馬グラーネに騎乗している様子を模写しているように見えてくる。
- (21) 氷山に追突とあるから「タイタニック号」がモデルと思われる。ヴァーノンが音楽に開眼したきっかけは「タイタニック・コンサート」(GB142) であり、「巨人」の記号性を共有している。ルシタニア号撃沈事件を『秘密機関』に、リンドバーク誘拐事件を『オリент急行の殺人』に取り込んだように、これもまたクリスティの現実社会への関与を示すものである。
- (22) ネルに関して次のような文章がある。「目下のところネルは——どこかにそんな詩があったね、そう、“林檎の木と歌と黄金…”を代表しているんだ」(GB264)。これは直接的には、ジョン・ゴールズワージーの『林檎の木』であろう。二人の女性の間で揺れる男という物語はヴァーノンのそれと重なるし、「黄金の林檎の木、歌うたう乙女たち、金色に映える林檎の実」というエウリ

ビデスの歌も引用されている。だが、同時にここには、神々が口にするフライアの林檎の木、音楽、ラインの黄金という意味を重ねて読むことができる。『ねじれた家』のようにダブルミーニングを得意としたクリスティによる仕掛けの可能性も捨てがたい。

- (23) ウィーバー (1977) に、バウアマンという記号は当時の著名な音楽批評家アーネスト・ニューマンに由来するのかもしれないとある。そうだとすると、ニューマンはワーグナー評論家としても有名であるので、ここにもワーグナーへと向かう記号が配置されていたことになる。
- (24) 本論では触れなかった小説内オペラがもうひとつある。それはラードマーガーという作曲家によるオペラ『ペール・ギュント』であるが、イプセンの物語におけるペール・ギュントはイングリを捨て、ソルヴェイをおいて放浪するなど女性との関係がヴァーノンとよく似ている。これもまた主題を浮き上がらせる文学的手法のひとつであったろう。
- (25) ヴァーノンの記憶喪失と失踪は逃避から起こったとあり、これは当然、1926年のクリスティ自身の失踪事件を連想させる。事件は本書執筆のほんの数年のことであり、ここでもまた自伝的要素が多分に混入している。だが、だからといって失踪事件の真相が記憶喪失だと即断してはならない。実際の事件の真相を糊塗しようとするミスリーディングの可能性も十分に考えられる。
- (26) 替え玉トリックと二度に亘るサプライズにより『巨人の糧』を広義のミステリと見做すことさえ可能かもしれない。
- (27) Agatha Christie, *An Autobiography* (Harper Collins, 2010), p.22.
- (28) *Ibid.*, p.23.
- (29) *Agatha Christie Official Centenary Celebration* (Harper Paperbacks, 1990), p.23.



〔論文〕

# 邵阳县平话的音韵特点

王 振 宇

〈目 次〉 要旨

1. 引言
2. 邵阳县平话的声韵调
  - 2.1 声母
  - 2.2 韵母
  - 2.3 声调
3. 邵阳县平话的部分音韵特点
  - 3.1 保留全浊声母
  - 3.2 不分尖团
  - 3.3 蟹摄、假摄、果摄字的读音特点
  - 3.4 效摄字的读音特点
  - 3.5 流摄字的读音特点
  - 3.6 臻摄、曾摄舒声字的读音特点
  - 3.7 鼻音韵尾脱落
  - 3.8 声调的特点
4. 结语

## 要旨

筆者は中国湖南省邵陽県岩口舖鎮で湘語方言の調査を行う際、現地のインフォーマントから次のことを教えてもらった。岩口舖鎮、長陽舖鎮の一部の村落では二種類の方言が話されている。一つは周辺地域のことばに近い湘語方言であるが、もう一つは地元の人同士でしか通じない方言であり、「平話」、「ミャオ話（ミャオ族のことば）」ともよばれる。後者の方言は話者が主に70代以上の高年層であるため、消滅の危機が非常に高い。

「平話」は中国広西省の東部に分布する漢語方言であり、湖南省南部の東安土話、閩峡平話、寧遠平話などの湘南土話とも深く関係している。邵陽県内にはこれまで「平話」に関する報告がなかった。果たしてこの「平話」は広西省の平話、湘南土話と同一の方言グループに属するものであろうか。この問題を解決するために、筆者は邵陽県の岩口舖鎮で「平話」に対するフィールド調査を行った。調査の結果の一部を本稿にまとめている。邵陽県平話は周辺の湘語方言と大きく異なっているため、「ミャオ語（ミャオ族のことば）」と名付けられたこともあるが、中古漢音との対応関係から、漢語（中国語）の一つのバリエーション（方言）と判断することができる。中古漢音で鼻音韻尾を持つ字の多くはこの方言で鼻音韻尾を落としている。これは周辺の湘語方言に見られず、極めて特徴的な現象であるが、50km以上離れた南に位置する東安県花橋郷の「土話」、さらに100km以上離れた南西に位置する綏寧県閩峡郷の「閩峡平話」にも同様に観察されている。したがって、邵陽県平話は、「東安花橋土話」、「閩峡平話」などの湘南土話と同一の方言グループに属すると考える。

## 1. 引言

邵阳县位于中国湖南省西南部，隶属于邵阳市。北面邵阳市区、新邵县，

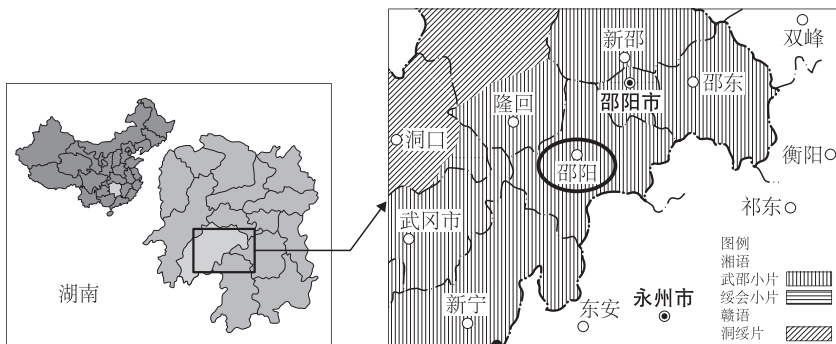


图1 邵阳县的地理位置

(左图来自「维基百科」；右图依据彭泽润、彭建国（2013）制作）

西临武冈县、隆回县，南接新宁县、东安县，东邻邵东市、祁东县（图1）。

据陈晖、鲍厚星（2007）、彭泽润、彭建国（2013）的报告，邵阳县方言属于湘语娄邵片武邵小片。现邵阳县是由老武冈县一部和老邵阳县一部合并而来，其方言可以大致分成东西两片。西部原属武冈县的区域具有保留尖团音区别、有卷舌音声母等特点。东部属原邵阳县区域和邵阳市区方言较为接近，尖团音区别消失，没有卷舌音声母。

2014年5月，我们在邵阳县北部的岩口铺镇进行方言调查时，当地的发音人反映岩口铺镇和长阳铺镇一带的村民除了会说接近邵阳市区话的湘方言以外，还会说另外一种外人听不懂的“平话”。

为了核实这一情况，我们首先查阅了1993年出版的《邵阳县志》，发现该县志以同音字标记的方式记载了湖南省邵阳县的长阳铺镇一带颇具特色的方言现象：

……长阳铺的陆姓，罗姓，皇安寺的胡姓，屈姓，李姓等，至今说“看牛”为“况嗽”，管“学生”为“若勒”，管“讲话”为“咕瓦”，“睡觉”为“入雅闭里”，“吃早饭”为“且妈饭”。习称“咕瓦话”。（《邵阳县志》（社会科学文献出版社，1993年））

《邵阳县志》上只记录有“咕瓦话”，我们没能找到“平话”的称呼。汉语方言一般分为七大方言：北方方言、湘语、吴语、客家话、赣语、粤语、闽语（袁家骅（1960））。1987年出版的《中国语言地图集》在此基础上又加上平话、晋语、徽语，提出十大方言的划分方法。其中，“平话”主要分布在广西壮族自治区各地（图2），各地的“平话”又有多种称呼。由于内部差异比较大，“平话”的所属问题至今尚无定论。广西境内的“平话”分为“桂北片”和“桂南片”，广西的东北部和湖南搭界，“桂北片平话”和分布在湖南省南部永州、郴州、衡阳等地区类属不明的“湘南土话”有着千丝万缕的联系（鲍厚星（2002、2004）、詹伯慧（2007））。甚至部分地区的“湘南土话”也被冠以“平话”的名称，如“宁远平话”、“关峡平话”等。

虽然邵阳县境内至今未有“湘南土话”的报告，但是“湘南土话”最北端的东安县和邵阳县搭界（图3），这不由让人产生疑问：邵阳县北部的“平话”和“湘南土话”是不是存在某种联系？邵阳地区境内，距离长阳铺100多公里的绥宁县关峡苗族乡也报告有“平话”（胡萍（2005，2006）），那么邵阳县的“平话”和关峡平话是不是同一方言呢？

因为先行研究对邵阳县北部的“平话”缺少系统的考察，仅凭《邵阳县志》中的寥寥数语是无法回答以上问题的。为了寻找答案，我们于2014年5月对

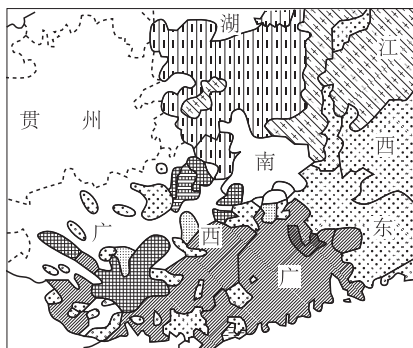


图2 平话的分布区域

（网状线区域。依据游汝杰（2004）制作）

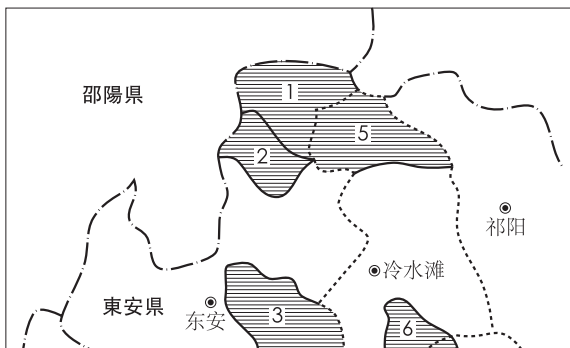


图3 邵阳县和东安县的地理位置

(依据罗昕如(2004)制作)

邵阳县的“平话”进行了一次田野调查，本文就是依据本次调查的结果归纳而成的。

调查地点为岩口铺镇。发音人是岩口铺镇下马石村人，75岁，男，会说接近邵阳市区话的湘方言和“平话”，父母也是本地人，从小在家都说“平话”，没有长期外出的经历。

据该发音人介绍，能说他一样“平话”的村落主要是在岩口铺镇和长阳铺镇。长阳铺镇和岩口铺镇相邻，距离邵阳市区约十来公里。在以下列举的居委会和行政村中（数据引自1993年版《邵阳县志》），划横线的是发音人所知道会说“平话”的村。因为受本次调查时间所限，我们没能对每个村进行使用情况的调查。

岩口铺镇：岩口铺居委会、岩口铺村、丰江村、云里村、油麻井村、新院村、白山村、石脚村、腰古塘村、田桥村、肖家村、小泉村、麦兰村、吊井楼村、梅冲村、渣滩村、厅上村、岩田村、赵门前村、石滩村、梅岭村、洋井村、新田村、下马石村、桃林江村、水花村、竹陂村、石井村、皇安寺村、花桥村、大塘村、油草桥村、白地村。

长阳铺镇：长阳铺居委会、长阳铺村、新铺村、观云村、炭山村、石湾村、荷家边村、高巩桥村、碰田村、柏山村、三巩桥村、泉井村、大坪村、荷叶村、杉木岭村、石塘村、岭上村、大院村、陈家排村、光荣村、积木山村、贯冲村、

竹塘村、秋田村、大埠头村、象山村、石溪村、鸭子村、黄阳坪村、金龙村、龙湾岭村、新立村、白江村、银仙桥村、黄花坪村。

据发音人介绍，他们和外人交流的时候，主要使用和邵阳市区话接近的话。“平话”主要是平时在村子里和家人亲戚使用。目前会说这种土话的人都已经七十岁以上了。“平话”是他们对这种方言的自称，外人过去也把他们的称为“苗话”，而他们把外人说的话（接近邵阳市区话）称为“反话”。据胡萍（2005）介绍，关峡平话也被称为“苗语”，即“苗族的语言”。但实际上无论关峡平话也好，邵阳县平话也好，语音都和中古汉音具有整齐的系统对应，因此排除是“苗族的语言”。

以下，我们首先将在第2节归纳邵阳县平话的声韵调，然后在第3节将邵阳县平话和中古音进行比较，归纳其语音演变的特征。最后在第4节中对邵阳县平话的归属问题进行初步的探讨。考察邵阳县平话的特征时，有必要将它和周边一些方言进行比较，这些方言包括：东安县花桥镇土话（以下略称“花桥

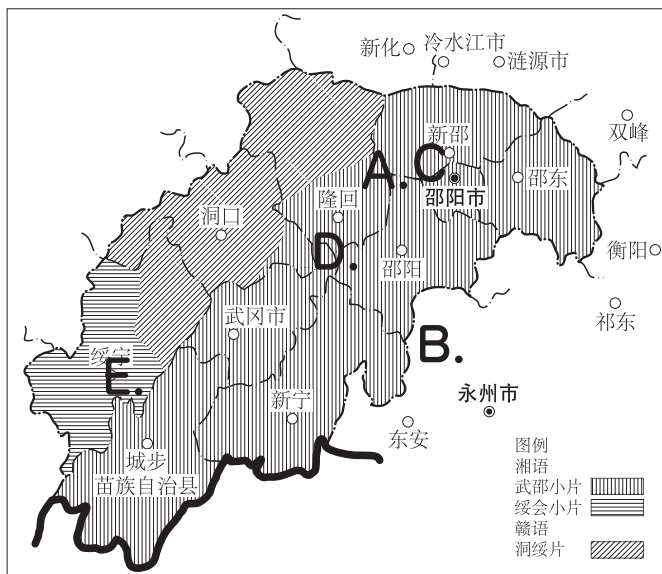


图4 各方言点的地理位置

(依据彭泽润、彭建国(2013)制作)

(A: 岩口铺镇 B: 花桥镇 C: 邵阳市区 D: 蔡桥乡 E: 关峡乡)

土话”，依据鲍厚星（1998）、邵阳市区方言（以下略称“邵阳市区话”，依据储泽祥（1998）、绥宁县关峡苗族乡平话（以下略称“关峡平话”，依据胡萍（2005、2006）、邵阳县蔡桥乡方言（以下略称“蔡桥话”，依据王振宇（2013））。其中关峡平话没有同音字表，仅引用先行研究中的部分分析结果。字音数据中如有文白异读，取白读音。各方言点的地理位置如图4所示。

## 2. 邵阳县平话的声韵调

### 2.1 声母

邵阳县平话的声母一共27个（包括零声母），其中擦音有清音和浊音的对立，如：[f、v]、[s、z]、[ɕ、ʒ]、[x、ɣ]。塞音和塞擦音声母有清音不送气，清音送气，浊音不送气的三分对立，如：[p、p<sup>h</sup>、b]、[t、t<sup>h</sup>、d]、[ts、ts<sup>h</sup>、ɗ]、[tɕ、tɕ<sup>h</sup>、ɗ]、[k、k<sup>h</sup>、g]。[tɕ、tɕ<sup>h</sup>、ɕ]和[i]相拼时实际音值是[tɕ<sup>h</sup>、ɕ<sup>h</sup>、j]。

p 八巴杯边	p <sup>h</sup> 怕票胖片	b 白别皮平	m 梅门毛买	f 富法反风	v 问味坟河
t 多担东中白	t <sup>h</sup> 土天炭铁	d 停洞淡条	n 男娘量冷		
ts 早节汁桌	tɕ <sup>h</sup> 粗切族窗	ɗ 茶财床赚		s 锁小山生	z 字事十寺
tɕ 砖针进张	tɕ <sup>h</sup> 厂七吃抢	ɗ 船钱陈近		ɕ 蛇水笑心	z 石熟上树
k 怪赶减讲	k <sup>h</sup> 快口敲孔	g 葵柜狂共	ŋ 额眼鸭鱼	x 火花好雪	ɣ 坏饭下红
ø 夜月样叶					

### 2.2 韵母

韵母一共有以下27个，由八个元音 [ɿ、i、u、y、a、o、e、ə] 和两个辅音 [n、ŋ] 组成。[ɿ]、[ə]、[n] 都不单独做韵母。[ɿ] 只在 [ts] 组声母后出现，[ə] 只充当主元音，[n] 只做韵尾。[a] 在韵尾 [u、ŋ] 前接近 [ɑ]。[u] 的实际音值是非圆唇的 [u̠]。

i 子做事十	i 西鸡被细	u 读火河粗	y 雨水吹女
a 眼鸭滩白	ia 夜踢石车	ua 欢话看酸	
o 薄饱江霜	io 抢粮羊长		
e 好桃到草	ie 天照晴八		ye 远快砖船
ai 切节铁底		uai 歪怪筷	
ei 杯煤退雷		uei 月盖开雪	
au 厚口楼愁	iau 票招邵庙		
	iaɯ 熟肉流酒		
ɔn 本问能村	in 音镜身认		yn 春云军裙
aŋ 生榜等冷	iaŋ 萤榜等常		
		uŋ 东松孙寸	yŋ 用肿冲虫
ŋ 五木□ <sub>否定词</sub>			

### 2.3 声调

邵阳县平话除去轻声，一共4个调类：阴平、阳平、去声、入声。其最大特点是古上声归阴平和去声，不作为独立的调类存在。保留入声调和邵阳市区话相同。去声因声母的清浊稍有高低的区别，本文从音位的角度考虑，不做阴去、阳去的处理。

阴平	55	歌衣山鸡 / 肉眼买命
阳平	11	皮门停年前活茶床
去声	214	粪放笑洞 / 粉纺醒动
入声	33	切落法八节铁鸭吃



### 3. 邵阳县平话的部分音韵特点

#### 3.1 保留全浊声母

古全浊声母字的辅音在邵阳县平话里今读大多为不送气浊音。这一点也正是周边的娄邵片湘语所具备的重要特征。匣母、禅母的部分字，譬如“学”、“石”在其他的方言点中已经清化，但在邵阳县平话依旧保持浊音声母（“学”的这种读法仅限于“学生”一词）。

表 1 各方言点古全浊声母字的读音

古全浊声母	定母	并母	从母	澄母	崇母	群母	匣母	禅母
例字	大	平	坐	重	柴	桥	厚	上
邵阳县平话	die <sup>214</sup>	bie <sup>11</sup>	dzo <sup>214</sup>	ɗziuŋ <sup>214</sup>	ɗzie <sup>11</sup>	ɗzie <sup>11</sup>	ɣau <sup>214</sup>	zio <sup>214</sup>
花桥土话	die <sup>24</sup>	bio <sup>13</sup>	dzo <sup>24</sup>	din <sup>55</sup>	dza <sup>13</sup>	ɗzie <sup>13</sup>	ɣau <sup>24</sup>	ziü <sup>55</sup>
邵阳市区话	da <sup>24</sup>	bin <sup>12</sup>	dzo <sup>24</sup>	dzun <sup>24</sup>	dza <sup>12</sup>	ɗziəu <sup>12</sup>	ɣəu <sup>24</sup>	zä <sup>24</sup>
蔡桥话	da <sup>13</sup>	bei <sup>11</sup>	dzo <sup>53</sup>	ɗziəŋ <sup>53</sup>	dza <sup>11</sup>	ɗziəu <sup>11</sup>	zy <sup>53</sup>	ziəŋ <sup>53</sup>

表 2 各方言点古全浊声母字的读音（续前表）

全浊声母	定母	并母	从母	澄母	匣母	禅母
例字	读	白	昨	直	学	石
邵阳县平话	du <sup>214</sup>	ba <sup>214</sup>	dza <sup>214</sup>	ɗzi <sup>214</sup>	zio <sup>214</sup>	zia <sup>214</sup>
花桥土话	dau <sup>42</sup>	bo <sup>42</sup>	zo <sup>55</sup>	ɗzi <sup>13</sup>	io <sup>13</sup>	zio <sup>42</sup>
邵阳市区话	du <sup>24</sup>	bɛ <sup>24</sup>	dzo <sup>24</sup>	tsh <sup>24</sup>	ɛio <sup>33</sup>	sa <sup>35</sup>
蔡桥话	du <sup>13</sup>	bie <sup>13</sup>	dzo <sup>13</sup>	ɗzɿ <sup>13</sup>	ɛio <sup>35</sup>	ɛiä <sup>35</sup>

### 3.2 不分尖团

邵阳县平话的古精组声母和见组声母字在今齐齿呼韵母前都读 [tei] 组声母，属不分尖团的方言。这一点和花桥土话、邵阳市区话一致，区别于蔡桥话。

表3 精组、见组声母字的读音

例字	酒	九	集	记	七	气	习	戏
邵阳县平话	teiəu <sup>214</sup>	teiəu <sup>214</sup>	tei <sup>33</sup>	tei <sup>35</sup>	tchi <sup>33</sup>	tchi <sup>214</sup>	ei <sup>33</sup>	ei <sup>214</sup>
花桥土话	teiəu <sup>55</sup>	teiəu <sup>55</sup>	dzi <sup>13</sup>	tei <sup>35</sup>	tchi <sup>42</sup>	ei <sup>35</sup>	ei <sup>42</sup>	ei <sup>35</sup>
邵阳市区话	teiəu <sup>42</sup>	teiəu <sup>42</sup>	tei <sup>33</sup>	tei <sup>35</sup>	tchi <sup>33</sup>	tchi <sup>24</sup>	ei <sup>33</sup>	ei <sup>35</sup>
蔡桥话	tsy <sup>53</sup>	tey <sup>53</sup>	tɕi <sup>35</sup>	tei <sup>35</sup>	tɕhi <sup>55</sup>	tchi <sup>13</sup>	si <sup>35</sup>	ei <sup>35</sup>

### 3.3 蟹摄、假摄、果摄字的读音特点

一些湘方言蟹摄、假摄、果摄的主要元音之间存在连锁变化。蟹摄字的韵尾脱落引起这一连锁变化，为避免同音冲突，假摄字主要元音后元音化或高元音化、果摄字主要元音高元音化或发生裂变。花桥土话和蔡桥话属于三摄元音有连锁变化的方言，而邵阳县平话、邵阳市区话都没有这一连锁变化。邵阳县平话蟹摄开口一二等字和其他几个方言点比较，元音高化现象比较突出。

表4 蟹摄开口一二等字的读音

例字	台	菜	财	开	带	来	柴	买	晒
邵阳县平话	dai <sup>11</sup>	ts <sup>h</sup> ai <sup>214</sup>	dzai <sup>11</sup>	k <sup>h</sup> uei <sup>55</sup>	tie <sup>214</sup>	nie <sup>11</sup>	dzie <sup>11</sup>	mie <sup>55</sup>	sa <sup>214</sup>
花桥土话	dai <sup>13</sup>	ts <sup>h</sup> a <sup>35</sup>	dza <sup>13</sup>	k <sup>h</sup> uei <sup>33</sup>	ta <sup>35</sup>	la <sup>13</sup>	dza <sup>13</sup>	ma <sup>55</sup>	eia <sup>35</sup>
邵阳市区话	dai <sup>12</sup>	ts <sup>h</sup> ai <sup>24</sup>	dzai <sup>12</sup>	k <sup>h</sup> ai <sup>55</sup>	tai <sup>35</sup>	nai <sup>12</sup>	dza <sup>12</sup>	mai <sup>42</sup>	sai <sup>35</sup>
蔡桥话	da <sup>11</sup>	ts <sup>h</sup> a <sup>13</sup>	dza <sup>11</sup>	k <sup>h</sup> a <sup>55</sup>	ta <sup>35</sup>	na <sup>11</sup>	dza <sup>11</sup>	ma <sup>53</sup>	sa <sup>35</sup>

大多数的蟹摄四等字韵母读 [ai]，这点和花桥土话、关峡平话比较一致，

不同于邵阳市区话和蔡桥话。

表5 蟹摄四等字的读音

例字	低	底	弟	剃	犁	齐	洗	米	西
邵阳县平话	tai <sup>55</sup>	tai <sup>214</sup>	dai <sup>214</sup>	tʰai <sup>214</sup>	nai <sup>11</sup>	dzai <sup>11</sup>	sai <sup>214</sup>	mi <sup>55</sup>	ei <sup>55</sup>
花桥土话	tai <sup>33</sup>	tai <sup>55</sup>	dai <sup>24</sup>	tʰai <sup>35</sup>	lai <sup>13</sup>	dzai <sup>13</sup>	sai <sup>55</sup>	mai <sup>55</sup>	sai <sup>33</sup>
邵阳市区话	ti <sup>55</sup>	ti <sup>42</sup>	di <sup>24</sup>	tʰi <sup>24</sup>	ni <sup>12</sup>	ɟzi <sup>12</sup>	ei <sup>42</sup>	mi <sup>42</sup>	ei <sup>55</sup>
蔡桥话	ti <sup>55</sup>	ti <sup>53</sup>	di <sup>13</sup>	tʰi <sup>13</sup>	ni <sup>11</sup>	dzi <sup>11</sup>	si <sup>53</sup>	mi <sup>53</sup>	si <sup>55</sup>

邵阳县平话假摄字的主要元音没有高元音化，这一点和邵阳市区话比较一致。而花桥土话主要元音都高化为 [o]。关峡平话的假摄字也发生了高元音化，如：疤 [po<sup>55</sup>]、麻 [mo<sup>11</sup>]、茶 [dzo<sup>11</sup>]、哑 [o<sup>53</sup>]、花 [xo<sup>44</sup>]、瓦 [o<sup>53</sup>]、写 [sio<sup>53</sup>]。

表6 假摄字的读音

例字	沙	家	下	夜	写	瓦	花
邵阳县平话	sa <sup>55</sup>	ka <sup>55</sup>	ɣa <sup>214</sup>	ia <sup>55</sup>	cia <sup>214</sup>	ua <sup>55</sup>	xua <sup>55</sup>
花桥土话	so <sup>33</sup>	ko <sup>33</sup>	ɣo <sup>55</sup>	io <sup>35</sup>	cio <sup>55</sup>	ŋo <sup>55</sup>	xo <sup>33</sup>
邵阳市区话	sa <sup>55</sup>	ka <sup>55</sup>	zia <sup>24</sup>	ia <sup>35</sup>	eiɛ <sup>42</sup>	ua <sup>42</sup>	fɑ <sup>55</sup>
蔡桥话	sa <sup>55</sup>	ka <sup>55</sup>	ɣa <sup>53</sup>	ia <sup>55</sup>	sia <sup>53</sup>	ua <sup>53</sup>	xua <sup>55</sup>

邵阳县平话果摄一部分字的主要元音是 [o]，一部分字高化为 [u]。花桥土话果摄字的高化为 [u] 的范围更大。邵阳市区化都读 [o]。蔡桥话果摄字的主要元音都高化为 [ɔ]。

表7 果摄字的读音

例字	多	坐	课	河	禾	火	锅
邵阳县平话	to <sup>55</sup>	dzo <sup>214</sup>	k <sup>h</sup> o <sup>214</sup>	vu <sup>11</sup>	vu <sup>11</sup>	xu <sup>214</sup>	ku <sup>55</sup>
花桥土话	tu <sup>33</sup>	dzu <sup>55</sup>	k <sup>h</sup> o <sup>35</sup>	vu <sup>13</sup>	vu <sup>13</sup>	fu <sup>55</sup>	ku <sup>33</sup>
邵阳市区话	to <sup>55</sup>	dzo <sup>24</sup>	k <sup>h</sup> o <sup>24</sup>	ɣo <sup>12</sup>	ɣo <sup>12</sup>	xo <sup>42</sup>	ko <sup>55</sup>
蔡桥话	tɔ <sup>55</sup>	dzɔ <sup>53</sup>	k <sup>h</sup> ɔ <sup>13</sup>	ɣɔ <sup>11</sup>	ɣɔ <sup>11</sup>	xɔ <sup>53</sup>	kɔ <sup>55</sup>

## 3.4 效摄字的读音特点

邵阳县平话的效摄字韵母存在元音高化的现象，一二等字韵母主要有 [e] (表8)、[o] (表9)、[au] (表10) 三种读音，三四等字韵母主要读 [ie] (表11)、[iau] (表12)。其中 [au]、[iau] 读音的字多为非日常生活用字，在邵阳市区话中也多读 [au]、[iau]。花桥土话中有文白异读的情况下，一般文读 [au]，白读 [ei]。关峡平话的效摄一二等韵有别，一等读 [ei]，二等读 [au]。

表8 效摄一二等字的读音 (1/3)

例字	毛	宝	讨	到	脑	创	茅	牢	跑
邵阳县平话	me <sup>11</sup>	pe <sup>214</sup>	t <sup>h</sup> e <sup>214</sup>	te <sup>214</sup>	ne <sup>24</sup>	be <sup>11</sup>	me <sup>11</sup>	ne <sup>11</sup>	p <sup>h</sup> e <sup>214</sup>
花桥土话	mei <sup>35</sup>	pei <sup>55</sup>	t <sup>h</sup> ei <sup>55</sup>	tei <sup>35</sup>	nei <sup>55</sup>	bei <sup>13</sup>	mu <sup>13</sup>	lau <sup>13</sup>	p <sup>h</sup> au <sup>55</sup>
邵阳市区话	mau <sup>12</sup>	pau <sup>42</sup>	t <sup>h</sup> au <sup>42</sup>	tau <sup>35</sup>	nau <sup>42</sup>	bau <sup>12</sup>	mau <sup>12</sup>	nau <sup>12</sup>	p <sup>h</sup> au <sup>42</sup>
蔡桥话	məu <sup>11</sup>	bəu <sup>53</sup>	təu <sup>53</sup>	təu <sup>35</sup>	nəu <sup>53</sup>	bəu <sup>11</sup>	məu <sup>11</sup>	nəu <sup>11</sup>	p <sup>h</sup> əu <sup>11</sup>

表9 效摄一二等字的读音 (2/3)

例字	告	淘	炒	饱	罩	炮
邵阳县平话	ko <sup>214</sup>	do <sup>11</sup>	ts <sup>h</sup> o <sup>214</sup>	po <sup>214</sup>	tso <sup>214</sup>	p <sup>h</sup> o <sup>214</sup>
花桥土话	kei <sup>35</sup>	dei <sup>13</sup>	ts <sup>h</sup> u <sup>55</sup>	pu <sup>55</sup>	tsu <sup>35</sup>	p <sup>h</sup> au <sup>35</sup>
邵阳市区话	kau <sup>35</sup>	dau <sup>12</sup>	ts <sup>h</sup> au <sup>42</sup>	pau <sup>42</sup>	tsau <sup>35</sup>	p <sup>h</sup> au <sup>24</sup>
蔡桥话	kəu <sup>35</sup>	dəu <sup>11</sup>	tsəu <sup>53</sup>	pəu <sup>53</sup>	tsəu <sup>35</sup>	p <sup>h</sup> əu <sup>13</sup>

表10 效摄一二等字的读音(3/3)

例字	帽	套	嫂	皂	找	孝	报	靠
邵阳县平话	mau <sup>214</sup>	t <sup>h</sup> au <sup>214</sup>	sau <sup>214</sup>	dzau <sup>214</sup>	tsau <sup>214</sup>	xau <sup>214</sup>	pau <sup>214</sup>	k <sup>h</sup> au <sup>214</sup>
花桥土话	mau <sup>35</sup>	t <sup>h</sup> au <sup>35</sup>	sau <sup>55</sup>	dzau <sup>24</sup>	tsau <sup>55</sup>	ɣau <sup>35</sup>	pei <sup>35</sup>	k <sup>h</sup> ei <sup>35</sup>
邵阳市区话	mau <sup>35</sup>	t <sup>h</sup> au <sup>24</sup>	sau <sup>42</sup>	dzau <sup>12</sup>	tsau <sup>42</sup>	ɛiau <sup>35</sup>	pau <sup>35</sup>	k <sup>h</sup> au <sup>214</sup>
蔡桥话	məu <sup>55</sup>	t <sup>h</sup> əu <sup>24</sup>	səu <sup>53</sup>	dzəu <sup>24</sup>	tsəu <sup>53</sup>	xəu <sup>35</sup>	pəu <sup>35</sup>	k <sup>h</sup> əu <sup>24</sup>

表11 效摄三四等字的读音(1/2)

例字	笑	叫	烧	少 <sub>多少</sub>	桥	轿	照	瓢	消
邵阳县平话	ɛie <sup>214</sup>	teie <sup>35</sup>	ɛie <sup>55</sup>	ɛie <sup>214</sup>	ɟie <sup>11</sup>	ɟie <sup>214</sup>	teie <sup>214</sup>	bie <sup>11</sup>	ɛie <sup>55</sup>
花桥土话	ɛie <sup>35</sup>	teie <sup>35</sup>	ɛie <sup>33</sup>	ɛie <sup>55</sup>	ɟie <sup>13</sup>	ɟie <sup>24</sup>	teiau <sup>35</sup>	biau <sup>13</sup>	ɛiau <sup>33</sup>
邵阳市区话	ɛiau <sup>35</sup>	teiau <sup>35</sup>	sau <sup>55</sup>	sau <sup>53</sup>	ɟiau <sup>12</sup>	ɟiau <sup>24</sup>	tsau <sup>35</sup>	biau <sup>12</sup>	ɛiau <sup>55</sup>
蔡桥话	sy <sup>35</sup>	teiau <sup>35</sup>	ɛiau <sup>55</sup>	ɛiau <sup>53</sup>	ɟiau <sup>11</sup>	ɟiau <sup>13</sup>	teiau <sup>35</sup>	by <sup>11</sup>	sy <sup>55</sup>

表12 效摄三四等字的读音(2/2)

例字	庙	招	表	邵	尿	票	浇	摇	妖
邵阳县平话	miau <sup>214</sup>	teiau <sup>55</sup>	ɣiau <sup>214</sup>	ɛiau <sup>214</sup>	niau <sup>214</sup>	phiau <sup>214</sup>	teiau <sup>55</sup>	ziau <sup>11</sup>	iau <sup>55</sup>
花桥土话	mie <sup>35</sup>	teiau <sup>33</sup>	ɣiau <sup>55</sup>	ɛiau <sup>35</sup>	niau <sup>24</sup>	phiau <sup>35</sup>	teiau <sup>33</sup>	iau <sup>13</sup>	iau <sup>33</sup>
邵阳市区话	miau <sup>35</sup>	tsau <sup>55</sup>	ɣiau <sup>42</sup>	sau <sup>35</sup>	niau <sup>35</sup>	phiau <sup>24</sup>	teiau <sup>55</sup>	ziau <sup>12</sup>	iau <sup>55</sup>
蔡桥话	my <sup>55</sup>	teiau <sup>55</sup>	py <sup>53</sup>	ɛiau <sup>35</sup>	iəu <sup>55</sup>	phy <sup>13</sup>	teiau <sup>55</sup>	ziau <sup>11</sup>	iəu <sup>55</sup>

### 3.5 流摄字的读音特点

邵阳县平话的流摄字一等字韵母主要读 [au] (表13)、三等字韵母少数读 [au] (表14)、大部分读 [iəu] (表15)。如上节所述,效摄部分字(非日常用字居多)韵母也读 [au],因此流摄字和效摄字的韵母相混。此外,关峡平话流摄字中大部分日常生活用字白读为 [au],文读为 [ou]。

表 13 流摄一等字的读音

例字	斗 <sub>动词</sub>	偷	豆	漏	走	狗	够	口	厚
邵阳县平话	tau <sup>214</sup>	thau <sup>55</sup>	dau <sup>214</sup>	nau <sup>55</sup>	tsau <sup>214</sup>	kau <sup>214</sup>	kau <sup>214</sup>	khau <sup>214</sup>	ɣau <sup>214</sup>
花桥土话	tau <sup>35</sup>	thau <sup>33</sup>	dau <sup>24</sup>	lau <sup>35</sup>	tsau <sup>55</sup>	kau <sup>55</sup>	kəu <sup>35</sup>	khau <sup>35</sup>	ɣau <sup>24</sup>
邵阳市区话	təu <sup>35</sup>	thəu <sup>55</sup>	dəu <sup>24</sup>	nəu <sup>35</sup>	tsəu <sup>42</sup>	kəu <sup>42</sup>	kəu <sup>35</sup>	khəu <sup>42</sup>	ɣəu <sup>24</sup>
蔡桥话	ty <sup>35</sup>	thy <sup>55</sup>	diəu <sup>13</sup>	ny <sup>55</sup>	tsy <sup>53</sup>	ky <sup>53</sup>	ky <sup>35</sup>	khy <sup>53</sup>	zy <sup>53</sup>

表 14 流摄三等字的读音 (1 / 2)

例字	馊	瘦	愁	阄	牛
邵阳县平话	sau <sup>55</sup>	sau <sup>214</sup>	dzau <sup>11</sup>	kau <sup>55</sup>	ŋau <sup>11</sup>
花桥土话	sau <sup>33</sup>	sau <sup>35</sup>	zau <sup>13</sup>	kau <sup>33</sup>	ŋau <sup>13</sup>
邵阳市区话	səu <sup>55</sup>	səu <sup>35</sup>	dzəu <sup>12</sup>	kəu <sup>55</sup>	niəu <sup>12</sup>
蔡桥话	sy <sup>55</sup>	sy <sup>35</sup>	dzy <sup>11</sup>	ky <sup>55</sup>	niəŋ <sup>11</sup>

表 15 流摄三字的读音 (2 / 2)

例字	流	酒	抽	绸	臭	手	九	右
邵阳县平话	niəu <sup>11</sup>	teiəu <sup>214</sup>	tchiəu <sup>55</sup>	dziəu <sup>11</sup>	tchiəu <sup>214</sup>	ciəu <sup>214</sup>	teiəu <sup>214</sup>	iəu <sup>214</sup>
花桥土话	liəu <sup>13</sup>	teiəu <sup>55</sup>	tchiəu <sup>33</sup>	dziəu <sup>13</sup>	tchiəu <sup>35</sup>	ciəu <sup>55</sup>	teiəu <sup>55</sup>	iəu <sup>35</sup>
邵阳市区话	niəu <sup>12</sup>	teiəu <sup>42</sup>	tshəu <sup>55</sup>	dzəu <sup>12</sup>	tshəu <sup>24</sup>	səu <sup>42</sup>	teiəu <sup>42</sup>	iəu <sup>35</sup>
蔡桥话	ny <sup>11</sup>	tsy <sup>53</sup>	tchy <sup>55</sup>	dzy <sup>11</sup>	tchy <sup>13</sup>	ey <sup>53</sup>	tey <sup>53</sup>	y <sup>55</sup>

### 3.6 臻摄、曾摄舒声字的读音特点

邵阳县平话的部分臻摄、曾摄舒声字的字音比较特殊。如表16和表17所示，部分臻摄、曾摄舒声字韵母读 [aŋ]，和梗摄开口二等字合流（表18）。花桥土话臻摄、曾摄舒声字读 [aŋ]，但大部分梗摄舒声字，如“坑、生、冷”都已经鼻音韵尾脱落、主元音高化，臻摄、曾摄和梗摄之间没有完全合流。

表 16 臻摄舒声字和梗摄舒声字的读音

例字	臻摄舒声字				梗摄舒声字			
	门	蚊	很	根	硬	坑	生	冷
邵阳县平话	maŋ <sup>11</sup>	maŋ <sup>55</sup>	xaŋ <sup>214</sup>	kaŋ <sup>55</sup>	ŋaŋ <sup>55</sup>	kaŋ <sup>55</sup>	saŋ <sup>55</sup>	naŋ <sup>55</sup>
花桥土话	maŋ <sup>13</sup>	maŋ <sup>13</sup>	ɣaŋ <sup>55</sup>	kaŋ <sup>33</sup>	ŋaŋ <sup>35</sup>	ko <sup>33</sup>	so <sup>33</sup>	lo <sup>55</sup>
邵阳市区话	mən <sup>12</sup>	vən <sup>12</sup>	xən <sup>42</sup>	kən <sup>55</sup>	ŋən <sup>35</sup>	khən <sup>55</sup>	sən <sup>55</sup>	nən <sup>42</sup>
蔡桥话	mei <sup>11</sup>	mei <sup>35</sup>	xei <sup>53</sup>	kei <sup>55</sup>	ŋaŋ <sup>55</sup>	kaŋ <sup>55</sup>	saŋ <sup>55</sup>	naŋ <sup>53</sup>

表 17 曾摄舒声字的读音

例字	层	藤	灯	肯	等	凳
邵阳县平话	dzaŋ <sup>11</sup>	daŋ <sup>11</sup>	taŋ <sup>55</sup>	kaŋ <sup>214</sup>	taŋ <sup>214</sup>	taŋ <sup>214</sup>
花桥土话	dzaŋ <sup>13</sup>	daŋ <sup>13</sup>	taŋ <sup>33</sup>	kaŋ <sup>55</sup>	taŋ <sup>55</sup>	taŋ <sup>35</sup>
邵阳市区话	dzən <sup>12</sup>	dən <sup>12</sup>	tən <sup>55</sup>	khən <sup>42</sup>	tən <sup>42</sup>	tən <sup>35</sup>
蔡桥话	dzei <sup>11</sup>	dei <sup>55</sup>	tei <sup>55</sup>	khei <sup>53</sup>	tei <sup>53</sup>	tei <sup>35</sup>

再如表 18 所示,邵阳县平话还有一部分臻摄舒声字韵母读 [uŋ],和通摄合口一三等字合流。花桥土话臻摄舒声字韵母有 [uŋ]、[aŋ]、[ən] 三种读音,部分和通摄合口一三等字 [uŋ] 合流。此外,关峡平话的臻摄、曾摄的字音也具有这一特征:梗摄开口二等白读和通摄合口一等白读合流读 [aŋ];臻摄合口一三等白读和通摄合口一三等部分字合流读 [oŋ] (胡萍 (2006))。

表 18 臻摄舒声字和通摄舒声字的读音

例字	臻摄舒声字					通摄舒声字				
	盆	嫩	孙	寸	笋	风	红	桶	送	东
邵阳县平话	buŋ <sup>11</sup>	nuŋ <sup>55</sup>	suŋ <sup>55</sup>	tshuŋ <sup>214</sup>	suŋ <sup>214</sup>	fuŋ <sup>55</sup>	ɣuŋ <sup>11</sup>	thuŋ <sup>214</sup>	suŋ <sup>214</sup>	tuŋ <sup>55</sup>
花桥土话	baŋ <sup>13</sup>	nuŋ <sup>35</sup>	suŋ <sup>33</sup>	tshuŋ <sup>35</sup>	sən <sup>55</sup>	fuŋ <sup>33</sup>	ɣuŋ <sup>13</sup>	thaŋ <sup>55</sup>	saŋ <sup>35</sup>	taŋ <sup>33</sup>
邵阳市区话	bən <sup>12</sup>	nən <sup>35</sup>	sən <sup>55</sup>	tshən <sup>24</sup>	sən <sup>42</sup>	xuŋ <sup>55</sup>	ɣuŋ <sup>12</sup>	thuŋ <sup>42</sup>	suŋ <sup>35</sup>	tuŋ <sup>55</sup>
蔡桥话	bei <sup>11</sup>	nuei <sup>55</sup>	suei <sup>35</sup>	tshuei <sup>55</sup>	suei <sup>53</sup>	fəŋ <sup>55</sup>	ɣəŋ <sup>11</sup>	thəŋ <sup>53</sup>	səŋ <sup>35</sup>	təŋ <sup>55</sup>

## 3.7 鼻音韵尾脱落

邵阳县平话的咸摄字、山摄字、宕摄字、江摄字、梗摄字普遍存在鼻音韵尾脱落的现象。咸摄开口一二等字的主元音读 [a] 三四等字的主元音读 [e]。山摄开口一二等字的主元音读 [a]，三四等字的主元音读 [e]。鼻音韵尾脱落的现象也是花桥土话的特色之一，但是不同于邵阳县平话的是花桥土话的不少咸摄和山摄开口一二等字存在主要元音高化的现象 (\*a>o、\*a>e)。

表 19 咸摄一二等字的读音

例字	喊	减	暗	胆	南	三	衫	淡	蚕	站
邵阳县平话	xa <sup>214</sup>	ka <sup>214</sup>	ŋa <sup>55</sup>	ta <sup>214</sup>	na <sup>11</sup>	sa <sup>55</sup>	sa <sup>55</sup>	da <sup>214</sup>	dza <sup>11</sup>	tsa <sup>214</sup>
花桥土话	xa <sup>55</sup>	ka <sup>55</sup>	ŋa <sup>35</sup>	to <sup>55</sup>	no <sup>13</sup>	so <sup>33</sup>	so <sup>33</sup>	do <sup>55</sup>	dzan <sup>13</sup>	tsan <sup>35</sup>
邵阳市区话	xã <sup>53</sup>	kã <sup>53</sup>	ŋã <sup>35</sup>	tã <sup>53</sup>	nã <sup>11</sup>	sã <sup>55</sup>	sã <sup>55</sup>	dã <sup>53</sup>	dzã <sup>11</sup>	xã <sup>35</sup>
蔡桥话	xã <sup>53</sup>	kã <sup>53</sup>	ŋã <sup>35</sup>	tã <sup>53</sup>	nã <sup>11</sup>	sã <sup>55</sup>	sã <sup>55</sup>	dã <sup>53</sup>	dzã <sup>11</sup>	xã <sup>35</sup>

表 20 咸摄三四等字的读音

例字	闪	尖	盐	欠	甜
邵阳县平话	eie <sup>55</sup>	teie <sup>55</sup>	zie <sup>11</sup>	te <sup>h</sup> ie <sup>214</sup>	die <sup>11</sup>
花桥土话	eie <sup>55</sup>	teie <sup>33</sup>	ie <sup>13</sup>	te <sup>h</sup> ie <sup>35</sup>	die <sup>13</sup>
邵阳市区话	zã <sup>53</sup>	teiẽ <sup>55</sup>	ziẽ <sup>12</sup>	te <sup>h</sup> ie <sup>35</sup>	diẽ <sup>12</sup>
蔡桥话	eie <sup>53</sup>	tsi <sup>55</sup>	zi <sup>11</sup>	te <sup>h</sup> i <sup>13</sup>	di <sup>11</sup>

表 21 山摄开合口一二等字的读音

例字	开口一二等						合口一二等字					
	寒	慢	眼	山	伞	炭	关	端	宽	酸	完	短
邵阳县平话	ya <sup>11</sup>	ma <sup>55</sup>	ŋa <sup>55</sup>	sa <sup>55</sup>	sa <sup>214</sup>	t <sup>h</sup> a <sup>214</sup>	kua <sup>55</sup>	tua <sup>55</sup>	k <sup>h</sup> ua <sup>55</sup>	sua <sup>55</sup>	yua <sup>11</sup>	tua <sup>214</sup>
花桥土话	yan <sup>13</sup>	ma <sup>35</sup>	ŋa <sup>55</sup>	sa <sup>33</sup>	sa <sup>55</sup>	t <sup>h</sup> a <sup>35</sup>	xua <sup>33</sup>	tue <sup>33</sup>	k <sup>h</sup> ue <sup>33</sup>	sue <sup>33</sup>	ye <sup>13</sup>	tue <sup>55</sup>
邵阳市区话	yã <sup>12</sup>	mã <sup>35</sup>	ŋã <sup>42</sup>	sã <sup>55</sup>	sã <sup>42</sup>	t <sup>h</sup> ã <sup>24</sup>	kuã <sup>55</sup>	tũa <sup>55</sup>	k <sup>h</sup> ũa <sup>55</sup>	sũa <sup>55</sup>	zyẽ <sup>12</sup>	tũa <sup>42</sup>
蔡桥话	yã <sup>11</sup>	mã <sup>55</sup>	ŋã <sup>53</sup>	sã <sup>55</sup>	sã <sup>53</sup>	t <sup>h</sup> ã <sup>13</sup>	kũ <sup>55</sup>	tũ <sup>55</sup>	k <sup>h</sup> ũ <sup>55</sup>	sũ <sup>55</sup>	zye <sup>11</sup>	tũ <sup>53</sup>



表 22 山摄开口三四等字的读音

	开口三四等						合口三四等					
	棉	钱	前	剪	田	片	元	砖	远	船	劝	选
邵阳县平话	mie <sup>11</sup>	dzie <sup>11</sup>	dzie <sup>11</sup>	teie <sup>214</sup>	die <sup>11</sup>	p <sup>h</sup> ie <sup>214</sup>	zye <sup>11</sup>	teye <sup>55</sup>	ye <sup>55</sup>	ɟye <sup>11</sup>	te <sup>h</sup> ye <sup>214</sup>	e <sup>h</sup> ye <sup>214</sup>
花桥土话	mie <sup>13</sup>	zie <sup>13</sup>	zie <sup>13</sup>	teie <sup>55</sup>	die <sup>13</sup>	p <sup>h</sup> ie <sup>35</sup>	yē <sup>33</sup>	teyē <sup>33</sup>	yē <sup>55</sup>	ɟye <sup>13</sup>	te <sup>h</sup> ye <sup>35</sup>	e <sup>h</sup> ye <sup>55</sup>
邵阳市区话	miē <sup>12</sup>	dziē <sup>12</sup>	dziē <sup>12</sup>	teie <sup>42</sup>	diē <sup>12</sup>	p <sup>h</sup> iē <sup>24</sup>	zyē <sup>12</sup>	teyē <sup>55</sup>	yē <sup>42</sup>	ɟyē <sup>12</sup>	te <sup>h</sup> yē <sup>24</sup>	e <sup>h</sup> yē <sup>42</sup>
蔡桥话	mī <sup>11</sup>	dzi <sup>11</sup>	dzi <sup>11</sup>	tsī <sup>53</sup>	dī <sup>11</sup>	p <sup>h</sup> ī <sup>13</sup>	zye <sup>11</sup>	teye <sup>55</sup>	ye <sup>53</sup>	ɟye <sup>11</sup>	te <sup>h</sup> ye <sup>13</sup>	sye <sup>53</sup>

在鼻音韵尾脱落这点上，关峡平话也和邵阳县平话及花桥土话一致，在主要元音高化的特征上和花桥土话一致。以下是关峡平话的字音。

- ① 咸摄开口一二等字的主元音：[o] 蚕，男，胆，担，蓝，三，喊，杉，咸；[ou] 含
- ② 咸摄开口三四等字的主元音：[ɛ] 尖，签，甜，点；[iɛ] 盐，剑
- ③ 山摄开口一二等字的主元音：[o] 单，难，看，汗，散，烂，端，绊；[u] 官，碗；  
[ou] 鼾，酸，算，蒜，断
- ④ 山摄开口三四等字的主元音：[ɛ] 煎，钱，剪，线，鲜，天，田，典，先；  
[iɛ] 缠，燃，扇，见，烟；[ye] 拳，船，串，渊

邵阳县平话的宕摄字鼻音韵尾也发生了脱落，并且主元音高化，读 [o]。关峡平话的主要元音也发生了高化，读 [u]，其变化的阶段和邵阳县平话最为接近。在这点上，蔡桥话的音韵变化最为保守，保持着中古汉语的 -ŋ 韵尾。而花桥土话部分变成鼻化韵，变化阶段介于邵阳县平话和蔡桥话之间。

表 23 宕摄舒声字的读音

例字	汤	糖	娘	量 (动词)	枪	抢	墙	像
邵阳县平话	t <sup>h</sup> o <sup>55</sup>	do <sup>11</sup>	nio <sup>11</sup>	nio <sup>11</sup>	te <sup>h</sup> io <sup>55</sup>	te <sup>h</sup> io <sup>214</sup>	dzio <sup>11</sup>	dzio <sup>214</sup>
花桥土话	t <sup>h</sup> uŋ <sup>33</sup>	duŋ <sup>13</sup>	ŋiū <sup>13</sup>	ŋiū <sup>13</sup>	te <sup>h</sup> iū <sup>33</sup>	te <sup>h</sup> iū <sup>55</sup>	dziū <sup>13</sup>	dziū <sup>35</sup>
邵阳市区话	t <sup>h</sup> ā <sup>55</sup>	dā <sup>12</sup>	niā <sup>12</sup>	niā <sup>12</sup>	te <sup>h</sup> iā <sup>55</sup>	te <sup>h</sup> iā <sup>42</sup>	dziā <sup>12</sup>	dziā <sup>24</sup>
蔡桥话	t <sup>h</sup> aŋ <sup>55</sup>	daŋ <sup>11</sup>	nian <sup>11</sup>	nian <sup>11</sup>	ts <sup>h</sup> ian <sup>55</sup>	ts <sup>h</sup> ian <sup>53</sup>	dzian <sup>11</sup>	dzian <sup>13</sup>

同样，邵阳县平话江摄字的鼻音韵尾都发生了脱落。相比之下，花桥土话仅仅部分字脱落鼻音韵尾，而蔡桥话几乎都保持鼻音韵尾，邵阳市区话都变成了鼻化韵。关峡平话中的江摄二等字读 [ou]，在鼻音韵尾脱落这一特点上和邵阳县平话接近。

表 24 江摄字的读音

例字	江	讲	撞	双	窗
邵阳县平话	ko <sup>55</sup>	ku <sup>214</sup>	ts <sup>h</sup> ua <sup>214</sup>	sua <sup>55</sup>	ts <sup>h</sup> ua <sup>55</sup>
花桥土话	ko <sup>33</sup>	ko <sup>55</sup>	dzuŋ <sup>55</sup>	suŋ <sup>33</sup>	ts <sup>h</sup> uŋ <sup>33</sup>
邵阳市区话	teiã <sup>55</sup>	kã <sup>42</sup>	dzuã <sup>24</sup>	suã <sup>55</sup>	ts <sup>h</sup> uã <sup>55</sup>
蔡桥话	kaŋ <sup>55</sup>	kaŋ <sup>53</sup>	dzaŋ <sup>13</sup>	sũ <sup>55</sup>	ts <sup>h</sup> aŋ <sup>55</sup>

邵阳县平话的梗摄二等字保持鼻音韵尾 [ŋ]，三四等字发生了鼻音韵尾脱落的变化，主元音读 [e]，这一变化和关峡平话一致。而花桥土话无论二等字还是三四等字，不仅韵尾脱落而且主要元音高元音化为 [o]。

①（关峡平话）梗摄二等字的母音：[aŋ] 冷，生，坑，硬

②（关峡平话）梗摄三四等字的母音：[ɛ] 井，晴，颈，姓，星，病，钉，零，青

表 25 梗摄舒声字的读音

例字	二等字				三四等字					
	硬	生	冷	争	平	命	晴	青	腥	钉 (名词)
邵阳县平话	ŋaŋ <sup>55</sup>	saŋ <sup>55</sup>	naŋ <sup>55</sup>	tsaŋ <sup>55</sup>	bie <sup>11</sup>	mie <sup>55</sup>	dzie <sup>11</sup>	te <sup>h</sup> ie <sup>55</sup>	ɛie <sup>55</sup>	tie <sup>55</sup>
花桥土话	ŋaŋ <sup>35</sup>	so <sup>33</sup>	lo <sup>55</sup>	tso <sup>33</sup>	bio <sup>13</sup>	mio <sup>35</sup>	zio <sup>13</sup>	te <sup>h</sup> io <sup>33</sup>	ɛio <sup>33</sup>	tio <sup>33</sup>
邵阳市区话	ŋən <sup>35</sup>	sən <sup>42</sup>	nən <sup>42</sup>	tsən <sup>55</sup>	bin <sup>12</sup>	min <sup>35</sup>	dzin <sup>12</sup>	te <sup>h</sup> in <sup>55</sup>	ɛin <sup>55</sup>	tin <sup>55</sup>
蔡桥话	ŋaŋ <sup>55</sup>	saŋ <sup>55</sup>	naŋ <sup>53</sup>	tsaŋ <sup>55</sup>	biaŋ <sup>11</sup>	miaŋ <sup>55</sup>	dziaŋ <sup>11</sup>	ts <sup>h</sup> iaŋ <sup>55</sup>	siaŋ <sup>55</sup>	tiaŋ <sup>55</sup>

### 3.8 声调的特点

邵阳县平话声调演变中最具特征的是古上声失去独立调类的现象。古上声字在邵阳县平话中失去独立的调类，混入阴平和去声。其规律为次浊声母字混入阴平，次浊以外声母字混入去声。如下表所示，花桥土话、邵阳市区话、蔡桥话都没有这一现象。据胡萍（2006）的报告，在关峡平话中有部分浊去字并入阴平，并举例：步、鼻、字、自、树、芋、癩、骂、话、放、汗、味、夜、射、画、面、代、妹、用、万、饭、让、就、豆。

表26 古声调在各方言的调类（小字表示少数）

	古平声	古上声	古去声	古入声
邵阳县平话	阴平、阳平	阴平、去声	去声 阴平	入声、去声 阴平
花桥土话	阴平、阳平	上声	阴去、阳去	入声、阴平、阳平
邵阳市区话	阴平、阳平 阴去	上声 阴平、阴去	阴去、阳去 阴平、阳平、上声	入声、阴去 阴平、上声、阳去
蔡桥话	阴平、阳平	上声、阳去	阴去、阳去 阴平	阴平、阳去、阴去

## 4. 结语

通过以上对邵阳县平话几个音韵特征的描述可以得知：在古全浊声母的保留等方面，邵阳县平话和邵阳市区话、蔡桥话等周边湘语有共通之处，但是在鼻音韵尾脱落、主要元音高化等更多方面，邵阳县平话不同于周边湘语，而和绥宁关峡平话、东安花桥土话是一致的。我们认为邵阳县平话和关峡平话以及广泛分布在湖南省南部永州、郴州一带的诸多“湘南土话”属于同一种方言。迄今为止，“湘南土话”中分布最北的方言点被认为是位于东安县境内。邵阳县平话的定位可以使“湘南土话”的分布位置往北挪至邵阳县北。

那么在邵阳县北，这块属于湘语娄邵片武邵小片的地区里，为什么会有这种迥然不同的方言呢？可以考虑三种可能性：第一种可能性是说邵阳县平话的住民从永州等湘南土话区移民到邵阳县北，将“湘南土话”带到了湘语区。第二种可能性是邵阳县北一带本来也是说平话的地区，也就是说，湘南土话区在过去范围更大，是一个将邵阳县北和永州、郴州等地连成一体、势力强大的“大湘南土话区”。第三种可能性是邵阳县平话和永州等地的湘南土话同是从外地带来的“移民的语言”，一部分移民留在了邵阳县北，另一部分（大部分）移民则继续往南进入湘南地区住下。各自又和所在区域的“共通语”并用，譬如，邵阳县平话和接近邵阳市区话的湘语并用，湘南土话和属于西南官话的共通语并用。

至于“湘南土话”的归属问题，鲍厚星先生主张将存在诸多内部分歧的“湘南土话”进行分割，区别对待，并指出“东安型湘南土话”在保留浊音系统方面和娄邵片湘语有高度一致性，应该划入湘语（鲍厚星（2002））。《中国语言地图集》（第2版）将永州和东安的“湘南土话”划入了湘语永全片的东祁小片。罗昕如（2004）从词汇特征的角度也同意鲍先生的意见，指出东安等“边缘区的土话宜划入与之相邻的湘语和客赣语”。如果依照鲍先生的观点，邵阳县土话应当属于湘语东祁小片。

不论“湘南土话”的归属如何，邵阳县平话作为一种颇具特色的方言在湘语娄邵片方言的“重重包围”中绽放异彩，如今又深陷濒临消灭的危境之中确是事实。

#### 〔引用文献〕

- 鲍厚星（1998）《东安土话研究》。湖南教育出版社。  
 鲍厚星（2002）《湘南东安型土话的系属》。《方言》2002（3）。  
 鲍厚星（2004）《湘南土话系属问题》。《方言》2004（4）。  
 陈晖、鲍厚星（2007）《湖南省的汉语方言（稿）》。《方言》2007年（3）。  
 储泽祥（1998）《邵阳方言研究》。湖南教育出版社。  
 胡萍（2005）《试论绥宁“关峡平话”的系属》。《邵阳学院学报（社会科学版）》。  
 胡萍（2006）《绥宁（关峡）苗族“平话”的语音特点》。《湘潭师范学院学报（社

- 会科学版)》第28卷第1期。
- 梁敏、张均如(1999)《广西平话概论》。《方言》1999(1)。
- 罗昕如(2004)《湘南土话词汇研究》。中国社会科学出版社。
- 彭泽润、彭建国(2013)《湖南方言》。湖南教育出版社。
- 邵阳县志编纂委员会编(1993)《邵阳县志》。社会科学文献出版社。
- 王福堂(2001)《平话、湘南土话和粤北土话的归属》。《方言》2001(2)。
- 杨再彪(2011)《湖南西部四种濒危语言调查》。民族出版社。
- 袁家骅(1960)《汉语方言概要》。北京文字改革出版社。
- 游汝杰(2004)《汉语方言学教程》。上海教育出版社。
- 詹伯慧(2001)《广西“平话”问题刍议》。《语言研究》2001(2)。
- 詹伯慧、崔淑慧、刘新中、杨蔚(2003)《关于广西“平话”的归属问题》。《语文研究》2003年(3)。
- 詹伯慧(2007)《对“平话”问题的再认识》。《贺州学院学报》第23卷第1期。
- 中国社会科学院·澳大利亚人文科学院合编(1987-1989)《中国语言地图集》。香港：朗文出版公司。
- 中国社会科学院·香港城市大学(2012)《中国语言地图集》(第2版)。商务印书馆。
- 王振宇(2009)「湘語蔡橋方言の音韻体系」『ポリグロシア 言語と言語教育—アジア太平洋の声』第17巻。立命館アジア太平洋研究センター。
- 王振宇(2013)『湘語蔡橋方言の研究』。好文出版。

### 〔付記〕

本稿は日本学術振興会の科学研究費補助金による若手研究(B)「中国湘語邵陽縣方言の記述的研究」(課題番号:26770152、研究代表者:王振宇)の研究成果の一部である。

